歐人の眼に映じたる日露戰爭

中央公論

要目

第十九年第六號

THE CENTRAL REVIEW

明治卅一年一月廿九日第三種郵便物認可
每月一回一日發行明治卅七年七月一日

發行所 [illegible]

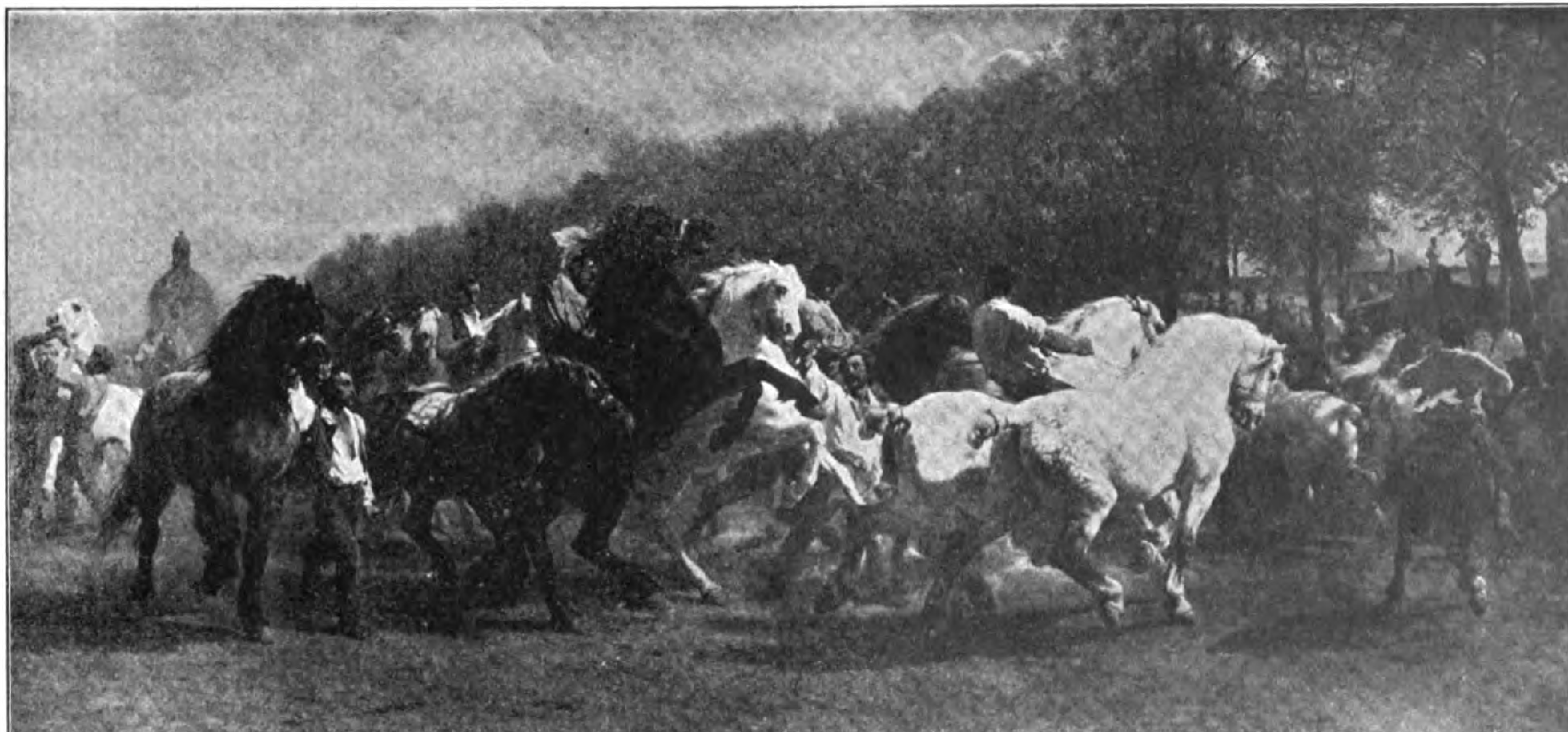
心靈修養

我宗教

發行所

中央公論

本號目次



ロザ、ボンヌウル筆「馬市」

中央公論



第十九年
第六號

寄席と風教

國民の耳目は悉く戰爭に熱注して、彼等は人間生活の平靜なる側面を暫し忘却したるが如し。夫れ軍事的戰爭は一時の變態なるなり、權道永久に連結すべきものにあらず、他の平靜なる國民生活は之れが爲めに一日も忽にすべからざるなり。世間には最愛の父兄子弟を荒寥たる滿州の野に暴露せしめ武運如何やらんと一日片時も安堵の思をせざる人多く之れあるべし。然れどもそれはそれとして戰爭の有無には係らず、各個が自治自營の道に汲々たるもの尙ほ國民の最大無數を占むるならん。是等は戰爭の事を思ふて何時もよりは幾分の遠慮の心なきにあらねども、如何に戰爭たればとて生活の常道は常に易ふべきにあらず。人は自然の要求として何等かの娛樂を要せざるを得ず、特に之れを國民全體の上に就いて言ふも、各種の方面に於て、近時俄かに長足進步をなし、生存競爭劇甚にして、一方に社會不景氣の聲を耳にすると共に、他方生產力の增進は自然金錢の餘裕を生じて、愈々適當の娛樂を得んとする事實の顯著なるを見るなり。貴族富豪が一擲千金の宴遊はこゝに言ふ限にあらず、今日の中流社會特に新敎育を受け、新感想を抱ける人々に供給すべき、恰好の慰樂に就いて、識者並に官邊の當局者の注意を促さゞるを得ず。

彼の演劇の如き、士女の最大娛樂として、今日倍々其の盛況を見ると雖も、時間と金錢との經濟上、隨時の遊興としては甚だ妙ならず。其の他、毬戲、玉突、角力、柔弱、擊劍、遊獵、馬術、弓術、圍碁、將棊、双

六、花合、歌加留多などの如きものなきにあらねども、是等は體質强健にして銘々の嗜みのあるものが、獨り自から樂むか、然らざれば、遊戯の性質上、兎もすれば、所謂「理に落ち」易く、慰み却て慰みとならず、二六時中、緊密なる時間の中に働くものに、精神の轉換と、慰籍とを與ふるものとしては、舊幕時代の遺物として、今日尙ほ平民的娯樂の唯一たる寄席の現況に想ひ到らざる能はず。

寄席が陳套にして時代後れの技藝のみを供するが爲めに、漸く現代の好尙を滿足せしむる能はざるのみならず、强ひて客足を繫からしめんが爲めに、卑陋猥褻の劣等技藝を演出して、人に無邪氣なる娯樂を供すべきの場所が、却て風紀を紊亂するの媒介所たらんとすることは、夙に當局者及び世上の識者の注意する所となり、多少嚴重なる制裁を受けつゝある事なるが、普通看客の沒趣味と、演藝者の無敎育と相待ちて、其の筋の制裁も依然として、今猶ほ何等の效果なきを見る、既に言へる如く、人は自然の欲求として、何等かの娯樂を求めざるを得ず、頻繁なる勞働に鬱屈せるものが、自由に精神の保養を得んと欲するは、多數自然の欲求也、此方を抑ふれば、彼方に揚るは止むべからざるの數、此に於てや巧みに法網を遁れて、下劣なる娯樂は不斷に歡迎せらるゝなり。是れ一つは、當業者及び。一般俗衆の罪なるべしと雖も、一方、當局者其の人が沒審美眼的にして、有效なる注意の行き屆かざるが爲めなり。

例へば、事の男女の情事に關するものは、警視廳鋭意之れに干渉し禁制すれども、其の他「下がゝり」は毫も顧みざるが如きは如何ぞや。猥褻にして風俗を害するもの單に兩情間の情事のみなるが、假りに男女間の事は憚つて口にせずとしても、卑陋なる飲食慾の話、汚穢言ふべからざる種々の「下がゝり」を談ぜしむるが如きは取りも直さず風俗上の大脫目にはあらざるか。蓋し按ふに、法規の制裁力の如きは枝葉の問題のみ、之れに依つて人心自然の欲求を左右せんとするが如きは、抑も皮相の見たり、般鑑遠からず、之れを我が過

去の歌舞伎史、俗藝史に就いて見るも明なる事實にして、在上の人と、有識者と、良く人心の傾向を洞觀して、彌縫的に抑壓せんより、寧ろ其の欲求するものを與ふることを先とせざるべからず。

適當の娛樂は之れを與へざるべからず、風俗は之れを取締らざるべからず、然るに娛樂と風俗壞亂とは固と密接の關係を有して、娛樂の方法若し一歩を過たんか、或は樂むで淫すべく、趣味の墮落をも誘致すべし然るに今日の如く、當局者の迂濶と、藝人の無教育と、聽衆の沒趣味と、三拍子揃うたる場合に於ては、談話術、表情術の趣味は言はずもあれ、徒らに趣味の墮落と、風紀の紊亂とを釀すの外あらざるなり。寄席の現狀に就いて見るに、諸種の演藝中、最も墮落と衰退とを極めたるは落語にして、每時一樣の事を繰返へすのみにしては、如何に趣味を解せざる社會と雖も、遂には飽かざるを得ず、之れが爲めに、下劣なる手品、活動寫眞、沒風流の壯士踊り、戰爭宛込みの武張りたる講談物、長唄、淨瑠璃の作りかへさては渡り者の外國人の如きものを拉し來つて、一時客を顧牽かんとす、此に到つては、大道の見世物、緣日藝と撰ぶ所なく、特に吾人が寄席に待つの要あらざるなり。之れを要するに、寄席と風紀との問題、遂に又、文藝教育の問題の中に包括せらるべきなり。此の點に關して、世上の識者の注意を要する甚大なり。

戰後の教育

文學博士　高田早苗

日露戰爭は我が國の勝利で局を結ぶものには違ひないと信ずるが、併しながらなか〳〵容易に形付くと思つたなら間違つて居る。日本に取つても露西亞に取つても life and death Struggle 所謂死活の問題で、なるべく早く結局を着けたいのは何人も共に望む所であるが、若し早く戰局が結はれたならばそれはホンの僥倖と思はなければならぬ。先頃募集した外債は案外の高利で其上關稅を抵當として始めて成立たといふのは、募集が陸軍の勝利前であつたといふのも一理由であらうけれども、戰局は永引く、日本が勝利を得れば得るほど時局が重大になるといふ觀察を外國の資本家がし

たのも重なる一つの理由と見なければならぬ。故に此の上一時の勝敗に喜憂するといふが如き神經的動作を謹んで、最後の勝利を得ることを目的として其れに到るまでの辛酸は飽くまでも嘗め盡すといふ大覺悟が必要である。さて終局の勝利は固より我にあらうし、また我にあらねばならぬことであるが、其の後に於て吾々同胞は國民として如何なる方針を取らざるべからざるか、特に國民的活動の主腦たる戰後の教育なる問題は凡て此の方針から打算し來らねばならぬ。海陸の戰爭に於て日本國民は既に世界的の名譽を負うた、其の名譽は將來戰局の進むに連れて倍々高まるべきものと思ふが、是れ誠に喜ぶべきことであると同時に國民の責任は戰勝の名譽が高まるに從つて增加するとは固より疑を容れぬ、二十世紀の國民にして戰爭のみが其の長所であるといふ次第であつては其國民としての光榮は到底永遠に保維することが出來ない。戰爭に勝つた名譽が却つて外來の困難を釀すの原因となる場合も無いではない、夫れ故に今後の日本國民は戰勝に依つて高まつたると同じ程度にまで平和的事業に於て世界大の名譽を得ることを目的としなければならぬ。我々の軍隊及び艦隊が勝利を得る度每に其の以外の國民の平和的事業に於ける責任は倍々增加する譯である。戰勝の號外は軍人以外の國民に對して責任の增加することを知らする所の通告書と見るべきものである。戰鬪員の義務は戰勝と共に輕減せられ、非戰鬪員の義務は戰勝と共に增加するものと見ねばならぬ。然らば軍人以外の國民は將來如何なる方法手段に依りて此の責任を果し、義務を盡さんとするのであるか。

抑も日本の軍隊、艦隊が陸に海に連戰連勝しつゝある原因は專ら何に依るかといへば、偏に彼等の其の愛國心、忠義心であるといふものがあらう、然しながら如何に愛國忠義の精神が盛んでも、精鋭の武器を持たなければ此の好結果を收めることは六ヶ敷い。愛國心や忠義心ばかりでは旅順の陷落は覺束ない、旅順を陷入るゝ爲めには軍隊に有力なる攻城砲を備へなければならぬ、剛健の精神と精鋭なる武器とが伴はなければ勝利を得ることは出來ぬ平和的戰爭に於てもまたそれと同樣で、攻城砲、速射砲、水雷驅逐艦、水雷艇などゝいふものも目下の戰爭に必要なるが如く、來るべき平和的戰爭に於ても相當なる武器を備へなければ永遠の勝利を得ることは到底覺束ない。將來非戰鬪員をして今日の戰鬪員と同程度の世界的名譽を博せしめ、凡ての

點に於て日本國民は一等國の國民たる資格あり世界的國家の國民たる器量あることを世界に示さしむる爲めに戰後に於て大活動をなさしむるに必要なる武器は何であるか、此の武器を授け、此の武器を備ふるは、單に戰後に於ける敎育の方法如何に依るものと思ふ。日本人は戰爭に巧にして、外交に拙である。陣頭に臨む時は眼中敵なきが如き大活動をなすに係らず、平和的事業に於ては常に他國民の後に瞠若たるが如き有樣であると人をして往々評せしむるに至る、其の原因は何であるか。これは外國語の不熟練といふことが其の重なる原因の一つであると思ふ。外國語の不熟練といふことが凡ての誤解、凡ての立後れの原因の重なるものであるまいかと思ふのである。英語を以て英米の政治家と交渉し、獨佛語を以て獨佛の外交家と折衝するに當ては彼れは生れながら繰る所の國語を以て我れに當り、我れは不完全に習得したる外國語を使用して之れと應接するのであるから、勢ひ非常なる不利益の地位に立たざるを得ぬ。言語の不自由は自から吾れをして受身の地位に立たしむることゝなるは明なる事である。海陸軍に於ても多く彼れの發明したる武器に依て彼れと戰ふのであるが武器、機械の使用に熟練するに於ては其の不利益は自から消滅するのみならず、其の使用法は却て我れ彼れに優るといふが如き事實を顯はすことがある。例へば水雷の如きはもと我れの發明にあらざるも、之れも發射する技能に於ては日本海軍は世界第一であると評せらるゝに到つたのである。外國語を繰ることを學ぶは、水雷を發射することを學ぶと何れか困難なりやといふに、彼れの發明したる水雷を彼れの如くに使用するよりも、彼れが生れながらに繰る所の言語を彼れの如く自由自在に使用するが遙に困難であるは明かである。此の平和の武器を使用すること自由ならずんば、一切の進退が常に立後れになり、種々の誤解を來すの原因となり、到底平和的戰爭に勝利を占むること覺束なしといはざるを得ぬ。誰れ人も知れる如く、近時歐洲に於て屢々黃禍の説をなすものがある、之れは固より爲めにする所あつて、之れを唱へ、日本國民を理解せざるものが之れに附和するものであつて、啻に事實に遠きのみならず、日本國民は殆ど夢想だもせざる事ではあるけれども、之れを不問に附することは能はずして、往々辨駁の勢を執らざるべからざるは實に不思議なる次第と申さねばならぬ。今や支那人及び日本人は黃禍の辨駁をなすべき時期にあら

ず、むしろ白禍の豫防をなさゞるべからざる場合に立て居る。支那の國家は現に白禍の爲めに累卵の危きに瀕し、我が日本の國家は此の白禍を豫防せんが爲めに鋒を執て露西亞と戰ひ、生命財産の大犧牲をなしつゝある、此の時に際して尙ほ黄禍の申譯をなさゞるべからずといふは、抑ゝ吾人日本國民が誤解や立後れの爲めに大迷惑を蒙りつゝある一大例證である、曩に我が第二軍が遼東に上陸し普蘭店を占領したる時に當つてアレキシイフ及び其の幕僚は赤十字の旗を其の汽車に揭げて我が軍の眼を掠め、逃走の目的を達した、是れ固より國際法違反の甚だしきものにして、我れ彼れに向て大詰責を加へざるべからざるに、事實は之れに反し、彼れは却て我れに向ひ、赤十字に向て砲擊したとの理由を以て抗議を提出したといふことを聞及んで居る。是れ逆捻ぢの最も甚だしきものたる言ふを待たぬけれども、恰も白禍に惱みつゝある國民が黄禍に就いて申譯をなさゞるべからざる場合に立至つたると同じく、皆立後れの致す所である。

されば戰後に於て吾人同胞國民が平和的大飛躍を試みんとするには先づ此の立後れをせぬ準備をなし、豫め誤解を一掃するの覺悟なかるべからず。誤解を一掃するの準備なくして、平和軍の陣頭に臨まんとするは、恰も先づ掃海事業を遂げずして遠征軍を上陸せしめんとすると同じく、敷設水雷に係るの恐れ頗る大なりといふべしである、斯く考うる時は今後平和的活動をなさんとする準備として、外國語特に英語を研究すると最も肝要である。英米人に劣らぬやう英語を話し且つ書き、之れを武器として平和の戰場に臨まずんば勝利の見込がないといふのも敢て過言ではないと信ずる。外國人をして日本語を習はしむるといふ事は遠き未來は知らず、近き未來に於ては言ふべくして行ふべからざる事で、外國語に熟練するの困難は知らざるにあらざるも、之れなくしては世界の舞臺に活動する能はざるものとすれば、暫らく耐忍して之れが研鑽を怠らぬやうにせねばならぬ。未來の實業は世界を舞臺として營まなければならぬのは勿論であるから、今後の實業家にして英語の練修なきものは戰後の經營に任ずべき根本の資格を缺いて居るものである。未來の政治家は世界の政治家を敵手として樽俎折衝の任に當らざるべからず、之れをなすに當て、立後れせざらんが爲めには、日本語を繰ると同じ容易さを以て英語を繰る技倆あるを要す。而して特に望ましきは、未來の文學者が

重きを英語の研究に置くの一事である。文學者に英語の素養なく、ペンを執て英文を草し、世界の讀者に其の作物を示すの勇氣なき限りは日本の現在未來は元より日本の過去三千年に近き歳月が生み出したる特種の文明は永く白哲人種に理解されずして了るかも知れぬ。其の理解されざるは即ち總ての誤解の原因である。歐米各國の人々は毫も日本の文學を知らざるのみならず、日本の歴史さへも知らぬのである。日本人は未だ筆を執て其の光輝ある自國の歴史を歐米人に示したものは殆どないと言つてよい。自國の歴史さへ彼れに示さずして、彼れの誤解を憂ひ且つ憤るは抑々末なりといふべきである、早稲田大學の講師小泉八雲氏が我が國の昔話し怪談の如きものを英文に顯はして、之を英米の讀者社會に示してさへ彼等嘆賞措く能はざるは、既に人のよく知る所ではないか。今若し氏が爲した如く、我が同胞にして我が國の歴史や文學を彼れに示すに於ては總ての誤解は忽ちにして消滅し、我が日本の今日あるは決して故なきにあらず、日本國民は曾に戰爭的大國民たるのみならず、平和的、文學的大國民たることをも悟るに到り、今日我が戰勝を聞いて我れに敬意を表するよりも尚ほ數十數百倍せる而かも永久の敬意を表するに至ること必せりである。又文學者それ自身よりいふも、彼等此の手段方法を取る時は同胞間に名譽を得るが爲めに費す所の勞力と殆んど同一なる骨折りを以て世界大の名譽を擔ふに至るであらう。抑々また愉快なる事では無いか。要之戰後に於ては政治家、實業家、法律家、其の他如何なる職業のものといへども此の戰時に於ける軍隊的活動と同一の勇氣を以て世界の舞臺に進軍せねばならぬ。而して其の時に於て要する所の最も重要なる武器は英語である。又此の平和軍隊の先鋒となつて先づ掃海の事業に從事し、敵設水雷を取除き誤解の雲を拂ふべき天職あるものは文學者を措て他にないのである。文學者の筆を借りて日本國家及び國民の品位は始めて世界の認むる所となり世界的活動の準備こゝに始めて成就するものと云はねばならぬ、戰後の教育に就て研究す可き問題の多々なるは勿論であるが先づ英語の熟練を其第一條件と爲す可きものであると深く信じて疑はぬのである。

（文責記者にあり）

人種的偏見の心理

樋口秀雄

今こゝに譯載せるは、トーマス氏が過ぎし四月の米國社會學雜誌に掲けたる論文の大要なり。社會活動の一原理として、斯學上に重大なる人種問題に關するが上に、時節から世人の一讀に値すべく、隨うて少からぬ興味を有すべきは信じて疑はざるところ。本月の時代思潮には余の此問題に對する卑見を開陳せり、敢て讀者の參照を煩はさむとす。

一人種が他の人種に對して有する反情の説明を爲さむとせば、先づ種なるものゝ生物學的發達の途上、社會活動を外にして、自己と同類なるものに對しては預好を、關れるものに對しては嫌惡の情を起さしむべき何等の條件ありやを討ぬるを要す。然り吾人は事實上此種の條件あるを認む。例へば極微有機體は水中にある食物の一片には接近するに反して有害物毒物などはおのづから此を避くるを見るべし。而して此運動は溫度光、電氣さては他の熱帶的勢力によりて左右せらる。如是下等生物より進で高等生物に至るまでの發達は、要するに種々なる刺激を鑑別し、利害を判じ、かくして一きは巧みに境遇に應化して之を制御するに適する感官の生長にありて存ずと云ふべし。人類に在ては注意、記臆幷に比較等の能力が著しく發達せるが故に、過去に於て之に幸福を齎しゝが如き刺激若は境地を弁別し、選擇するを知れり。かゝる選擇及び取捨は、この決定に次ぎて來るべき行動を助くるに恰好なる（情として感知せらるゝ）有機的變化に伴はるゝを常とす。即ち利害快苦を辨ずる感官の存ずる所に、この決定と情感との二者が含まるゝを見るべし。此を以て不快なるものを見て生ずる感情と、快なるものを見て起る夫とは非常に異れること論なく、それ等の結合は、やがて快は苦の感に應じて一定の心的狀態を生ずるに至る。憎、愛、嫉妬の情これなり。啻に物には狀態に對してのみならず、聲、色、香又は物を表示するに足る一種の特色が、之と同樣の情が暗示の爲に喚起せらるゝことあり。血の香を嗅ぎ又は之を見せしむるは牡牛の情を錯亂せしむることと人の知る所なるが、赤色の毛布亦同僚の結果を來すに足るなり。

抑原人は平和の狀態と云はんよりは寧ろ敵討の狀態にありき。彼等に在ては食物を獲むの競爭激しく、強奪はその慣習なりき。故に休戰聯合又は同盟せるものゝ外は、憎惡し敵抗し、猜忌するを常とせり。此狀態は北米印度人の間に在てなほ見られたる所なりき。加之恐はく今の人々の間に於ても各自から善き儕輩たるこ

とを證するまでは、互に充分の信用を藉することなかる可きなり。若しかばかりの用意なしとせば途上逢着の人の命運は推するに難からじ。されど、各人とその外圍のある部分との間には親密なる關係が漸々生じ來るべく、その關係は啻に父母妻子のみならず、その兄弟に及び、家畜に及び、延いては氏族部族國民の間に及ぶべし。而してかゝる關係により結合せられたる一團は、心理學上より云はゞ自我の一部を爲し、以て廣く世間一般と對立するに至る。即ち人種的偏見の發點なり。此の如く、人が外圍の一部を自己と結合せしむるに至る過程の規定こそ、吾人の研究せんとする所なれ。

此の個人とその外界との聯合的同情的關係を細かに驗すれば、その初は本能的返射的基礎に出で、食物獲取と生殖作用とに聯關し、生活の高度に進むにつれて次第に意織的となるを見る可し。此種の聯合の尤も主要なる起源は親子關係、ことに母子の關係にあり。こは低級動物にありても夙に見らるゝ所にして、特に哺乳動物に在ては親子間の愛情の強さと、その永續との著しきものあり。母の子に對する關係はその子女の年少にして獨立の力なき間、之を保護し養育する間に於て養生せられ、有織的方法により子女の生前より定められ、以て社會的基礎を爲すに至る。此間自然の力は複雜なる物的及心的型式を成就せしめ、こゝに情操の發達となる。時に母の情なるものは助けなき幼兒の保育を完うするに必用なる主觀的條件たり。されば母にしてその子に對する愛着が、一切の他のものに優るに非ずんば、その母としての兒女の保育を全ふする能はざるなり。母のこの深き愛情は、その子女の殘存によりて酬ゐられ、從りてその系統その一族の殘存繁榮により報ゐうる。唯り母のみならず、子に對する愛はもとより父にも亦存すれども、その愛の度は竟に母のそれには若かず。且つ男性が兒女に對する愛はむしろ間接に社會的に、夫妻間の聯合によりて生じ來るに似たり。

小兒の爲にする愛情、利害の念及準備などは心的方面に於ける特色を生ぜしむ。即ち一切の知覺は小兒の事に關して多少偏見を伴ひ來り、判斷も亦此際に於ては偏僻に陷り易く、小兒に對する愛は、同時にその小さき靴、もしくは玩具、その他あらゆる彼等兒女が所有物にまで及ぼさるゝに至る。此の如き傾向は實に人種偏見の心理研究する者の決して困却すべからざる現象なり。何んとなれば此の如きは外界に對する反動よ

り來るものと異り、人格の標號(サイン)に特殊の價値を附與すれはなり。

同族に對する同情的態度の他の起源は、愛情に聯關する事象中に見るを得。明かに自然陶汰の結果として、兩性の相對するや一種特有なる有機的感應を生ず。鳥類に在ては羽毛、聲、色の美及び交接期に於ける男性の擧動は、女性に對する性情の刺衝たり。此等男性の相貌及動作によりて、女性動物はその男性たるの印象を深め、此等を最も著く發揮し得るものが勝利を占むるに至る。此と同じく逆まに女性の容姿擧動は男性に對する誘惑の力著し。かくの如く異性の特色が發輝せられ、その特色が性的暗示を與ふるの事實は特に注目を要す。人間の社會に於ては此の異性の特色に對する感興の念は、流行及裝飾等を支配する事大なり。わけて婦女子が性的注意の對象となり、流行の代表者たるは著しき事實なりとす。白人の貴婦人は、白粉及び臙脂を用ゐて、その帶紅白色のうるはしき皮膚を更に美ならしめ、黑人の婦女子は、炭末及脂肪を用ゐて、その烏黑の皮膚を飾るが如き皆此が爲なり。その他あるは衣服の裝飾により、或は芳香を借りて、婦人がその特色を愈發揮せんと勉るや至れり悉せり。蕃人の部族に在てはその種族の通性を續大にし、著明にし、以て愈他の部族の夫等と懸隔せる部族的型式を分化せしめ、他方に於ては世襲的なる異性好惡の念は、次第に部族的理想(美の理想よりはむしろ性的誘引の理想型式)を確定せしむること、ヒルンが詳かに觀察せるが如し。前に觀察せる生殖作用より生じ來れる條件に於ては、吾人は人格の特色を指示し、及之に情的價値を付與すべき傾向を認む。又協力の作用は他人との同盟を形ち作らしむる傾向あり。此際に於ても特色ある記號を定め、先づ之に情的價値を與ふるを見るなり。吾人は既に動物がその食物採取に就て外界と適應するは純乎たる化學的物的基礎に本づくを見たり。而して此に他のものと聯合する作用も亦反省的思慮の作用にあらでむしろ、機械的なる所あるを見るなり。此の如き事實を說明すべき現象は、偶然なる動物植物の聯合に於て見るべし。

哺乳類に於てはたとひ反省的ならずとも、本能的に他者を評價し得ることは、其の群居を爲すによりて知らる。而して此場合に在りては既に人格の記號として一定の意義定まれり。事實上彼等哺乳類の記憶の大部分は、殆んど同情と反情とを指示すべき底のものに限る

が如し。人間に於ては種々なる實驗は類意織の更に增大せる示せり。戰鬪及狩獵はその同類との協力が如何に多くの効果を齎し得るか、如何に彼等の生命の維持と安固とが友誼に借る所多きかを教へ、以てその聯合を發達せしむ。よく此事實を示すものは彼の血盟にあり。危險に際して友人同輩の助力に俟つ所多きことが、經驗によりて明となるに及び、蠻人等はその友人等と血をとりて兄弟たるの誓約を爲し、以て相互の命運を相托せんと企つ。此儀式は廣く未開人間に行はれ、堅き友誼を證すべき唯一の方法と見らるゝことさへあり。スタンレーは此血盟の價値を能く認識し、亞弗利加土人の酋長約五十人に對して此盟を訂したりき。種族爭鬪の一般の慣習にありて、協力せる人々間には其同號を見る自己と異なるなく、その一群の社會と他の社會との間には嚴密なる區劃を設けて、互に仇敵視するに至る事例あり特に蠻人種族の間に於て然り。

此の如くにして一部族又は一種間に生じたる特色、例へば服裝、容貌、言語又は社會的習性は他の部族又は種族をして、之を見るや否忽ち敵對の念を生ぜしむ、只にその人のみならず、その家畜すら亦反情の種となるに至る。

此他部族的記號即ちトーテムの如き、國民的記號即ち國旗軍旗のたぐひが、その團體的精神に對しては自家の團體の聯合及び感情的一致の强固を示し、その團員をして共通の利害感興を生ぜしむるに於て預りて力あるは人の能く知る所とす。

慣習も亦他鄉人に對する情的態度を左右する力あり。自己の慣習は安穩愉快の感を與へ、然らざるものは危懼と嫌惡とを誘致せずんばあらず。故にその慣習に合へる事物に對しては、特に注意を喚起することなく、情の激昂なし。之に反して異風異俗の事物は注意を喚起し、情を攪亂せしむ。此の如く自己の俗に逢ふものはその不安と不信安とに値するが故に、異國他鄉の人に接するや、その特色を示すべき記號に對して一種不祥なる意味を賦與するとは屢旅行家の實驗せる所なり。此のごとき次第なるを以て共通の史を有する團體はおのづから共通の情的反應を爲すは自然の理なり此事實を證明すべき事例は頗る多し。

以上述べし處は主として團體中の個人に關する事なるが、事實は是のみならず、團體自身が次第に準人格を有するに至り、個人と同しく外界に對して猜忌及敵意を表し、それ自身とは親密なる感情を有するに至るが

故に、他の團體に於ける不用の徴候は又偏見をもて見らるゝは目的の理なり。此場合に於ても亦その不同てふ事は外部の記號によりて決定せらるゝ。即ち或は相嘗を以てし或は服裝を以てし、或は言語習慣その他のものに依りて決せられ偏見の具體的表示は必すや此等のものと結合せらるゝを常とす。されば吾人は、今や進で偏見の表示が如何の方向を取るか、及び人格を示せる記號が如何なるものなるかを詳かにし併せてその根據の深淺と、そが或は絕滅られ或は變化せらるべき制約(條件)を究めんとす。

團體が自己の特質に對してもてる偏見の念に就て一般の記述を試みしは蓋しフムボールト氏より始まる。氏は阿米利加の土人に關して記述して曰く「凡ての民族はその特長たる部分に美の觀念を結合せしむる傾あり故に自然が與ふるに些少の鬚髯扁平なる頭、狹き前額及び褐赤色の皮膚を以てせる人民は、頭髮は少く頭は平かに、膚色は銅赤を帶ぶること愈多きものを以ていよ〳〵立派なる人と考ふるが如し」と。又他に氏が此意見よりも更に具體的にして、しかも同一結論を與ふるものあり。ハーンハラス、カストレン、スタンレー等の如し。若し彼の特色を指示せる外部的記號の個々のものに就て云はじ、膚色の如きは最も見易きものなるが故に、一般に偏見が之によりて現はるゝを見るべし。シューター、ダーキン、ワイツ、マルコポーロ、リギングストーン、モーア、カルドエル、クラウファード、シブレー等の記する所悉く之を證して餘あり。黑人が黑き脂づきたる皮膚、厚き唇及び扁平なる鼻を以て最も美なりとなし、之に反して惡魔は白色なりと考ふる、又は交趾支那の王の從者が、美公使の夫人を賤しんで、犬の如白き齒、馬齡薯の花に似たらんさうび色の鼻を有せりと嘲りし如き事例は擧ぐるに遑あらず。

物的相貌を變化し又は破損せしむるは野蠻人の屢行ふ所なるが、こは開明人の間に於ける風俗の變化には破壞と同一の理に因づく。牧者が殊なる形式を助成せしむるも亦然り。吾人は既に女性の相貌が一種の誘惑力を有するは、女性が本來の性質に由る事を述べぬ。かの流行が物の特異なる形を更に著からしむるも亦之に同じ。人種が指定の型式を追ふて之を養成するは事實なるが、そは恐らくは男子が特に女子の美質として稱贊するが如き型式を撰みて進むものなるべし。之と同じく家富むもその畜養者が好むらん特質ある種類を選みて飼養し、繁殖せしむるにより、その特色は益發揮

せられ、人種は又その著き人種的特色をいよ／＼强からしむ。墨西哥の畫工及彫刻者は種的特色たる低き前頭を更に著しく表現するを好む。こは白人の眼より醜きを增すに止れども、而も希臘の塑像が美の理想として現せるものに比して、不自然の度は決して多からず。ボクネシヤ人はその後頭部を扁平ならしめん爲めに人工を加ふるを常とす。これかゝる頭形がむしろ普通なるが爲めにして、人工は啻まそを著しからしむるのみ。タヒチー人にありては長き鼻てふ語は一種の侮辱を意味せり。此を以て彼等は美觀の爲めに兒女の前頭及び鼻を壓して扁平短少ならしむるに勉む。ボツテントツト人は隆鼻の小兒を以て歐人の種となし、之れに向ては扁平なる鼻の名譽を許さず。支那婦女子の足はたとひ人爲的加工なき場合と雖、その大さは一般に男子のよりは隻かに小なり。支那人及日本人は皆に於て特長あり。即ちその外端は角形にして少しく上方に吊り上るを常とす。而して此等國民の技藝家は恰かも紅毛の夷狄と對照してその美なるを誇るが如く、更に足を誇大ならしむ。

その他吾人は種的特質が婦女子の姿容に及ぼす所大なる認む。楚々たる姿容の普通なる所は、風姿かよわき婦人が賞賛せられ、頑丈なる體格が普通なる所には此の如き體質の婦人が常美せられ肥大の形が美なる理想として認めらるゝ。埃及の俗は前者に屬す。

這般外部的特色の强服は、吾人をして人種的偏見なる者が或る意味に於て究竟皮相的なるを認めしずんばあらず要するに先づ外人の物的相貌によりて下さるゝ斷定なり即ち自己の種的理想と異れる膚色、形貌、及び服裝に對して、次てはその風俗慣習等に對する偏見に過ぎず。されど此偏見たるや一般に本的反應に基するを以て、極めて强く且つ直接なり。その理由や推理の外なり。そは他の本能の如く思慮を職とせる大腦中樞の發達以前より存するが故なり。又他の本能と同じく頑强にして、自發的なり從うて理性により左右すること能はず然れども此の如く强きに拘らず、人種偏見は或は聯合により、或は刺激の變化によりて、容易に分散せしめもしは顚倒せしむるを得べし。一切の人種中黑白二人種ばかり對照のしるきはあらじ。然れども白人の旅行家は彼等が永く亞弗利加の土民と同樣するや、黑人の彼等を見ることまた初めの如く甚しき偏見を以てせざるの事を談る。

黑人の白人と共に在るや、啻に人種的偏見を亡ふのみ

ならず、猶ほ黒人的標準を捨つるに至ることあり。米國に於ては特に黒人の爲にせる新聞中にすら、その縮毛を直からしめ、或は黒色を減ぜしむべき藥品の廣告を盛に掲載せり。千八百八十二年にシエラ、レオーネの郷里に歸りし奴隷等は、自ら白人の風俗を裝ひ、土人に對して侮蔑の念を抱ぬと傳へらる。

今や支那人は、南部諸州の白人より外貌に於て最も擯斥すべき人種と目せられ、黒人よりもむしろ厭ふべきものと稱せらる。然るに日本人は同じく黄人種にして支那人と同じき物質的特色あるに關らず、吾人が之と交るに及ては、その著しき誘引力と才幹とを否定する能はず。特に注意すべきは、彼等が多くの熱心なる白人賛替者を有し、對岸の對白人戰爭に於て、大部分の白人は彼等に滿腔の同情を寄することと此なり。露國に對する成効せる戰爭は、この小身の黄民族に對して偏見を有し、若しは社交に於て、結婚に於て、幷に政治上に、はた貿易上に、彼等との聯合を阻碍すべき餘地恐くはなかるべき也。若し夫れ此妨碍がむしろ逆まに小さき黄なる、然れども才能あり、健國古く、而も傳說的に西方の侵畧に敵抗せる東方人種中に見出さるとも、そは決して怪むを要せざる所とす。

若し階級的偏見の加はるなくんば、人種的偏見は到底暫時的のものにして、流行よりも反て强固ならざるべし。各團體の經驗は感情を伴へる傳說及標準を立し、而して此等は互に相對抗す。されど低級の團體に對する輕侮が承續するは、特に一方が後れたる文明を有する場合に限る。此場合に於て一團體の他に對する反情は高き階級の低きものに對する夫によりて更に强めらる。心理上より見れば人種的偏見と階級的偏見とは到底同一にして、共に憎惡の本能の二面のみ。されど階級てふ身分は競爭的活動結果なるを異れりとす。米國に於ける黒白人の關係を看るに、南部人士の黒人に對する反情は人種的偏見よりも、むしろ階級的偏見なり。之に反して北部人士のは純乎たる人種偏見に過ぎず。此南部米人の黒人に對する感情は、マリー、プレストン孃の「沙翁研究」中なるオセロ論に名殘なく表出せられたり。孃はオセロが性格より判じて、オセロは到底黒人たる能はずとなし、之を黒人とするは技術上の看察點よりして缺點たるを逸れず、大沙翁の人間觀は餘りに公平に公平に過ぐと說き、絶叫して曰くオセロは白人なりと。孃の如きは恐くはリギンゲストーンが妙齢の黒佳人を描出し、黒きギーナスと稱へし如き記事

の趣を領會する能はざるならむ。
人種的偏見は社會の部族的狀態に起原せる本能なり。感情は動作の强固がその團體の保全に切要なりし時代の遺物なり。人種的偏見若くは此類の偏見は恐くは絕無に歸する時なからむ。一切の標準や、傳說や、物質的相貌や、隨處に於て一致せむことは到底不可能なるべく、又美的立場より望ましからざる事なれば也。然れども交通の密接が利害の標準を共通ならしめ、類似せる教育組織、同程度の知識が、各社會各團體間の社會的類同を來し、以て忌むべき區劃の基礎を搖かさむ曉には、徐々無意義のものたらんなり。

亞細亞に於ける露國の文明的事業

岡田市治

茲に掲ぐるは去月「評論の評論」に載りたるアジア、ロシヤ社記者博士フレデリツキ、ライト氏の論文を譯出したるものなり

亞細亞に於ける露國權勢の發展は、英佛二國が北亞米利加に於けるものと酷似する所あり。孰れも頭初は專ら冒險者又は開拓者等の足跡を人間未到の地に印するに始れり、人漸く集まりて部落を作り愈々進んで社會を組織するに至る、政府は此等の生命財産の保護又成立の維持に力を致すに至りしなり。然れども地勢の便否、文明の利器の採否に隨つて其の進步に遲速あるは免るべからざる事實なりとせば、亞米利加の如き綿々として海に注ぐ大なる河流ありて舟揖の便に富み、河に水深くして大船巨舶を泊するに足る天然形勝の地に第一步を着したる英佛の進步は著しきものありしたらんに、事實は之に反して蒸汽機が經濟的一大勢力となりて世界に出現せざりし以前は、種々の事情によりて甚しく沮害されたるを見たり。然るに露の移民を迎へたる北方亞細亞に於ては、大洋に注入する河流あらず、隨つて航行の便一もある所なし。とはいへ、亞細亞內地に於ける水路の便はオビ、エニセイ、レナ、アムール諸河の如き何れも殆んどミスシッピー河谷に於けると同じく農產、鑛產及び林產に富める地方を沿ふて貫流すると雖も皆氷結せり海灣に注ぐを以て此等の富源を開拓して有利の產物を航海船に搭載せんこと不可能の事に屬せり。
　かく天然の利便に乏しき地方に進入し經營慘憺漸く今日の進境に達し、人跡未到の地も各處に文明の事業

起れるを見るに至りしは領土を擴大し政權を布殖せんとする露國政策の然らしめし所なりといへども、其の本國の地勢地球の此半に位し氣候概ね寒烈にして大半不毛の地に生息する國民は寒より暖に向はんとする人間自然の慾望に促されて事業の進捗に大なる力を與へたるは論を俟たずして明なり露國が交戰以前にかく外交に權謀を弄し、一旦交和破れ干戈に訴ふるに至るも猶ほ且つ保留せんとする彼のなしたる文明的事業は如何なる沿革を經過して今日に至りしかを順次概説せんとす。

一　シベリアに於ける郵便線路

年次の經るに從ひ、諸種の文明的事業は開拓者の足跡に從ひ陸續としてこの隔絶せる土地に入り來り、十八世紀の前半に及びてはウラル山脈より太平洋に至る主要なる殖民地は悉く郵便線路の連結する所となり、此の通路は幅二十一呎の車馬道ありて官吏、旅人、移住民等は乘馬にて疾走すること得、實にシベリアに於ける郵便線路は蒸機の發明以前に於ける前も完全のものたること疑ふ所なし。余は嘗て此の通路千四百哩を旅行せしに毫も不便を感したることなく比較的愉快の感を覺へたり、旅行の目的は内地の情態を視察せんとするにありたれば晝間のみ旅行し夜間は驛舍に寄泊しゝに然も能く平均一日八十五哩を行くことを得たり、行程は十乃至十五哩毎に驛舍ありて乘馬及び馭者を交替するの習慣なり。かくの如き通路はシベリアの一端より他端に擴延し年次凡そ二百年間の經營に存ぜりといへり。急務に有する旅人は上述の驛馬を利用し平均一日二百哩の割合にて幾日も旅行するものあるは敢て珍敷き事に有らざるなり。此の交通機關によりて過去二百年間に於て支那露西亞の間に行はれたる通商貿易は實に驚くべき額に達したるものあり、且つ露國政府は人民の交通を容易ならしめんため乘馬賃銀を規定して一哩二仙を越ゆることを許さゞることをせり、彼のスコットランド及び英國の如く鐵道布設以前にありては凡そ其の二倍以上の賃金を要したるに比して露政府の留意したる所大に見るべき所なり。

二　シベリアに於ける郵便制度

凡そ百五十年前シベリアに於ては書信は僅かに九仙

の郵税にて千五百哩に達し又二十仙を以てモスコウ、ネルチンスク間四千哩の通信をなすことを得たり。然るに英國に於ては境域狹き本國内の通信に二十八仙の郵税を要し、佛國にありては六百哩毎に二十五仙を要したり。下りて千八百四十六年に至り文明の利器漸く發達し交通機關漸く完備せんとするの日に近つきしも合衆國に於て國内三千哩の間に通信するに十仙を要したりと。千七百三十一年露國はモスコウ、トボルスク間一千二百哩の長距離に二週一回の通信日を制定したるに同年頃合衆國はニューヨーク、ボストン間二百五十哩の短距離に漸く二週一回の通信日を行ふに過ぎざりし。千七百八十四年英國郵便夫の行程は一時三哩半の速度なりしもシベリアにありては一時間八哩乃至十哩を旅行し、一百二十哩に達するは通常のことにして低廉なる郵税によりて迅速に郵便物を輸送することを得、北方亞細亞は早くより露政府の德政に浴し居たりしが後年鐵道電信の設置せらるゝに至り其の便益頗る增進したり。

三　シベリアに於ける圖書館及び博物館

エルマックのオビ河谷に入りてより未だ七十年を經ざる短日月の間に早く既に露の開拓者は太平洋沿岸に達し或はオビ河口に浸入したるを見たり、而して今日に至り猶ほ進歩發達しつゝある諸種の方面に於ける重要なる文明事業の中心を建設せるあり、實にトボルスク、オムスク、トムスク、クラスノヤ、ルツク、イルクツク、ヤークツク、フエルクネウデインスク及びネルチンスクの諸市は常にサレム、ボストンと等しき發達上類似の歷史を有せりといふも決して不可なかるべし。此等の諸市が彼のニュー、イングランド殖民地に於けるが如き大なる發達に至らざりしはもと是れ周圍の事情の然らしめし所なり、然れどもトムスクに於ては五十年前に於ける合衆國の大學に比して決して劣ることなき大學あるを見る、又クラスノヤルスクに於ては歐洲諸國の圖書館が欲するも獲ること能はざりし珍書の充實したる圖書館あり、又シベリア鐵道を距ること三百哩なるミヌシンスクに於ては世界の賞讚を博する博物館あり、館に集むるものは諸地方に於ける遺物を蒐集して石器時代より青銅時代を經て鐵器時代に至る變遷の狀態を最も完全に陳列したるは此の館を措て世界何れの所に之れあることなしといへり。五萬の數

より成れる此の標本は二階建煉瓦の建築內に保存し、最も巧妙なる方式に從ひ秩序正しく陳列分類してあり、此館に接して附屬圖書館あり、皆個人の寄附より成立したりといへり。以上述ぶるものは一例を擧ぐるに過ぎず。若し一度シベリアの地を過ぎ十萬餘の人口を有する都邑に至らば一として博物館又は圖書館の設あらざる所なし。ミヌシンスクの如き僅かに一萬五千の人口を保つに過ぎざる都邑に於てもかくの如し、イルクック、ガバロプスク等の如き大都會に於ては帝國理學協會の支部あり、博物館もミヌシンスクの如く特殊のものにあらずして一層廣汎の知識を網羅したるものあり。

セント、ペテルスブルグを東に距る四千哩の所にあるイルクックは人口僅かに六萬內外を有するに過ぎざる小都會なるも宏大なる博物館の外に壯麗なる劇場の建築あり、規模の宏壯なると設備の完全なるとはニユーヨークを除いては亞米利加に於ける何れの建築物に比して遜色なしといへり。又公共閲覽所及び圖書館ありて歐洲諸國の重なる國語にて書したる書籍雜誌の類を有せり。此の地を距る更に東千四百哩アムール河畔に在る人口三萬の都邑ブラゴエンチエスクに於ては設備整頓せる病院、圖書館又は博物館の外に有名なる音樂教練所の設けあるあり。

四　露國科學者の事業

露國が領有したる諸地方の科學的探險に對して十分の注意を拂ひしは顯著なる事實なり。既に一千七百三十三年學者メッセルシユミッドの監督の下に組織したる探險隊の一行はシベリアに進發し、其の事業十年の久しきに繼續し、非常に重要なる好果を齎して還れり。千七百六十八年ゲメリン及び就中著名なるパラスは一隊を卒ゐてアラル、アスピアン低地の探險に出發し、アルタイ山脈に達し、更に進んで山脈を越へバイカル湖を横斷しセレン河を溯り、愈〻進んで其の足跡遠く支那の國境に及べり、此の一行の擧げたる事業は實に科學上の研究に一新時期を劃せしものにして、ために博物學上に於ける諸種の部門に屬する知識の範圍を擴大したり。

後年セミパラチンスクの露領となるや、植物學者シベルス、著名なるフムボルト其他專門の學者相前後して邊境に於ける未知の地方に關して知識を博せんがために續々派遣せられたり。一千八百五十六年學者セメ

ノウをアラタウ及びチャンシャン山脈探險の目的を以て帝國地學協會より派遣したり、其の探險の結果地理學上未曾有の貴重なる記錄を公にしたり。一千八百六十八年より一千八百七十一年に涉りて博士フェドチェンコー夫妻はトルキスタンに於て動物學上須用なる採集に從事したることあり、其の採集の標本は五万七千個之を分類すれば實に五千種の多きに達すといへり。爾後シベリア横斷鐵道の布設に伴随して地質學上の研究に益利便を加へ、隨つて精密なる調査を行ふに至り、其の結果は已に二十五卷より成る圖解挿入の大書冊となりて世に出でたり。五年の後オコック及びカムチャツカの地質及び博物に關する美麗なる二卷の挿畫入の書冊は政府の手によりて出版せられ、殆んど是れと同時に多くの科學者は滿州の地に入り、世界の科學界に偉大なる裨益を與へんとて研究の結果を著作に附するの準備をなしたりといへり。

五　宗教的社團

露の追放制度を見て世人は直ちにシベリヤの社會を厭ふべきもの丶如く誤解し居るも其の實大に然らざるものあり。追放人の數はシベリア住民の少數を占むるのみなり、古よりシベリアの地は露の教徒に對して恰好の隱家にして多數の教徒は一隊をなして諸地方に移住し來りて信教の自由を求めたり。而して此等の教徒はアングロ、サクソンの教徒程には教育に注意せざりしと雖も、重大なる道德的性情は皆之を保有し、人皆勤勉節儉の美風に富み、道義の命ずる所は嚴格に之を奉ぜり、後來露西亞帝國に於ける繁榮の要素は實に此の一事に存せりといふも決して不可なし。モスコウに居る多數富商又はウラルの鑛山王と呼稱せらる丶もの此の徒に籍を置く者にあらざるはなし、精密なる調査によれば露人一千二百萬乃至一千六百萬は此の教徒に屬するものにして、其の中殊にドンのコサックの民最も多しといふ、而して又シベリアの移民中此の派に屬して信念堅固なる信徒は確かに五十萬を下らずといふ。今より凡そ百年前農耕に適せる地を占めんとて多數一團をなしてトランスバイカリアに移住してより今は此の地方に於ける繁榮の要素となれり。アムール地方の住民の十分の一は此の徒にしてアムール河上に往來する蒸汽船は殆んど皆此の徒の所有若くは監理の下にあり、酒類の販賣を禁ずる教條を固守し、全シベリアに散在する五百以上の村落に於ては煙草酒類を一切禁賣

するを見るに至りては大に旅人の快感を刺撃するものあるを見たり。

六　シベリアに移植したる露の村團

露のシベリアに於ける移民の數は八百萬に近し、是等の移民は概ね溫順にして土人と爭ふこともなく、却て親睦の交情を保ち、平安無事に生活し得るは先進開拓者が行動を愼みたるの致す所なりといふべし。露の婦人は概ね男子に隨つて移住し、至る所に一家を立つるもの多し、追放人の妻と雖も許可を得れば夫と同棲し、又同棲を出願して許可を待ち夫の後を慕ふて移住するもの多し。かゝる狀態なればシベリアの植民地に在りては男女の數相平均するに至れり。從來の移住民は一個人若くは一家族が個々別々に移り來たりしものなるが、露人が自治制を愛好するの性情は後年に至り全村を擧げて其の儘移住することを始めたり、先づ一村の有力者を出して移住に適當なる土地を撰擇せしめ、其の報知を得て村民皆所有物を賣却し、自治の機關其の儘一體となりて新地方に移住するなり。かくて自治の制度は少しの變更もなく、村民相互の關係は益々親密の度を加へたり。

要するに露西亞は非常に文化の發達せる基督教國にしてシベリア及びトルキスタンに向へる發展は此等の地方に取りて最も幸福とすべき所なり。實に露が此等の地方に對してなしたる務は富力を進め、土人及び移民の安寧を保護するの道を講ずるに有りたり。且つ露の亞細亞諸洲を得たるは歐洲諸強國が新領土を得るときになしたるが如く血を流したるものなく、却て露人と新領土の土民との關係は互に好感情を以て相迎ふるの幸福を見るに至りし事なり。

七　何故露は滿州に入らざる可からざりしか

露の滿州に進入するに至りしは殆んど止むを得ざるに出づ、凡そ二百年間多數の露の移民は滿州の北西の境に居住し纔かにアムール河の主要なる支流アルグンの一線に因りて隔てられたりし、後の五十年間に於て彼等は又多數群をなして河の北岸及びウスリー河の東岸に集り遂に移住地域は北滿州を三方より圍繞するに至れり。されど露人は支那政府との條約を堅く守り境界線を越へて滿州の內部に移住することをなさざり

し、實にアムールの北岸二百哩の間には露の移民各所に散點して居住せしも一人として其の南岸に移住するものは無かりき。然るに支那人は恣に河を渡りて居を北岸に移し、遂に一大居住地を建設し、併も本國政府の治下に生活するに至れり。現に爭點となれる滿州の地は大さに於てオハイオ州の殆んど十倍に亘り、優に一帝國を成立するに足るものあり。若し人口粗密の度オハイオ州程ならば、確かに四十萬の上にあるべし。されど實際其の人口の概算は一千萬乃至二千萬なり。而して其の大部分は南部及び東南部地方の人口なり、露の殖民地の間に分立せる廣大なる北滿州の地は人口甚だ稀薄なるが、こは其の地の農產物、又は鑛產物等の生產乏しきに由るにあらずして社會的及び政事的事情の不整備に基因する所頗る多し。清國政府の威力は未だ國民の繁榮に缺くべからざる個人の權利保護を此の地方に及ぼす程有力なるものにあらず。世人の屢ば耳にする滿州の馬賊は支那に取りて非常なる憂患を釀し、就中露國と境を接する地方にありては其の亂暴殊に甚だしく、ために家產を蓄積し、安全に一家を經營するは到底望むべからざる事なり。只此の地の南部及び東南部に於ては財產所有者が此の患を避くる唯一の手段として馬賊の支配下に身を委ぬることゝせり、されば馬賊等は此の地方に於て爲政者の權を振へりといへども、未だ曾て他の方面に行ひたるが如き暴戾の行動はなかりしといへり。

八　如何にして露は滿州に入るを得たりしか——鐵道

露國は武力を以て滿州に入りしにあらず、平和の時に於て清國と締結したる條約に基き、旅順口、ダルニーの二港を租借し、次て滿州を橫斷して此の港に達する鐵道布設の特權を得たり。此の布設權はシベリア住民のために氷結せる海を去つて不凍港に達すること得せしむるのみならず、シベリア內地より太平洋に至る距離を短縮することを得、大に世界交通の便益を與ふるものなり。此の條約の定むる所によれば清國政府は相當の兵力を以て鐵道を保護せんことを約し。露國側にあつては鐵道布設の特權を享有するに於ては常に相當の代價を處辨し、又支那人が特に尊敬せる墳墓の地を買收し、後日の紛爭干涉を避けんがため、莫大の金額を

放資したり。且つ鐵道線路に沿ふて幅員四百フキート以内及び停車場と修繕工場とに要する方形の地を守備する權利を得たり。

かゝる條約の規定の下に凡そ一千八百哩の鐵路は莫大なる資金を費して瞬時に成功し、是れに伴隨して圖らずも沿道各種の方面に於ける事業の發達に多大の勢援を與へたり。而して此の布設の事に關して歐洲諸國の政府は勿論日本政府すら抗議を申込みたるとなかりき。技師長ウゴッテの計算によれば、公私の團體が滿州に建設したる道路其の他公共の建築物に投じたる資金は、既に二百五十万弗の巨額に達したりといへり。ハルビン市のみにて鐵道布設に買收したる地域に六萬の人口を移殖し、市街井然として教會、學校、病院の設備整頓し、各種の高家軒を並べ商業日に繁盛に赴けり。此の人口の中四萬は支那人にして、各地より移轉して此の地に集まり、漸次進歩して滿州に於ける商業の中心となれり。されば商業に從事せる支那人は滿州に權勢伸張せる露國を目して天より降下したる幸福の神なりと思惟するもの多しとは全く事實なるが如し。露國は漸次勢力を擴張して恰も上部ミシシッピー河谷の如き膏腴の地域を占め、露人及び支那人は共に平和に生活を營むことを得るの基礎を樹立したり。

然るに拳匪の亂は著しく清國社會の組織に動搖を釀成するの結果となり、殊に滿州に普及したる變亂の餘毒は忽ち鐵道布設事業の大阻害となれり。清國人民は露國に許したる特權の保護に任ずるの行にいでず、却て鐵道を破壞し、且つ布設權に伴ふ諸種の特權を蹂躙せんとするの傾向を現はし、是れ迄露國の威壓を蒙りたる土匪も亦再び蜂起するに至りたれば、露國は已むを得ず軍隊を增遣して安寧を維持し、且つ無能の清國政府に既得權の保護を委任するの危險を慮り、自衛の道を講ずるに至りたり。

九　滿州に於ける露國の形勢は英國の埃及に於けるが如し

英國が埃及になしたる行動は恰も露國の滿洲に於ける形勢に等しき關係を有せり。即ち英國は埃及に注入したる文明の事業を保留せんために、土民を御するに一も自國の法律習慣を以てせず、能く從來の慣習に放任して之を懷柔し、永く其の土を占有せんとなしたり

し如く露國も亦前掲述べしが如く土民を統御するの好機會に遭遇し、自國の主權に違背せざる限りは力めて彼等の自由行動に任じたるの事實は曾てトルキスタン併呑の後モハメッド教民に信條の自由を與へて社會の秩序を整理し、漸次露國の支配下に誘致したると、近くはハルビン以南滿州の地に布殖したる行動によりて永く此處に主權を固定せんとするは英露其の軌を一にするといふも決して不可なるべし。アムール河の北部に露人居を占むるに至りしより、支那人は群をなして此の地に集まり來り、本國政府の治下に生活せしも露國は敢て之に干渉を試みたることなかりしが、擧匪の亂以來清國政府の威信地に墜ち、他列强と語ひたる諸種の條約を保護するの力なく、露國は勿論他の列國も亦自衛の策を施すの已むなきに至り、露西亞たるもの既に投下したる諸種の文明的事業を放棄して此の土を去ること當に忍びざる所なり。

十　露は何故に滿州を棄つる能はざりしか

露の滿州に入りてより其の責務として東淸鐵道の保護に任じ、且つシベリアの中部又は東部に年々增加する住民の未來移住の地に供せんがため、正當の手段に基き其の位置を保持し、又海外諸國に通ずる港灣を得て通商貿易の繁榮を期せんとするにありたり。されば滿州撤兵てふ語を以て急激に露國の政策を害せんとするの行動は適切なる判斷の下に出づるを認むる能はざるなり。撤兵に伴ふ條件は一定期間に於て露國のなしたる、あらゆる事業に對する危害の顧慮すべきなきを得るに至る迄は之に備ふるの駐兵を認容するにありたれば、淸國政府の威力能く滿州の平和を維持し、露と約したる諸條項を保護するに足るものなれば、露たるもの當に世界環視の間に立ちて猥りに兵を駐むることなからん、况や滿州に於ける西方文明の事業は既に業に確固たる根底を樹立したりしかば昨年十月世界に約したる撤兵の擧に出づべかりしも、淸國政府猶ほ未だ滿州の匪徒を鎭壓するの力なく、隨つて鐵道保護の任を托するの威信なし。加之日本政府は露の撤兵の不履行を責め、干才に訴へて之を決せんと威嚇したり。されば露は滿州の利得に對する攻擊を防禦するの唯一の策として日本の攻勢を破るにあり。滿州の地に於て露の最も防備薄きは牛莊なり、是れ露國が此の地に駐兵して特に非難を受けたる所以なり。然れども露にして此の

地に備ふる所なくんば日本は容易に遼東半島に逐する交通を切斷し海洋に出づるの口を塞ぐに至るべし。かゝる形勢にある露は戰鬪の準備をなすの已むを得ざるに至りしなり。然るに露國未だ十分の兵備を調ふること能はざるに日本は十分の準備をなしたり。

道義上又は國際公法上の論爭は暫らく措き、交戰以前に於ける日露互に相近接したりし政事上の運動は到底戰鬪の避くべからざりしものありたり。隨つて公平の眼孔より見れば世界の同情は交戰兩國の上に相半ばせざるを得ざりし。目下日本の人口大に增加し、加ふるに國民新進の銳氣に乘じ、領土の擴張を擧げざれば到底滿足する能はざるに至れるは自然の狀勢なり。露國にありても亦然り、過去二百年間に亘りて露の膨張は現今物質上の進歩に伴隨し、大に勢力を增進し、清國政府の失政より荒敗に歸せんとする滿州の野に國權を布かんとせり。

要するに日露孰れを問はず、滿州の野に功業を要求する正當の理由あるを認めず、單に世界の進歩に促され、又人類慾望の指導に隨ひ、惹ひて社會上又政治上の發展に基因して此處に至らしめたるものなれば、二國交戰以前に於ける爭點の解決は互に讓歩して平和に局を結ぶことと世界のため、人道のために人々の希望する所なりしも、兩國平和の交涉は國民の信賴する所とならず、遂に戰爭によりて時局の紛爭に解決を與ふるの已むなきに至らしめしは遺憾とする處なり。



海外新潮

歐人の眼に映したる日露戰爭

海外大勢

日本の勝利

「五月三日」　　（セ、デーリー、クロニクル紙）

今や戰爭の第二幕は、その第一幕と同じく日本の光榮ある勝利を以て打開かれたり。日本の報告と露國報告とは勿論詳細の事に就て異なれりと雖も大躰の件に關しては最早疑ふべからざる程明白に暴露せられたり。日本の黑木將軍は露軍が營阘店に逃れたることを報じ、黑鳩將軍は彼の部下の率ゆる軍隊は「第二の地位」に退却したることを報じたり。殊に露軍は日本の砲兵のいたく勝れたることを告げ、敵より甚しき損傷を蒙りしをいふを以て見れば、彼等の退却せしは毫も戰略的の意味なく全く敗軍の爲めなりしこと明かなるが如し。今回の事件は實に日本にとりて注目すべき一時期を畫したるものといはざる可らず。ペトロパヴロヴスクの破壞は一時日本に海上權を附與し、鴨綠江に於ける日本の戰略を實行するに當りて毫も旅順口に於ける露艦の侵略を恐るゝことなからしめたり。かるが故に時は正に軍隊の回轉すべき機に際し河口に於ける砲艦に助けられて其動作を始めんとしたるが如し。水曜に始まりて日曜に終りし行動は我派遣員によりて詳細に報導せられたるも、こゝにはたゞ其大躰を記せん。

日本軍は徒渉すべからざる河を横り、殆んど三万の露兵を河の北部より追放し、而して露國防禦の中心たる九連城を占領したり、是を以て露軍は奉天に至る路を通して北部に逃れざるべからざるに至りぬ。九連城は讀者の知るが如く西北の大路を支配する市都にして、奉天より旅順に至る鐵路に於て、營阘店より遼陽に至る唯一の道路なり。此距離は甚だ長くして其道路は甚だ險しく、露兵を追放するの困難察するに余あり。然れども日本は今鴨綠江を横りてよく其陣取を固め、江の河門は海陸の兩軍を以て之を指揮しつゝあり。彼等が陸に於て敵に出逢ふや直ちに之を擊退したり、此第一陸戰に於ての勝利は人心に影響すること大なるべきは疑を容れざる所なり。鴨綠江に於ける死傷者の數は略兩國略同一なりし如く思はる。日本の報告によるも日本の死傷七百人にして露國は八百名を超えざるべきをいふを見れば（或筋に達したる報によれば今少しく多數なり）先づ大差なしといふて可なるも日本は二十八の速射砲と小銃及び彈藥の多數を分捕したり。此勝利は實に意外の事にして露國は陸に於ても海に劣らざる强敵に逢ひしことを自覺したるなるべし。我等は今回の事件に於て海上權の占領が如何に陸戰にも大影響を及ぼすべきかを見たり。アーノルド、フオンター氏は海軍の力は陸軍を要する處の地に上陸せしむるの職分あることを說きしも然れども一層精密に極東の事態を觀察するに東鄕指令官は黑木將軍をして鴨綠江に上陸せしむ

るよりも尚ほ大いなる職分をなしたることを感ぜざるを得ざるべし。鴨綠江に於ける露軍の數は日本のそれに遙かに優りしなり然らば何が故に敗を取りしや、今に於て之に答ふることは不可能の事なるも一つの理由は黒鳩將軍が海岸に沿へる數ヶ所の地に軍を備へざるべからざりしによらずんばあらず、日本軍は實に何處の場に上陸し何處より攻擊すべきや容易に推測すべからず、露軍は一所に集冲すること能はざりしなり。是れ全く日本が海上權を占領したるの賜物なり思ふに鴨綠江の戰爭は孤立したる運動にあらず、吾人は久しからずして日本が他の場所即ち遼東半島の何處に上陸し奉天に向て聯合進軍をなすべきを疑はざるなり。次で來るべき激戰の地は普蘭店か又は黒鳩の報じたる「第二の地位」なるべし。露軍の全勢力は幾何なるべきか未だ判然せざるなり。多數の軍勢は終には勝を制すべく露軍の勢力は實に無限なるは世人の信ずる所なりと雖も戰爭に於ては其人數の如き時と場所によりて制せらるべきことを知らざるべからず、吾人の信ずる所によれば日本は第一陸戰に於て已に勝を制し、海には有力なる海軍の補助あり、今后又勝利を得べきは疑を容れざるなり。然れども戰爭は實に意外の珍事に滿つ、吾人の觀察は或は今回の出來事にのみ限らるやも知るべからず、今回の陸戰は第一回の陸戰なり今后如何なる進行をとるべき吾人の括目して見んと欲するなり。

「五月四日」　「スコット、エッキスプレッス紙」

亞細亞の覺醒

最初の陸戰に於ける日本の勝利は今后の計畫を容易ならしむべき戰略を日本に會得せしめたりと覺ぼし。然れども吾人は暫らく陸戰の談話を避け世人の未だ注意せざる他の一面を觀察せんと欲す。世は未だ今回の勝利が獨り日本に對して重大なる意義を有するのみならず實に亞細亞全躰に向て非常なる影響を來たすべきを注意せざる者の如し。

此戰爭は實に亞細亞と歐羅巴――白皙人種と亞細亞人種――との間の強弱の試驗場なりしなり。廿年前否十年以前に於てさへ亞細亞の兵士が歐洲の軍隊と優劣を爭ひ、却て白皙軍人を追放すべしと談じなば恐らく大夢想家を以て目せられたるなるべし。然れども是れ正しく今回の戰爭に起りたる事件なり、亞細亞の模範たる日本人は白人の軍隊よりも優勝なるとは世界の等しく目擊したる所なり。此勝利を回轉點となし其進行を續けなば廿世紀の終らざる前如何なる現象を歷史上にあらはすべきや實に一大疑問なりといはざるべからず。

日本の勝利の報告は亞細亞の全面を通じて走るべし、支那の數百万の人民は之を聞て驚くべし。印度に於て北部亞細亞に於て中央亞細亞に於てブルマンに於て此話は聞かるべし、果して然らば此等の人民が白皙人種の束縛を脱せんとする念を起さゞるべきか、誰人と雖も不安の念なくして起さずと斷言し得るものなかるべし、亞細亞は同一人種より成れるものにあらず、各種の人種の集合にして歐洲各國は皆之を黃色又は褐色人種として半ば輕蔑の目を以て眺めつゝあるは事實なり。然れども僅かに百年以前にありては日本を目するに同樣の見解を持せしことを忘るべからず。三十年以前は彼の支那と同樣と思考せられたる日本は今や世界の大勢力の仲間に入り、海陸共に驚くべき勢力を有することを證明したり。日本は西洋の文明を採用し、世界に比類なき速力を以て之を吸收し、却て之を超越せんとするの傾向を示したり。彼の洪大なる亞細亞洲中よく日本と同一の醒覺をなすべき國なかるべきや。彼の諸國も其前例に動かされて其足跡を踏まんと志さゞるべきや、頗る疑しといふべし。

日本の勝利は豫想せられたる如く「黃禍」を持ち來たすことなかるべし

とはウオルスレー卿の信ずる所なるが、支那の醒覺及び黄人種の結合より一大危險の生ずることあるべしとは今や多數の人の懸念する所となれり。支那は未だ懶惰なる群衆に過ぎずして日本の如き愛國者に乏し、然れども支那が密接に關係したる國家の事變は彼等の眠を覺醒せしむべし、若し支那にして其人民を以て軍隊を造り、其資本を以て軍艦を製し以て日本の制に倣はゞ歐洲が以て侮りし彼の國民も却て驚嘆の舌を捲かざる可らざるに至るやも計り知るべからざるなり。亞細亞は今や己れの潛勢力を自覺し始めたり、日本の勝利は其自覺をして一層速かならしむ。亞細亞の醒覺は實に世界歴史上の一大事實となりてあらはるべし。

日露戰爭に對する吾人の見解

「クリスチャン グローブ」

［五月五日］

露國が今回日本との戰爭に於て經驗する所は不思議にも我英國が杜國との爭鬪に於て嘗めし所と相似たるものあり。露國の電報は敵の砲兵のますます强力なるを報じ、そが爲めに起れる死傷の甚だ多きを告ぐ。露國の當局者は吾人が南亞に於ける苦き經驗を學ばざりしと覺ぼし。日本の軍隊が甚だ有力にして且つ固き決心によりて鼓舞せられ居ることは最早や疑なき事實なり。新なる日本の勝利は近き未來に於て必ず起るべし。



露西亞「平和の神に見放され」

然れどもこは遼陽に達する迄未だ小なる事實なり。遼陽には露國の基礎あれば是に於て大いなる激しき混亂を見るべし、そは今一ヶ月又は六週の後なるべしと信ず、其結果こそ誠に重大なるものなれ。世皆曰く露國は實に制服し難き國柄なり、其根元は無限にして數回の打擊を受くるも之が爲めに潰裂に歸するが如きことなかるべしと。吾人は兩軍がその極點まで戰爭し、仲裁が願はしくなり又必要なるの場合に至るべきを思はんとするの傾向を有す。日本は如何なる點迄切り込まんとするの考を有するや吾人の察するに難き所なり。今回の鴨綠江の戰爭の如き露軍を引寄せんとするの策略に過ぎずして今一層精細なる策戰計畫が旅順の上に施されつゝあるは明白なり 世も亦月の終らざる前之を知るに至るべし。兎に角日本は第一の陸戰に於て勝利を得たり、何人と雖も非常なる興味を以て此恐ろしき演劇の進行を見ざる人なかるべし、如何なる運動又は靜止をも注眼すれば恐ろしき魔力に襲はるゝが如き感あるを拒まん

とするは愚かなる業なり。然れども多少の想像力を有する思慮ある人が其手中に來る些細の報告と雖も常に恐怖と背理の惑なくして讀み下すことを得べきや。吾人の望む所は他の勢力が此間に入りて此事件の進行を妨け、以て早き以前に於て其落着を附くることにてありしなり。戰爭は之に與からざる國民の干涉すべきことにあらずなど、唱ふるは實に大近視眼の見解なりといはざるべからず、此戰爭は實に全世界に關係すべき事件なり、此點は國際平和の條文によりて最もよくあらはれたり。

「戰爭は宇宙の最大なる有害物にして、最大なる背理の事なり。中立の世界が何の故を以て兩敵國の出でゝ而して戰ふの苦しみを受けざるべからざるか、何が故に中立の世界は此兩敵を制裁して其爭を止めざるか。大いなる戰爭は獨り兩敵國のみの損害にあらずして實に世界全躰の災禍なり、兩敵國は實に最多の國民の最大幸福を害するものといはざるべからず、かるが故に最多の國民――即ち中立の國民――は兩敵國を捕へて、自我的ならざる倫理、健全なる哲學及び善良なる風習を教へざるべからず、何が故に彼等は今の前にかゝる擧に出でざりしか、彼等の間の最も賢明なる人、最も善良なる人も戰爭を以て天候、地震又は火山の破裂の如き天災と同一視し、袖手して傍觀するは其意を知るに困しむ所なり」若し中立國が合一して之を止めなば兩敵國をして戰はざらしむることは容易の業なり。日露戰爭も亦此方法によりて之を防止するを得べく、今に於ても其落着を速かならしむるを得べきなり。今正さにかゝることに氣を止め、正しき時に於て其方法をなさんと欲するもの必ずあるべきを信じ、又あらんことを願うて止まざるものなり。

露國否運の前兆

「ゼ、ニユース、オブ、ゼ、ワールド紙」

露國が連戰連敗の否運に遭遇せし第一の失敗は實に彼のペトロパヴロスクの轟沈にてありしなり。今之を回想するに開戰以來の否運の前兆の如く思惟せられ、何となく悲劇の序幕を眺むるが如き心地なき能はざるなり。七百の生靈を溺せ殊にマカロフ將軍の乘り込みし彼の艦の轟沈は實に露國に向て償ふべからざる損失をなさしめり。たゞ船員の數をのみ論ずれば今尚露國は優勝の地位にあり、然れども海と陸とを論ぜず總て戰爭に於ては人員の多夥以外實に一種の兵氣ありて其盛ふと然らざるとは非常なる相違を其結果の上に來たすものたり。露國の兵氣が彼の一戰によりて大に挫かれたるは最も露の不幸なるをなりしなり。露帝の下に立つ士官は兵士は決して卑怯臆病なるものにはあらず、若し一個人として論ずれば恐らく其敵國の兵士に劣ることなかるべしと信ず、然れども如何なる勇士と雖も連戰連敗の跡を受けて敵に向ふ、士氣に幾分の沮喪あるは人情の免れざる所なり、第二の戰爭に於て日本に向ふや彼等を鼓舞する所の一物あるなく、たゝ生命の貴重なると、空しく水底の藻屑となりしペトロハウロスクの記憶より外一物あるなし、奈何ぞ希望と勇氣を以て敵に向ふことを得べき。マカロフは戰爭の最初の失敗を回復し先づ太平洋艦隊の効力をあらはすべき人と信ぜられたり、運命の打擊は俄かに此信任の將軍を其船並びに千人近くの人と共に其存在を拒みたり。最初にはペトロパウロスク號の轟沈に關して多少の疑ありしなり、然れども後に至りて東鄕司令官の沈めしことに相違なき事實が確められたり、始め旅順艦隊がマカロフの指揮によりて戰を挑む所の日本艦隊に當らんとして進みしもマ氏は敵の優勢なるを見て再び旅順に歸らんとせし際、追擊せられ、遂に水雷にかゝりしものと覺し。これ實に露國否運の前兆といひつべき者なりしなり、露國は此れがために總督及び旗艦を失へし外、水雷艇及び數多の費用及び十年來の將士を失ひ、扨てこそ來りし

大失敗の基を作りしなれ。

戦時に於ける東京

「ゼ、エコー紙」

市民の態度

今回の戦勝に就て市民の歡喜實に甚しく、皆皇帝の万歳を唱へ、軒に日章旗を掲ぐ。學生は夜中松火又は提灯を燈して市中を練り歩み地方より入り込みし群衆も亦陸海軍の万歳を呼びつゝ其列に加はる。神社佛閣は國家又は親族の冥福を祈る所の信者を以て充たされ、東郷及瓜生氏よりの報告は到る處の電柱又は店頭の窓戸に貼り附けらる。空氣は晝夜「帝國万歳」「海軍万歳」「陸軍万歳」の聲を以て震動しつゝあり。

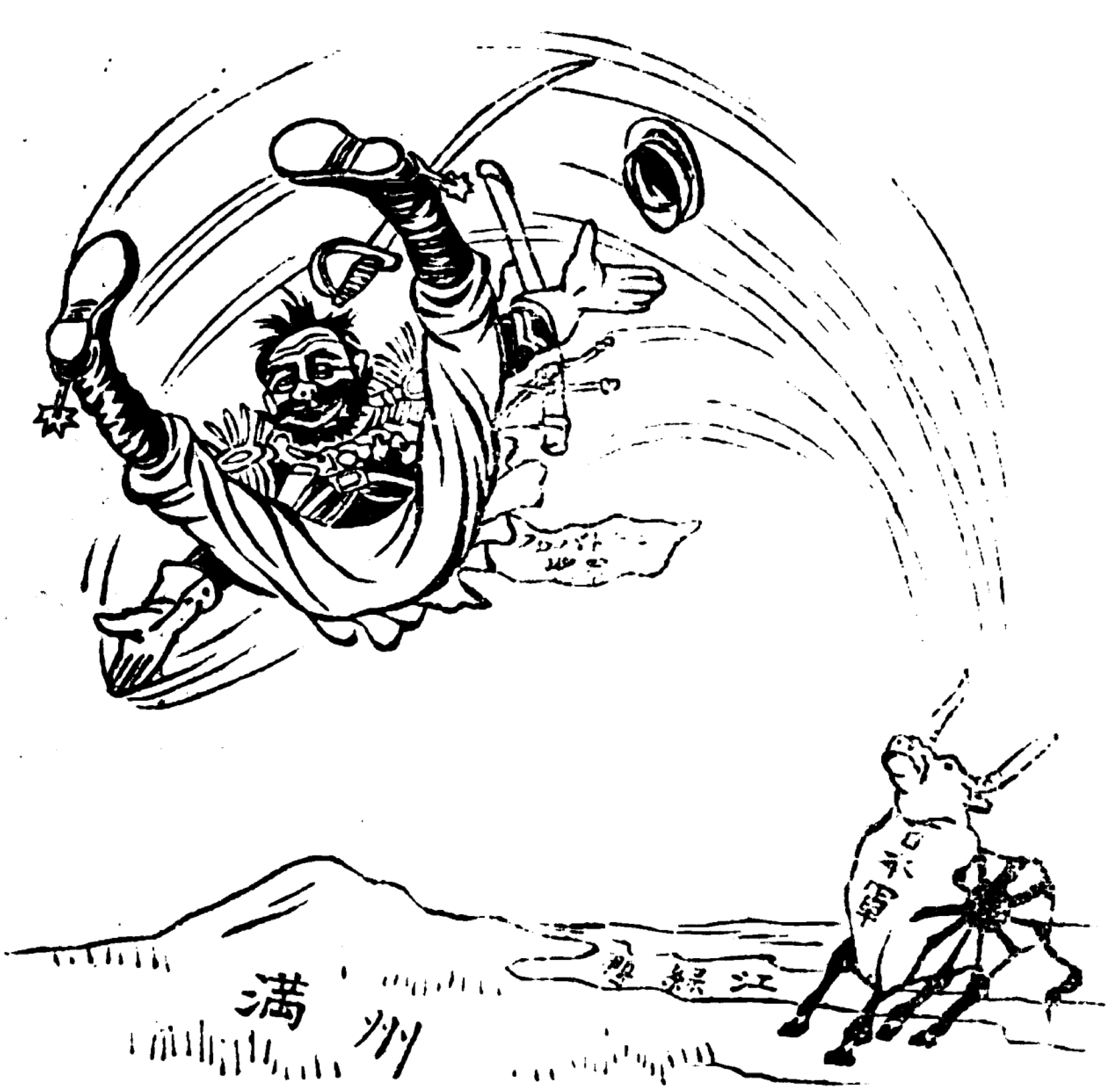
婦人の氣慨

かゝる騒擾と混雜の間にありてたゝ一つ沈靜の態度を保つものあり。婦人即ち是れなり。彼等はその夫又は子弟が戰死又は負傷者の間にあるを以て非常なる名譽となし、皇帝の爲めに血を流せしは人間の義務を盡せしものとして之を喜ぶ。日本の婦人は恰かもスパルタの婦人及び近年戰時に於けるボーア婦人の如き風を有す。如何なる貧人の婦女と雖も勤儉して軍資に献納せんとするの氣風盛ずるに餘りあり。

日本の兵士

日本の兵士は其行爲實に燦爛たり。戦爭に對しては樂天的態度を取り。稍々兵さへ日本の勝利を信じ、勝利の外何物をも夢想せざるなり、或婦人は其子の出立に當りて之を戒めて曰く。

「汝一旦戰場に出でなば生きて還るを期すべからず。汝の出陣するや母子の緣は已に切れたるなり。皇帝は國の父君なり。汝は父の爲めに全身を献ぜざるべからず」と斯の如き生きたる愛國者によりて勵まさるゝ兵士いかでか臆病の働作をなすべき。日本が連戰連勝の偶然ならざる以て知るべきなり。



クロパト「世界一の輕業を御覧あれ」

日本人の勇敢

「四月三十日」　「デーリーメール紙」

金州丸沈沒に關する詳細の報告を見るに一層日本人の勇敢に就て驚かざるを得ざるなり。彼等が全然望みなき地位に立つも不屈の勇氣を以て働き、最後まで露艦に發砲して降參することを拒みたり。是れを全日本人の精神なりとせば――而して必ず然るを疑はず――極東の島民は山をも

崩し、海をも蹴す所の氣慨を有し、死するも徒爲にして死するものにあらざるを見るべきなり。

金州丸の事件は實に不運なる出來事にして該船は霧深きが爲め其護送船より放れたり（斯の如きことは人力の如何ともすべからざることなり）而して露艦は此霧にかくれて進行を續け浦塩斯德に着したるが如し。金州丸の事件は日本にとつて損失たりしに相違なきも此勇敢なる行爲は一層日本の士氣を鼓舞せしことを疑はざるなり。

戰爭の終局如何

「四月三十日」　「ゼ、モーニング、リーダー紙」

現今の狀態に於て日露兩國が「平和の仲裁」に一致せざるべきは明白なる事實なり。吾人の今知らんと欲するは此事件の終局果して如何といふことにあり、海戰に於てはバルチックの艦隊が極東に達する迄日本が遙かに優勝の地位に立つは疑を容れず、陸戰に於ては世の注目皆鴨綠江の戰に向て集まる。若し日本人が斷然勝利を得たりとすれば露國の交通は全く斷たれ、旅順の陷落は實際確實となるべし。而して其時に至るも勝利の報酬は勿論戰勝者の手によりて多量に得らるべし、何となれば勝利の勝れたる試驗はタイムスの論說に於てマハン氏のいひしが如く日本が安全の限界に達する前に發言するか又は露國の地位の危急斯の如くして申出でられたる平和か受けざるべからざるに至るや未定の問題に屬すればなり。

露國の軍資

「四月三十日」　「ゼ、スタチスト紙」

ヘンリー、ノルマン氏が木曜日に於てタイムスに載せたる書簡を見るに露國が有する黃金の軍資に實際五千一百万圓の正貨なるが如し彼が吾人に告ぐる所を聞くに彼は實際露國の金庫を見、金貨を見ることを許さん彼が吾人に報ずるの金額は責任を負ふて明言する所なりといふ。此五千一百万圓の正貨に加ふるに手形によつて蓄積せらるゝ三千五百万圓の正貨あり、若し露國が之を要するの時に至れば直ちに用ふるを得ること實際の軍資と毫も異る所なしといふ。然らば實際の軍資は八千六百万圓の巨額となるべきも戰時に於て數千哩の遠きを距てゝ勇敢聰明なる敵に當るよく幾何時を保つきや一大疑問なりといふべし。

日本の商業

「四月十九日」　「ゼ、フイナンシアル、タイムス紙」

倫敦に於ける日本の領事によりて與へられたる統計を見るに今年三月迄に至る間日本の營業は殆んど戰爭の影響を感ずることなかりしが如し、固より戰爭は二月の中旬に至る迄開始せられざりしを以て其影響を感ぜざりしも、さして怪しむに足らざるが如きも其後輸出入共著しく增加し一千九百三年の通商と比較して二百万磅の增加を見たるは全く日本の活動力強きを證するに余りあり、之を一千九百一年より一千九百二年に至るの進步に比するに正さに七倍の增加なり、過ぎし三ヶ月の輸入は九百六十二万一千圓の巨額にして九十九万九千の增加、其輸出額は七百十七万三千圓にして其增加一百一万二千圓なり。

海外**雜纂**

日本の皇后陛下

「五月四日」　「パーソンス、マカロン」

予が去らんとするとき皇后陛下は予を引見せんとするの使を賜はりたり。陛下の私室は佛蘭西式に裝飾せられ、窓を開けば日本風の庭園を見る。其服裝は又西洋風にして午前の着用としては少しく複雜に過ぎしも而かも惡趣味に流れず、よく品位を保てり、二人の待女も全く洋服を着けたり。

一見して余は皇后陛下の甚た人望ある人なることを了解せり。溫良にして親切なる心情は一瞥の中にあらはれたり、彼女は寧ろ纖弱に見え其靑白き容貌は悲哀を表彰するが如く思はる。彼女は天性親切にして仁惠に富める資質なれば他の人々の如く悲哀を有したるべく、又高貴なる人の悲哀はよく人情を解し同情ある人たらしむるものなり。彼女は廣き宮殿高き位地に於て寧ろ淋しき生涯を送りたる人なり、寂寞はよく沈思の時を給し吾人の運命に就て深く感ずる處あらしむ。

予との談話は重もに慈善事業、病院。孤兒院及び家庭の上にかゝれり、彼女は自ら赤十字社の保護者なれば該事業に關する予の談話を最も大いなる興味を以て聞かれたり。彼女は同情厚き人なれば此大業に當りて其使命を全うせられ、病者及び憐れなる孤兒を惠み、其生命を救はんが爲めには其費用及び犠牲をも惜まれざらんことを望む。

彼女は漸く細節に亘りて談話を始め、數百の問を發せられたり、而して其熱心なること實に甚しく婦人が小兒の事を語るときのみあらはす如き興味をあらはされたり、予の談話はいたく彼女の心情を動かせると覺しく吾人の寺院に於て行はる善良なる事業に就て聞くことの好機を得たることを喜ばれたり。

予は彼女の高貴なる親切が予の談話を歡迎せられしことを喜びつゝ其室を去れり。



熊「アヽ鳩の樣な翼がほしいなあ

エドワード、フイッチゼラルド氏

「リテラリー、ダイゼスト誌」「五月二十一日」

エドワード、フイッツヂラルド氏は波斯の大詩人オマール、カイヤム氏を英語社會に紹介したる人なるが彼の友人の記する處によれば眞に天才を有せし人にして他人が名譽を求むる苦心よりも尙大いなる苦心を以て之を避くることを勉めたる人なりと、彼は生涯精神上の隱遁をなしたる

が或批評家は之れ天才たる所以なりといへり。彼の私生涯の說明に關してはラスキン氏が「オマール、カイヤムの著者」に宛てたる書簡か十年の後始めて彼の眼に觸れたりといふを以て見れば如何に彼が世と交はらざりしかを察するに餘りあるべし。數年以前フッヂセラルドのオマール、カイヤムのルビヤットを熱心に歡迎せし社會は今や此譯者の奇妙なる異常なる生涯に關して大いなる興味を有し來れるなり。久しからざる以前彼の書簡は發行せられ、今年に至りて二冊に亘れる彼の傳記は發行せられたり。

通俗なる意味を以ていへばフイッチゼラルドの名は亞米利加の社會に於て大いなる權力を有するに至れり、オマールを發行せんとするもの一人もなく著者は自費を次て印刷せしも終に其賣高甚だ少かりしなり、然るに現今其歡迎する有樣を見るに其變化の甚だしき驚くべきものあるなり。

ルビヤットは一千八百九十九年ゴールドン、トレージューア、セーレスにあらはれしとは半ギネアより安價にて買ふことを得ざりしなり、然るに今オマルーの傳記を附し、且つ充分よる註解を施して三ペンスを以て購ふを得るに至れり。或る一批評家はオマールを賞揚すると實に甚しくルビヤッイはヨブ記よりて遙かによく知らるゝに至りしことを明言せり。

ウイルケンス、リース氏はフッチゼラルドの奇妙に面白き人格と其生涯の平板ならざりし物語を記載せり。彼がブルヂにありし間多大の收入ありしに拘らず小さき茅葺の小屋に住居せし話はよく彼の趣味と風習をあらはせりといふべし。

「彼は大いなる黑犬を伴ひて外出し、詩人の子にして近村に僧侶たるクラップを訪問すチャールス、ラムの友人なるクエーカー信者バートン氏と茶を喫し、ゼンニイの新鮮なる空氣を吸ひ、日曜には時々寺院に行きて朝の祈禱の間與餐禮の卓子より生ぜし菌を打守るなり、而して椅子を窓側に運び、足を棚の上にかけてセネカを讀み、幸福の感じ居るが如し、夕に至れば支那薔薇の生えたる窓を開きて黑鳥及びックミ鳥の鳴く音を聞き、花園を打過ぐる鶯の聲を愛するなり。彼は又時に愛妹を訪ひ日光溫かなる日には花園の椅子に仰臥してタシタスを讀み　々として飛ぶ小鳥の姿を樂む。」かゝる者を生涯とすれば余は其善良なる目的を達したり、「彼時に記して曰く「予は六ペンス貨幣の如く薄き壁の家に住し、閉すべからざる窓により、足には泥土を踏み、頭上には雀の巣める茅葺の屋根を有す、此處に我は坐し、讀書し、喫煙し、而して甚だ賢良となる、予は正さに塵界のものにあらざらんとす」と、げに彼は此隱遁に於て智識を求め聖なる才幹を見出したりしなり。」

然れども吾人ば時に彼がその安逸なる生活に就て不滿を抱しきゝを知るベルナルド、バートン氏に送れる手紙に曰く「事業なき生涯は眼を開きて見れば滿足し能はざるものなるべしとの恐ろしき疑念に困しめられつゝあり」と

サッカレー、テニズン、スヘッデングの如きフッチゼラルドの最も親しき友人の中にありしなり。げに彼は天性友誼ある人の如く思はる、彼が不變にして輕薄ならざることは其特性の一つなりしが如し「彼が友人を作るには最も遲かりしも一度之を作れは死に至るまで變ずることなかりし」リース氏はフッチゼラルド氏の書簡を以て英語にて書ける最も文學的のものとなし、其識見はよく未來を洞見して豫言者の風度を保てりとなせり。諸々の傳記によりて見るに彼は大學を去る時古文學に通せし學者にてばあらざりき、學校に於ては必ずしも學科を學ばす、希臘及び羅甸の難澁なるを歎けり、又一方に於ては西班牙語を學びカルデロンの八劇

曲を英語に譯したり、然れども最も彼の異常なりしは四十四才に至りて波斯語を始め、此晩學の効として彼の驚くべき「ルビヤット」の飜譯をなすことを得たりしとなり。スペックテートアの言によれば是れ姫と書籍とによりて包まれし隱者の最も深き自己を發輝したるものなり。此れより社會は益々此偉人に就て研究の歩を進めんことは吾人の疑はざる處なり。

聖書の未來

「五月」「レヴュー、オブ、レブユース」

カンノン、ヘンスレー、ヘンソン氏は四月發行のコンテンポラリー、レヴユーに於て面白き題目を掲げたり。彼曰く教育ある基督教徒の思想には聖書に關して一大改革を起すに至れりと。

舊約聖書は所謂正確なる記錄としては夙に疑問を抱かれたり、神經敏なる人は之がために煩はされ、思慮鈍き人は之がために其書を侮れり、其書中には寺院に於て朗讀せざる章句増加したれば、尚一層激烈なる改革を見るは當さに近きにあるべし、カンノン、ヘンソン氏は小學にて敎ふる近來發行の舊約聖書を引用し、教師さへも該書を小兒に敎ふるに當りて大に制限するの傾あるを說けり、彼又曰く新約聖書も亦終に批評家に降參せざるべからざる運命を有せりと。

然らば聖書の未來は如何なるべきか。ヘンソン氏は永久の眞理又は事實よりは全くかけはなれたるものとして別に存在すべきを說けり。吾人は根本道德の書としては聖書の價ある疑を容れず、聖書殊に新約は近世社會の物質的にのみ傾かんとするを防止するには最も有効なる書なることは斷じて疑はざる所なり。

聖書は未來に於ては全く異なりたる意味を以て讀まるべし、然れども之が爲めに其重要又は感化の力薄らぎたりとの意にはあらざるなり。廿世紀の社會は「天と地とは滅する時あるべきも吾言は亡ぶる時なし」といへる聖書の言葉に向て他の厳格なる歷史的確言を附するに至るべきなり。

批評家としてのルーズヴェルト氏とカーネギー氏

「五月十四日」「リテラリー、ダイゼスト誌」

セオドル、ルズーヴエルト氏とアンドリユー、カーネギー氏は疑もなく最も光榮ある名を世界に知らしめたる人々なり。彼等は自ら幸福にして又其讀者には皆奨望の念を喚起せしめ、以て彼等を學ばんとの感を抱かしむる人々なり。

佛蘭西の記者アーネスト、チヤールスはルーズヴエルトの「亞米利加の理想」及びカーネギーの二著述「事業の帝國」及び「亞米利加人より見たる英國」の批評をなしたり。此佛蘭西批評家は其文に於て大統領の感情をカーネギー氏のそれと比較し其理想の恐ろしく似たるを罵りて以て快しとなせり。彼の觀察は全く佛蘭西的の範圍を脫せずと雖も、引用するの價値なきにあらず。

「凡庸にして簡單、面白くして愉快に、實に愉快に、非常に愉快に彼等二人は其新批評を描寫せり。予はかく記して微笑するを禁ずる能はず。彼等は其方面廣く筆力雄健なり、彼等は新批評、活動する人物の批評を書せり。彼等の如きよき胃と、大いなる手足と、明かなる眼を有するものは眞に強健なる人物の批評をなすに適す。吾人は此種の哲學を嘲るの要を見ず」と

大統領ルーズヴェルト氏の闘技好なるに關してはアーノルド、チヤールス氏は次の如くいへり。

「嗚呼思慮ある闘技に於ける眼鏡の力よ、嗚呼アングロ、サクソンの優者よ。ルーズウエルト氏が彼の新歴史的眼鏡を通して世界を眺めつゝある間にカーネギー氏は彼の遺傳的善良の氣風を以て其財産を蓄積し而して偉大なる眞の金滿家となるべし。兎に角此二人は活動社會に於ける二批評家として多少の尊敬を拂はざるべからざるなり。

●日本と支那人

（國民新聞）

佛國前外務卿アノトー氏は露國の奉天を維持するの必要に就て左の如く曰へり支那人が戰爭に干與すべき恐れ益々大なるが故露軍の奉天を維持するは愈々困難となるべし然かも露國は極力奉天を維持するの必要あり奉天に於ける露國の勢力如何は即ち支那人をして受動的ならしむるか進擊的態度を取らしむるかを決するものなり露國が奉天に於て勢力を有する間は彼等は尙ほ躊躇しつゝあり然れども此の躊躇は如何なる行動に變ずるや測るべからざるものあり日本の勝利が黃人種共同の感情を刺激したる事疑ふべからず而して歐洲の勢威が之が爲めに打擊を蒙りたる事亦た明かなり一九〇〇年の戰爭及び其他の戰爭が歐洲の勢威を以て支那人を恐怖せしめたる効果は今や日本の勝利によりて破壞せられたり亞細亞人は凡て日本の勝利を歡迎しつゝあり巴里駐劄清國公使が支那人の同情の日本に向て傾きつゝあるを承認したる事は實に形勢の容易ならざる事を示すものなり日本に對する此の同情は露國に對する公然の敵對的態度に變ぜずとするも其の武裝せる團體をして露軍攻擊を開始せしむるに至るべきの危險甚だ多し此の同情は只だ一歩にて攻擊的態度と變ずべし若し合圖一度下らば此等の攻擊を取れる諸團體は滿洲全土に廣がるべし是れ刻下の形勢の危險なりと。

雑録



北歐自然派の戯曲論（承前）

上田敏

予はゆり子の悲運を以て幾多の事情に胚胎せしものとなせり。即ち母たらむを欲する女人の天性、父が此女に施しゝ錯誤の教育、又此女自身が本性並に其薄弱にして退化せる頭腦に對して情郎の逞しうしたる慫慂これなり。而して又近因としては、聖約翰節、夜の祭のけはひ、父の不在、獸類の馴養、人心を惑亂する舞踏の魔力、夜陰、及び强烈にして人を醉はしむる花の香等ありて、終に兩々相携へて密室に隱れ、加ふるに男の無遠

慮なる振舞に至るを以てせり。故に予は此詩材を用ゐるに當て、生理上の偏見を挾まず、また猥に心理上の見地にも倚らず、偏に此罪過を此女が母に享けたる遺傳に求むることも無く、また所謂「不徳」にのみ歸せざりき、況や何ぞ徒らに勸懲の意を寓すべけむ。

動機の複雜は予の以て私かに得意とする所、そは當代の要求に應ずるものなればなり。而して前人既に斯る見を抱きたる者ありとせむか、予はあらゆる創見が其當初に於て受くる非難即ち此れが奇矯の說に於て全く同主義の人無きにしもあらざるを誇稱せむとす。

人物の描寫に就て言はむか。予は曲中の人物を所謂「無性格」に表はしたり、其理由左の如し。

抑々性格といふ語は古來種々の意義に用ゐられたり。此語はもと全精神中の主要なる本領を意味せしものにして、屢々稟性と同義に用ゐられしが、後、自動力を指せる通俗の用語となりぬ。されば常に己が本性を固執し、若しくは世間の或る一定せる役割に扮したる一個人即ち一言以て之を蔽はゞ生長已に止まりたる者を指して性格の人と稱し、之に反して今尙發育中の者、人生の波に浮びて、かの風潮に任かす熟練の舟子と所謂「無性格」の者と名づく。これ怪むに足らず、實に之を捕捉し之を記述し之を登錄するは素より至難の業なりしならむ。而して人心不變といふ此俗見が衆愚の常に支配せし劇界に入るや、性格とは單に確定不變なる一醉漢、一諧謔者、一憂鬱家たるに過ぎず。此性格を表さむとするには、唯人物の身體を不具ならしめ、例へば內側の足、義足、赤鼻等の特徵を有たしむるか、或は演伎の俳優をして「そは眞に通なる哉」。パルキスデヂッド、カッパアフィルド中の人物は然らむ事を望む」などの常套語を叫ばしむるにて則ち事足るべし。大モリエルもなほ此偏頗なる人物描寫法を棄てざりき。アルパゴンは唯吝嗇なるのみ、而して其吝嗇なると同時に良財政家、好個の父、善良の市民たるを得べきにあらずや。而して更になほ嗤ふべきは、此吝嗇といふ短所は、實に其女と婿とによりて頗る好都合なることなり。二人は必らず彼が後嗣たり得可きものなれば、よし其財產を獲取するまでに、なほ暫らく待たざる可からずとするも、敢て此老翁を咎む可きいはれは無からむ。かるが故に予は劇に於けるかの單純なる性格といふものを信ぜず。此人は愚なり、獰猛なり、妬心深し、嗇吝なりなどゝ作者が曲中の人物に下だす概括の判斷に對しては、苟も人間精神の複雜なるを知り、また罪惡

も亦道義に酷似する一背面を有することを了知せる自然派の士は異議を挾まざる可からざる也。

近代の人物は一の過渡期に生活して少くとも前代より更に歇私底利亞の性を帶びたり。されば此曲中の人物も、心定まらず散漫として新舊の分子を並有する者なり。而して近代思想が新聞雜誌等の力によりて、婢僕の生活する社會の一層にも浸染したる事實も亦予の信じて疑はざる所なりとす。

予が描出したる精神(性格)は過去に榮へたりし上流社會の塵、現代の屑にして、予はこれを書籍或は新聞紙より茲に借り來りぬ。これ人間の土塊にして、譬へば既に襤褸と變じ果てたる晴衣の斷片にすぎず、而して聊か一の進化經程をも書き加へて、曲中人物の弱者には強者のものを盜み其語を借用することを許し、又兩者間に思想即ち所謂暗示を交換せしめたり。

ゆり子は近代風の人物なり。そは斯の如き「半女」即ち所謂男嫌といふ者の、過去に於て全く類を見ざりきといふにはあらねど、唯今代に及で人のよく之を發見し、注目し、驚奇するものあるを以てなり。そも此半女とは曩に金錢の爲めに自ら賣り退化衰壞の徵を表はしたる如く、今は乃ち勢威、名望、榮譽位階の爲めに猛進する一種の女子にして、素より生存に耐ふ可き者にあらざれば、決して良好の人種と稱す可きにあらず、唯吾人の遺憾とするは、彼等が幾多の困難を忍びて、其後嗣を遺すにあるのみ。又退化したる男子輩が不知不識の間に此類の女子を配とし、以て此本分を失へる人間の種を連續せしむることそ不幸なれ、斯る人間にとりては人生は却て一の苦痛なる可し。唯幸にも彼等は現實の世界と調和する能はざる爲め或は抑壓したる性慾の制す可からざる破裂に因りて、又或は男子を獲ること無からむとする望の畫餅に歸するに因りて、漸く滅亡に瀕しつゝあるなり。げに此種の人間は悲壯の趣を有す。そは自然に背ける絶望の抗爭を表はせばなり。彼等はまた自然主義が散走せしめたる羅曼主義の遺產なるを以て、悲壯の趣を具ふ。自然主義の期する所は幸福に在り、而して幸福とは強健にして生存に耐ふる種族のまさに享く可き所ならずや。

ゆり子は又今日の神經或は大腦貴人の爲めに勢頓みに挫折したる戰士貴人の遺孽にして、罪過といふ毋が、家庭の間に齎らしたる不調和の犧牲なり、或は時代の錯迷、身邊の事情及び羸弱なる體質之を一括して概言すれば、前代の宿命即ち世運の犧牲たり。自然派の人

士は神の觀念と共に罪過の思想をも排斥したれども、惡行の結果、罰、監禁、又之を懼るゝ情は自然派の人士が其罪を赦るすと否とに拘はらず、嚴然として存在するが故に抹殺す可きものに非らざるなり。凡そ損害を加へられたる人は、之を受けざる他人の如く、平然として之に好意を表すること能はざるにあらずや。故に此劇に於て父なる伯爵は止むなき理由に因て罰を加ふること能はざりしもゆり子は名譽を重ずる先天或は後天性の感情に基きて自ら進て死に就かむとせり。彼は此感情を貴族の祖先より遺傳したり、而して彼等は又何れの邊より之を得たる。蠻族の性よりせしか、亞細亞の發生地よりせしか、將また中世の騎士道よりか。――――げに美しき感情なり、而もこれ現代に於て人種の生存には寸毫の利益なきものと云はざる可からず。これ即ち武士の腹切と稱して、士辱しめらるれば自ら屠腹する日本人の道念律と同じく、今なほ一種の變形を以て歐洲貴族の特權なる決鬪の法に存するものなり。されば曲中の奴僕ジャンは生存すれどもゆり子は名譽を失して生存すること能はず。實に。生命に危を及ぼす所謂名譽と稱する偏見を全く缺きたる所は奴僕が其主君に勝れたる所以なり。而して吾等アリヤ民族の心にはこの貴人性或はドン・キホオテ一流の思想今なほ殘存したればにや、不名譽の行ありて、名譽を失したる人の終に自殺するを見て、頗る同情を表する者多し又大人物の倒れて横はるを見ては、たとひ其大人物に再起の力ある時と雖も如何にもして名譽ある行を施して其早く恢復せむことを切望する者比々として存す。奴僕ジャンは之に反して一種族の開祖なり。分化の時に顯著ならむとする一人物なり。彼は野人の子にして又將に起らむとする貴人の資格を具ふ。彼は容易に百事を習得す。蓋し其官能即ち嗅覺、味覺、視覺は充分に發達して、且審美の思想もまた然ればならむ。かくて既に自らの地歩を進めて、强健の性を具有したれば他人が捧ぐる利益を收容して毫も衷心に疚しき所無し。また彼は其周圍を全く知らざる者の如し。何となれば、そは既に放棄したる地位なるが爲めなり。而もなほ之を恐れ之を遁るゝ所以のものは、其よく己が秘事を知り、計畫を察し、榮達を羨み、滅落を望むを以てなり。故に彼の性格は曖昧にして不定、或時は高貴なる者に同情を表し、或時は今己が上位に立つ者を嫌惡する兩極端の間に動搖す。彼は自ら稱する如く一種の貴族なり、上流士人の秘訣を習得して擧止既に閑

雅なれども、時に或は粗野の動作無き能はず、外套の着ぶり既に優雅にして、なほ未だ身躰の清潔なるを保し難し。

ジャンはゆり子令嬢に對して尊敬を表すれども、婢女クリスティイ子が其危險なる秘事を知るを憚りて心密かに悍を抱けり。而してジャンは其性極めて冷靜なれば、當夜の出來事を以てむざ〱將來の企圖を破る如き愚をなさず、奴僕の粗野なる性を具へたる上に、貴人の有する如き涙脆き情を缺きたるが故に、血を視るも色を變ずること無く。且つや不運を忍びよく之を避くるを得。されば爭鬪の裡より恙なく免かれ出てゝ客舍の主人となりすまし、よしやルマニヤの伯爵たらずとも、その子は蓋し大學の學生となりて終には判事にも任ぜらる可し。

下級社會の人生觀に就てジャンの述ぶる所は頗る主要なる説明なれども、これまた常に然りといふ可からず。彼は已に益ある陳述を爲さむためには、眞に背きたる所説を附加して憚らず。ゆり子は下流社會を憫みて、上流人士の壓制を堪へ難しとするならむと推量せしとき、ジャンが之に和するは、自然の勢なり。蓋しゆり子の同情を獲るは實に其目的とする所なればなり。されど會々自らを群衆より分離して利ありと考ふる時は、聊か所論を更ふること無きにしもあらず　（未完）

征露從軍雜錄

左に掲ぐるは記者の知人陸軍通譯官西山榮久氏が出征地より寄せたる情報なり。官規あるが爲めに自由に事實を記載することを得ずと雖も、之より時々同氏の見聞雜錄を掲載することあるべし。

▲**五月七日**、征露の途に上る。同十日、某船に投じて、玄海灘を渡る。船中の人、多くは、是れ征露の勇士、清、露語の通譯官相語り、相論じ、相飲む。快言ふべからず。船既に濟洲島の附近に至るや、忽にして、風烈しく波高く、輪船の動搖甚だし。止むなくして、間を巨文島に避く。垢染みたる白衣を纏へる朝鮮の水夫、兒子を伴ひ來りてマヽ、シモガレと叫ぶ蓋。し飯を與へとの意なり。上陸して村落を訪ふ。竹村、徳村、長村等あり。外國船も屢々寄航すと見えて、ワンダラー等の語を言ふ者多し。ボンヤリ顏の朝鮮人、一見亡國の民たるを知らしむ。

▲**鴨綠江の河口**に至る。此地暗礁頗る多しとの事なり。此時濃霧四方に塞がりて、船、河口に在りと雖、陸地を見るを得ず。空しく河口に留まること三日、想ふに、

斯くの如くならば、航江の利は餘り多からざるなり。此頃巨鯨、輪船の附近を游泳す。その數無慮數百、洵に壯觀なり。此地以て捕鯨の利あるを知るべし。邦人何ぞ一擧して、此等の巨鯨を捉えて、その財嚢を肥さざる。

▲鴨綠江を溯りて安東縣に達す。土人は沙河子、或は沙河鎭と稱す。商業殷盛の地なり。〇〇のある所にして、邦人の入り込めるもの頗る多し。朝鮮、支那に商業に從事せるもの、爭ふて開店す。醜業婦七名、迥に釜山より來縣すと云ふ。宿泊すること二夜、再び鴨綠江を溯る。

▲鴨綠江の水此河支那朝鮮には珍らしき淸水なり。加茂や、墨田に比すべからずと雖、慥に滿洲の一勝と云ふべし。兩岸は小丘あり。時に危岩怪石兩岸に聳え、楊柳は漸く綠ならんとし、老松また岩上に立てあり。此間の航行、尤も快く。ジャンクの上下するもの、亦頗る多し。但し、航行一に風に依るを以て。定期の航通に便なる能はず。また處々に淺瀨あり。河底は凡て沙石。船底と石と軋るの音聞こゆ。

▲昌城、北韓の一城より。江の東岸に位置す。城廓を繞らし、要害堅固なりと雖、商業全くあらず。一泊す。

▲滿洲の內地、僕の住する所、〇〇の地なり今言ふ能はず。丘岡崎嶇の間、小流至る處にあり。丘に樹木あり。支那の他の地方と同からず。今や、郭公の聲は四方に聲こえ、鶯は尙ほ谿谷に歌ふ。道路の不便を除かば、此地一の不快なし。

▲內地の產業　今や、豆漸く長じて、一寸餘、玉蜀黍、高梁も芽を出せり。到る所に搭栽す。人口多からざる此地、頗る收獲あるべきを想ふ。牛、羊、豚等は到る處にあり、鷄また頗る多きが如し。外に尤も注意すべきは、山繭の產なり。丘岡に楢を植え、之に蟲種を放つ。時々空砲を放ちて、鳥の近づくを防ぐ。繭紬の產出、蓋し此地頗る盛なり。

▲露兵の蠻行、內地を航行して常に聞く所は、露兵の蠻行なり婦女を見ては、直ちに拉し去り、姦して後ち之を殺す。害を受けたるもの幾十人なるを知らず。鷄、卵、牛、羊、麥粉等の盜取せられたるもの、また頗る多し。僕等、卵を買はんと云へば、皆曰く露兵母鷄を盜取す。今卵ある少しと。

▲日本人を歡迎す。日本人至れば到る處に好々と叫び、歡迎すること盛なり。僕が一行の兵、語を解せず。鷄二羽を求め、三十錢を給す。賣人曰く、一羽に付三十

錢なりと。僕爲に兵に其旨を告ぐ。兵再び錢を出さんとすれば、彼れ却て受けずして曰く、日本と支那と一家の如し。一羽は、獻じて以て慰勞とすと。その他、卵を買はんと求むれば、三四個を手にし、來り曰く、今有る所僅に是のみ。錢を要せずと、僕等一行某地に行く。主人、招きて誘ひ入る。茶菓を給し、歡待す。その他總て斯の如し。

▲二年の米、滿洲の内地に在りて、兵士の食ふ所の米、一俵二斗の代金幾何ぞ。某兵站司令官曰く、運賃を凡て算すれば正に三十圓に上ると一兵を養ふの費、また少しとなさゞるなり。

▲寛甸の戰　寛甸縣の先方には、敵の騎兵一個旅團ありとの事なり。頃日我が兵と會戰し、その二三人を斃せり。我が兵また死傷あり。

▲敵の弱　露兵の怯弱なる、日本兵と見れば直ちに逃げ去る。その狀眞に笑ふべし。五六百餘騎來りて、我が兵の二三十人に對せんか。直ちに奔り去る、此頃も二三人の兵偵察の爲め、懷仁附近に至る、敵兵の在るもの悉く走り去れりと云ふ。とても進擊し來るの勇氣なしとなり。

▲今や天氣和順、尤も身軀に適す。内地の天候と此地の天候と何等の相違なきを見る。僕、異都にありて軍に從ふ。幸に身は頑健なり通信自由ならず。諸君、請ふ之を恕せよ。

露國革命黨員の眼に映じたるブラゴヴェスチェンスクの虐殺　（承前）

（露國革命黨員レオ、トウィッチ著）
（西比利亞日誌の一部抄譯）

渡邊緑波

彼等が豫見、彼等が恐怖は誤らざりき、冷血の虐殺者は彼等の來るを待ちつゝあるなりき、嗚呼斯くの如きは、只中世紀間法敎裁判所時代及び異敎徒迫害の時代に於ける猶太人及西班牙に於けるムア人等のみ。

アムールの上流左岸、ブラゴヴェスチェンスク市を距ること數哩にコサックの移住地あり、此處に日出前數千の支那人等……老者あり、不具者あり、廢者あり、婦人あり、小兒あり……はコサック兵と警官とに驅られ來るなりき、病患又は疲勞の爲めに此處まで來るを得ざりしものはコサック兵の爲めに路に斬られたり、大なる支那人商會リ、ワ、チャンの支配人の一人

は此地に來るを拒み、嚮に露地に在留する支那人全躰に對して安全の保證を支那人代表者に約束したる知事の許に至らしめられんことを要求したりしが、其答としてコサック兵は直に其場に之が首を斷ちたりき、而して警察長シャバノヴは此場に在りつゝ尙ほ此の不正なる行爲して一言の抗議もなさゞりき。

無慘なる支那人等はアムール河畔に驅られ來りし時に、「水中に入るべし」と命ぜられたりき、然れども之に投じて對岸支那地に達するに如何なる方法の存せしぞ、河流は此部に於て廣さ殆んど六丁許、加之水勢頗る急なりしなり、少しく思を潜めなば何人も此死の水崖に臨み立てる哀むべく傷むべき人類の恐怖の狀を眉目の間に描くを得べし、人民等は皆地上に跪坐して兩手を擧げて天を拜し、或は自ら胸上に十字架をさへ畫きて、偏に斯かる死の除かれんことを請ひ、耶蘇教徒となりて露國に歸化せしめられんことを祈願せり、然れども一片慈悲の心なく只官命をのみ充たさんとする酷吏等によりて、彼等の祈願に與へられたる只一の答辯は、彼等を此深淵に驅らんが爲めの銃槍の突擊、劒或は銃臺の毆打にして、更に尙ほ強ひて願ふものは直ちに斬殺さるゝのみなりき。

當時數日間引續き日出前に行はれたる溺水、虐殺を目前に見たりし人々は、皆等しく其傷心斷腸の光景を談ぜり、水中に驅投せられたる一滿洲人の家族は兩親及二兒より成りしが、兩親等は各一兒を抱きてアムールの急流を橫泳せんとしたりしが、如何で〳〵、彼等は間もなく急流中に溺沒せり、又一家族には一兒ありて母は虐殺者及其他の人口に對して、せめて此兒丈を救けて養ひ取られたしと懇願し居りしが、固より許さるべくもあらざりき、母は小兒を岸上に殘して自身は水に入りたりしが、數步にして歸り來り之を抱きて河に入り、再び復た歸り來りて此貴重なる荷物を岸に置きたりしがコサックは此婦人の逡巡反復を止めん爲めに母子共に之を殺せり、此母及び斯くして死に驅り入れられたる一切の犧牲等の慘刑の狀は、苟くも人心未だ全く沒却せざる人々に必ず察知せらるゝに難からず、上記警察官長シャバノヴの如きすら此の慘憺たる光景の終局まで見居ること能はずして去れりと自ら言へり。

然れども此大多數の中の極小部、最も水泳に秀でたる強きものは支那岸の或地點に達するを得たりしも、斯くても尙生殘者は極めて少なかりき、岸上のコサッ

ク等は此等のものが或は援からんかと見るや之を狙撃するなりき、又對岸の土砦中に位置を占めたる清國射手も亦泳手に對して發砲したりき、彼等は之を以て露國人なりとなしたりしが、或は兩國敵意を狹む初めに當りて早く歸國すべしとの提言ありしに拘はらず、依然として露地に在留せし一切の支那人をば敵なりと認めたりしか、其就れかなるべし

　七月十七日、夥しき屍躰がアムール河流に流下するを見るに至りて、ブラゴウェスチェンスク市民等は皆、此市内に在りし武器を帶びざる平和の支那人等は、總督自身によりて清國に歸るに及ばずと忠告せられ、然かも總督自身のなせる保護の約束を信じて爲めに無慘の死に至らしめられしものなることを明かに知るに至りぬ、實に其保證の約束を與へて未だ二日ならざるに陸軍知事クリプスキーは不信實にも「清國人民は之を清國に送還すべし」との口頭命令を以て。前言を破りたるなりき、

　正義の市民等は彼知事の此口頭命令より生じたる結果を知るや皆憤怒と恐怖との情に充たされ、幾多の悲慘なる譚話は涙と戰慄とを以て談ぜられ、幾多の人民は之に抗議せんとし、皆哀れむべき無辜の支那人等に對する殘忍野蠻なる處置に對して燃ゆるが如き憤恚の情を現はしたりき、然れども此露國に在つては如何ともする道なく、加之ブラゴヴェスチェンスク並にアムール金州には陸軍刑法布かれ、其結果敢て抗言するものは直に軍法裁判所に引致せらるゝなりき、支那人に同情を寄する人々の中に、せめては此の恐怖時期の繼續を防止せんとしたるものもありき、僅少の例は其家中に支那人の僕婢或は客稀を隱匿せんとしたる人々の間に起りたりき、即ち此等の人々は上述虐殺の生殘者に對しては人的保證をなすを許されんことを地方官廳に强願し、或は特殊の勢を有する人々のみ一二の支那人を其家に助け置くことを許されたり、然かれども斯くの如きは甚だ稀にして、斯かる露人保證の方法によりて生長せし人々は皆戰爭中は警察權の監視の下に居らざるべからざりき。

　富裕なる一靑年淸商にして歐洲敎育を受け露佛二國語を談ずるユン、チヤー、サンは露國官吏に非常なる賄賂を提供して僅かに死を免れたり、然れども彼は後に、斯かる屈辱を受くべかりしを豫め知りたらんには、寧ろ河中に死すべかりしなりと言へりと。

　又此市に於て善く其名を知られたるマケエヴァア夫

人は、其家に從來五年間奉仕し忠勤怠らざりし一支那靑年家僕を其家に止め置かんことを請はんが爲めに、平生相知る知事の許に至れり、此家僕は此一家に取りては非常に貴重なるものにして、若し何人か病氣に冒さるゝことあれば彼は晝夜其褥側を離れず看護し慰藉するなりき、然れどもクリブスキー知事はマケヱヴア夫人が支那人の爲めに懇願し居るを見たる時に「支那人を！」と拳を固めつゝ更に「彼等は取扱ふべき樣に取扱はんのみ」と、而して更に夫人が此の懇願を主張し且つ其支那人は耶蘇敎徒たらんことを希望し居れりと、知事と打爭ひつゝ談じたる時に、知事は只「余は斯くの如き人民の禁錮又は放免に關しては何等の命令をも發せざりしを以て、余と談ずるも甲斐なし」と答へたりき、而して彼知事は又溺死及虐殺の耻辱をも凡て其部下なる警察總長バタレヴイツチ及びキヤプチン、ヘヴォルコウィンスキーの肩上に負はしめんが爲めに（彼は後に之をなせり）斯かる故意の言辭をなしたるなりき、

同夫人は又此地に於ける精神界の最高權者オルトドツクス寺院の僧正よりも亦同樣なる待遇を受けたり、即ち此夫人が跪坐して其家僕なる一支那人に洗禮を受けしめられんことを乞ひたる時、此基督の愛の使徒は薄情にも夫人に對して、支那人の爲めに周旋するが如き事をなさゞれ、且つ自分一人のみ斯くの如きことをなすは正しからずと告げ、遂に之を其職責ある有司の許に至らんことを勸言せり、人道の力は有司の許にも夫人をして勝たしめ再び聖寺に至らしめしに、僧正は又之を有司に送りたりしが、幾多の困難の後夫人は遂に其目的を達したりき、然れども庇保なく此夫人の如く力めたるは蓋し稀にして、余は此問題に關して頗る意を注ぎ力を盡して搜めたるも、露國雇主の周旋成功して助けられ得たる支那人の例は極めて少許を得たるに過ぎざりき、且つ其居留地に於ける支那人及滿州人等は全く何等斯かる庇保辯護者なかりしを以て、殆んど例外なく溺死せるか、然らざれば虐殺せられ終りたり。

虐殺に對しては、支那人には此市に放火する等の危險なしと論じたりし敎育ある人々の中にも忌ましき辯解を試みるものありき、即ち彼等は言ふ「吾人は彼等を援くる爲めにとて其同國人等を送還して敵勢を增すの患をなすを得ず、又或は之を監視し、之を養ふて吾人の糧食を浪費せしむべきものにあらず」と、然れど

も、此等の支那人等を一箇の場所に抑留して全く無害ならしむるを得るを以て第一の辯解は理由なきなり、又彼等支那人は各自の店に其必要以上程の充分なる食物の蓄藏を有せしを以て第二の辯解も亦理由なしとせざるべからざるなり、實に此等支那人の蓄藏糧食は其死後、コサック、警官及其他の爲めに掠奪せられたる所なりき。

此等殘忍野蠻なる行爲の跡を掩はんが爲めに官廳は警官等をして、支那人の店舖、家屋内には武器、彈藥等を、或は爆裂藥等までも蓄ひ措きたるを發見せりとの虛報を流布せしめたりき、斯くの如きは固より信なる能はざる所なるも然かも多數の市民等が之を信じたるは餘りに輕忽に過ぎたりと言ふべし、實際の事實としては掠奪、及清國債主に對する債務の破棄の目的等が、此虐殺及辯解の主要素なりしなり、支那人の拘引られたる後コサック及警官等は先を爭ふて彼等の財貨を奪ひ、彼等の家宅を掠め盡したりき、斯くの如きは啻に下級官吏のみの事にあらず、高等なる官吏も亦此方法即ち掠奪に依りて自ら富ましたるなり、即ち孰れの警官も地方官も全く公然之を論じて其配分を取りしなりき、又支那人に對する幾多の債務者は、支那人等は其慣習として何等の證書をも保存せざるを以て、此等不幸なる債主等の無慘なる最後によりて自ら益したるなりき、實に支那人等の取引は全く人的信用に基くものにして、彼等の正直は殆んど格言同樣にして、支那人に對する露國債主等が警官の看過によりて往々百倍も支拂はしむることあるに反し、彼等は若し此かる證書の有らんには紛失の恐れもあり、或は又已濟のものに對し、後に至り清國に在る其の相續者等より債權執行等起ることを恐るゝなり、吾人は此等の敬愛すべき商賈其他に對して行はれたる掠奪の例を悉く擧ぐる遑なしと雖も、只一二の模型的の例を記述せんとす。

支那商賈の貨物貯藏の爲めに一軒の家を賃貸し置きたる蒸汽輓粉舍主ブャノヴと言へる富裕なる一家主は、此等貯藏貨物所有主の溺死せるを聞くや、有司の眼に觸るゝなく此死者の財貨を自己の有にせんが爲めに、其家屋と隣家との間に一木造家屋を起したりき、又前記者の從弟にして等しくブャノヴと呼べる一富者は同居支那人の店の下に地下道を掘り穿ちて其の死者の財貨を自宅に運び移したりき、又他に支那人に一軒の店を賃貸し置きたる一商賈ブリカステノヴは兼て所持せし合鍵を以て之を開き、其貨物荷車に積み街路を

過ぎて自己の店に運びたりき、此等後二者はブラゴウェスチェンスイ法庭に召喚せられ、竊盜行爲を以て罰せられたりしが、大多數の掠奪者は決して露見することなかりき、是れ主として警官、有司等が之を隱匿して又自ら利する所ありしに由るなり、支那人の溺死後警察官吏等は、此等遺産の合理の相續人の生ずるまで之を保管することに決定せられたり、然れども若し我露國警官の品性及支那人街には數百万を價する貴重貨物を有する幾多の店舖の存する事實とを合はせ考ふるときは何人も容易に想像し得るが如く、此決定は明かに警察官吏の多大なる利益の根原となりしなり、戰後僅少の場合に於て警察官等は之を、幸にして生殘りたる者、或は合理上の代表者を以て其所有主たることを證したる支那人に交付したるもありしが、此等の場合に於ては手續其他の費用殆んど彼等の貨物と等しき程の額に上りたるものすらありき、加之警官等が所有主の主張する權利を認むるや否やは法律上の規定に據るにあらずして、一に全く其の提供せられたる賄賂の多寡に由るなりき、而して各高等官等が其保管を囑せられたる財産の私占は頗る表面穩當なる方法に依りたりしが、警察長シャバノヴの爲す所は全く之と異にしたり、實に彼が白晝此等財産の貯藏所より爭論しつゝ、數臺の車に貨物を搭載して持出だす等の行爲は、一紳士即ち等しく支那人の遺産の管理の任に當り居りたる公平正廉なる一法官をして深く其の非道を驚駭せしめたりき、此事延きて大なる物議を惹起て、一度法庭に致されたりしが何等の結果もなく、彼シャバノヴは依然として其の官職さへも動かされざりき。

虐殺せられたる支那人の屍體は數日の間アムール河岸に流れ寄りて其數殆んど數へがたく、或は著しき河幅を覆ひつゝ流下したりき、然れど最初の程當地二新聞紙にも何等の記事なく、又此市の支那住民の悲慘なる運命に關する巷説もなかりき、只其後四五日にして、此殘虐且つ悲慘なる事態に關して非常なる憤恚の情を表はしたる一記事 'The Omur Province「アムール州」紙上に現はれ、此記事は露都の各新聞紙上に轉載せられ、茲に始めて文明の士人間に、如何にして此等數千の哀れむべき人民が死に致されたるかを知られたり、而してブラゴヴェスチェンスクの機關なる 'The Amur Gasette アムール新聞は、露地在住の支那人等はアムール河の彼岸に踰ゆべしとの內訓によりて淸國に送還せられたりとの虛報を以劣卑てにも之を覆はんとせ

り、而して總督クロデコヴは露都に於ける其筋に公報を發して言ふやう、「ブラコヴェスチェヤンスクが支那人より砲撃を受けたる際に生じたる支那人の死傷は之を河中に投ぜり、而して其數四十」と只之れのみが書かれたる歴史なり眞の歴史とは斯くの如きものなるべきか。

各地の官署は皆一樣に露清國民間の敵意の狀を報告し、或は假裝せる無數の清國兵士と衝突し悉く之を討滅したりと報じ、或は曾て無かりし戰爭等の記事を捏造し、然かも其實際に於ては婦人小兒等を見しに過ぎざりしなり、其他凡て推して知るべく、殊に滑稽なりしはパアチア、パッドに屯在せるカノノウィッチ大佐が自ら此地に於ける無數の清軍を征服し其功績の爲めに勳章を得たりと傳へられ、其後直に大佐は上記の地に於ては只二個の日本婦人に遇ひしに過ぎざりし事露はれたりしあとなりき。

話頭を再びブラゴヴェンチェンスクに歸らしめよ、支那人の溺死及虐殺は必ず以前に豫知せられし所に相違なく、且つ恐らく口頭の命令に過ぎざるべきも、此等の慘事は陸軍知事グリプスキー將軍の緊急令によりて起りたるものなること疑なし、然れども此れが嫌疑を避け且つ自身を淸うせんが爲めに虐殺の數日後更に訓令を發して言ふやう「此市内及近郊なる武裝なき支那人等に對する殘暴なる待遇の報告等本官に達せり、而して此等の犯行は市内又は近村の農民及コサック等によりて行はれたるものなり、斯くの如きは支那人より最初敵意を示したるに出てしものなるべしと雖も今後何等武裝なき人民に對して暴擧を加へたるものは嚴重に處罰すべし」と、然れども今此命令を發したるグリブスキー將軍は更に露人がサガレン村(支那人村)を占領したる後自らコサック軍の長として「河を渡りて支那地に赴き、一切の支那人夥黨を全滅すべし」と命令したりき、語を換へて之を言へば、彼は支那軍隊の逃走後其地に止まる平和の支那人を虐殺すべしと告げたるなり、何となれば一度サガレン村陷落したる後には一個の支那兵士も其地に止まる筈なく、殘るは只平和の民のみなるべければなり、即ち彼は全然無辜の民の虐殺を命じたるに相違なきなり。

グリスキー將軍は又一面に於ては「平和の支那人に對する暴行の場合」を調査する爲めに特に委員を置くが如き僞善の行爲をなせり、然れども此委員も亦自他の指揮の下に平和の支那人の溺死及虐殺を生じたるこ

とを報ぜざるべからざるが如き有様なるを以て、自然其の發見も之を罰せらるゝに至らざりき、斯くて數ヶ月の後グリゴスキー將軍は、「此調査委員の報告に依るに彼の不幸なる慘事の原因は、此等の事件の處理を委ねられたる露國官吏間に一致を缺ぎたりしに由る」との布令を出せり、此布令の辭句は今上ニコラス二世即位の際に當りてホティンスキー平原に於て數千人の慘死を生じたる後に發したる言を殆んど其儘にしたるものにして、其原因は皇帝之を統御の一致を欠ぎたるに歸したるものなりき、グリブスキー將軍も亦明かに之を以て、折しも日曜日の事なりし爲めに此死の死殺は統御の不一致より來りしものとなし、ビラゴヴェスチェンスク攻擊中に起りたる支那人の虐殺に對しては全く責任を負ふものなからしめんとするにありき、而して此計略成功し、何人も曾て責任ありと注目せられたるものなく、グリブスキー將軍並に其屬僚は依然として其職位を保ちブラゴヴェスチェンスクに在り。

其結果數多の地方官等が支那人を殺すべき直筆の命令書等を發したりしこと、並に不幸なる平和の支那人等が、一部或は全部、多數の村落に在ては農民に、コサック移住地に在つてはコサックに殺されたりし事實を明かにせらるべからざるに至り、斯くて多數の地方官吏等は前述の問題に關して其屬僚部下に發したる命令書の爲めに罪を獲るに至れり……即ちコサック大佐ヴォルコウィンスキー。キャプティン、ツッスルコウ及びスタノヴォイ警察辨理ヴォルコヴ等其他數人ありき。

各地に於ける露國農民及びコサック兵等は各〻其長官の命に從ひ出來得る丈け武裝をなし破壞事業に着手したり、然れもど余はセヤなる滿州地に於ける出來事に關しては委しく說明するを得ずセヤはブラゴウェスチェンスクより程遠からぬ一地方にして、其住民等は例令露地に住すとど雖も外交上の諸關係に於て清國民にして、清國に稅を輸する所のものなりき、然るに何事ぞや此地六十八箇の村落は悉く燒燼せられ、其住は如何にと問へは或は殘忍にも虐殺せられ、或は其財產を掠められ、家畜は悉く驅り去られたる等、其慘狀言語道斷なり、此等及此他の蠻行を遂行するに於て……：彼等自身の本能に從ひ、或は長上の命令に從ひ……：我が露國民は全く忠義なる臣民の本分を盡したりと信じ居るなりき、されば「此れを我が皇帝並に我國の爲めに盡すべき所のものなり」との言を以て此地の大

膽なる諸豪傑(哵の意味)等は其の譚話の語尾となすなりき、平和の時に當りては無言の動物に對してすら尙ほ慈悲深かりし人々は、此等の恐怖時代に於ては全く野蠻殘忍の性に變じたりしなり、茲に一例あり……或露人村に牧羊を以て業となせる一老支那人ありて、其地の農民等と皆相和親し居れり、然るに一朝「支那人は悉く之を殺さゞるべからず」との令達到りしかば、茲に村會を召集し、此一老支那人の處分に關して議せり、議員等は皆此支那人の善良且つ正直なるに異議なかりしと雖ども遂に之を殺すことに議決したり、而して彼老人と共に住居せし一露人によりて此決議を彼に知らしめしに、彼は只其死すべき塲所に伴はれんことを乞ひつゝ、溫順に此の宣言に從へり、而して其露人は彼に曰ふやう

「余は孤獨の老者にして、曾て一人の親戚等の存するなし、汝は我家族となれよ、さらば我は我國の慣習に從つて汝を墓地まで伴ひ行かん」と。

　牧者及其妻は此言に從ひ彼に伴はれて村落の端迄行き、此處に農民等は此何等抵抗なき老人を屠りたり。

　二週間後、即ち此等繼續せる虐殺の二週間後殺人の氣少しく和ぎたる時、有司等は此等の暴行を人民に强ゆるを止め、飢餓の爲に半死し、恐怖の爲めに狂せるが如き生殘の支那人を集めて市中に驅らせり、此等哀むべき人民は氣力已に盡きて動くことさへも能はざる程なりき、而して種々なる理由の爲めに生殘りたる此等の支那人……三四十人は是れ此ブラゴウェスチェンスク及其附近に住する支那人の生殘せる者の全部なりしなり。

　然れば我軍隊及コサックが支那地に入る日の戰の性質の如何なるものなるべきかは已に當時に於ても之を豫見すること難からざりしなり、即ち彼等は八月三日漸くアムール河流を越えてサガレンを占領し(此より前適當なる時機に於て住民等は已に內地に逃走せり)、一切のものに火を放ち、爾後二晝夜焰火は長距離の間河水に映じ、從來豐なる食物其他を以て對岸ブラゴヴェスチェンス府に供給したりし此繁榮の地も、今は只支那人銀行の黑燒せる柱と、荒廢せる壞敗の跡より外に見らるべきものもあらざりき。

　我軍の更に深く滿州の地に入るや啻に住居に火するのみならず、何物をも、何人をも許すことなく、婦人、小兒、老者等も一切殺戮せられ、少女は皆辱められて然る後に屠られたりき、而して斯くの如きもの是れ實

にグロデコツ總督が其公報中に於て其武勇を稱し、其の大膽なる事實に對して賞讃の餘、之を表はすべき辭句を得るに困しみたる所の、我國諸勇士の功績なりしなり、然れども彼が部下の士官等の中にも、支那地に於ける何等の武裝なき農民、婦人、小兒等を對手の戰爭中に此等諸勇士によりて成されたる殺人なる本能を談じては自ち戰くものさへありき、豐裕且つ人口に富みたりし地も僅々數月の間に全く不毛の地と化し、燃餘の壞廢物のみ此處彼處に見られ、幾百の屍體は空しく野狼、禿鷲の餌に供せられたりき。

此等無道極まる殘忍暴虐に對する憤恚攻擊の生ずる每に此等攻擊者等は皆一樣に「淸國に於て獨、佛、英、等の諸國によりてなされたる殘虐の記事を讀め、我より文明の度高き此等諸國に在つてさへ已に然りとせば、其より文明の度低き我露國より待期する所亦之より以上なる能はざるべきにあらずや」との辯解に接するなり、而して此に答ふること甚だ難し、實に白人種は彼等が傲慢に呼ぶ此「野蠻なる淸國」との恐ろしき戰爭間に於て、彼等が自負の文明の眞價を證したるなり、即ち二十世紀の劈頭に於に平均の歐洲人等は、彼のタメルラン及びジンギスカン等の蠻族に比して殆んど甲乙なきことを表示したるにあらずや。

此等直接或は間接に行はれたる傷み惡むべき露國官吏の行爲も大抵處罰せらるゝことなくして過ぎたり、否吾人は信を信として告げざるべからず、即ちグリブスキー知事は己が命を遵奉したる其屬僚に裁判調査を試みたり、露國新聞の其後報導する所によれば、ブラゴヴェスチェンスク市に於ける警察長は、一万乃至一万五千の哀れむべき且つ無辜の支那人を溺死せしめ、或は射殺し、又は虐殺したるの故を以て三ヶ月の禁錮に處せられたりと。

（完）





思潮

武士道

「日本人」

殆んど死語たりし武士道は數年來新たに人の活用する所と爲れるが、尙ほ動もすれば武士と武士道とを混同し、武士の弊風を擧げて武士道を非難する者あり、是れ恰も儒者の弊を以て儒教を貶め僧侶の弊を以て佛教基督教を責むるが如し、當らずと謂ふべし。武士道は元と武士の理想とすべき所にして、總ての弊害を除去し其の最も醇なるに名けしもの、落魄の旗本若くは陪家の士官を目して武士道の標本と爲し、其の決して稱するに足らざるを言ふに至りては、思はざるも甚だしからずや、今の軍人は劍を佩び國を護るの職務に於て武士の正系たるに相違なきも、特に士人として他の階級の上に位するに非ず、名節を砥勵するの責任、舊時の武士に比して稍々輕きに似たり、則ち輕きに似たりと雖も、軍人に比して特出せる士は、尙ほ行動の大に稱揚すべきあり。乃木氏の如き、臺灣總督として失敗せしも、眞に軍人の模範とすべく、又た能く武士道を躰する者とすべし、戰歿せし廣瀨氏の如き、未だ大に伸ぶるに至らざりしも、亦た實に其一たり、而して之を現在の戰地に觀る、豈に其の人に乏しからんや、但時として貪汚陋劣なる者の存するを否定し得ざるを憾むるのみ。

時代の教訓（教育上の觀察）

「新人」　橫井時雄氏

國民教育の方針に關しても、此際特に改革を要す、近世教育の根本主義は、言ふまでもなく開發主義にして、學生の頭腦に潛在する能力を煥發せしむるを以て、其の主眼とす。口授的方法を以て許多の智識を注入せんよりは、智識の進步は比較的に遲鈍なる觀あるも、寧ろ學生をして自ら信じ自ら助け自ら教ふる所の能力品性を發揮せしむることは、教育の根本主義たるべきものにして、日本の國民教育も、全然此の方針を以て改革する必要あり。今二三の事項に關して、特に教育者の注意を乞はん。（イ）英米の教育は、主として如上の自助的人物の養成を目的とする故に、必要なる智識を悉く教授するよりも、寧ろ心身の鍛錬を重んじて、各個人特有の能力を充分に發揮せしむ、此點は日本教育家の大に學ぶべき要點ならん。（ロ）近年漢學廢止の說に伴ひ、漢學の研究を普通教育より除去せんとする一派の議論行はれたりしも、其の實行を見ざるは甚だ遺憾なり、予は實際上比較的不必要なる漢學と、國文學とを、可成的減じて、西洋の語學を充分に修得せしむる方針なれば、學校系統の總てを通じて採用せんと欲する者なり、世間往々、對支那策の見地より漢學教授の必要を唱導する者あり、其の說く所素より一理なきにあらざれども、支那を啓發誘導するは、漢文學、支那語を以てするにあらずして、只新思想を以てすべきのみ、若し實用上の必要ありとすれば、普通一般の學校に於て之を學得せずとも、特に特殊の機會方法に依れば可なり、是れが爲に普通一般の國民をして、不必要の智識の爲めに、能力と時間

とを消費せしめ、他のより多く必要なる智能の開發を沮害するには及ばざるなり、漢學若くは國文學の日本人に於けるは、チョーサ及びスペンサーの著作の英國に於けるが如し、之れを學修せずとも、一般の教養、活動の上に大なる缺陷を與ふるものとは思惟する能はず。（ハ）地理歴史の教授に於ても、日本に關する智識を主とするは素より當然の順序なれど、現今の教育に於ては、此の方面に偏する傾向あるにあらずや、世界的智識を與ふる必要は、今後の國民に最も痛切なるを覺ゆるを以て、予は從來の權衡を改め、世界全般に亘る智識を開拓せしむる方面に一層注意を拂はんことを希望する也。（ニ）此方針は倫理教科書の編輯に於ても、殊に大切なるを感ず。日本歴史前の忠臣孝子のみを多く列擧して、事例を世界各國に求めざるは、甚だ意義なき事なり、今後は忠臣孝子的の例證よりも、勇敢、正直、高潔なる四國立志編的人物の實例を擧證して、國民の精神を博く高く、感化陶成せざるべからず、總て教育上に於ても、將來は益々世界的見地に立つて國民の思想感情を開展せしむべき必要あり、彼の學制改革の如き末節に拘泥して、教育上の根本問題を忘るゝ如きは、抑も國運の發展の一大時機に際し、實に國民を愚弄するものと言はざるべからず。

尚ほ現代の青年に對して、一個の希望を述べんか、予は近來多くの青年と近接する機會を有せざる故に、之れに對して適當の判斷を與ふる能はざれど、今後日本青年の間より人傑起つて偉業を爲すものありとすれば、恐らくは實業の方面、殊に海外の舞臺に於ける經濟活動に之れを見るならん、其の反應國内に及んで、活潑なる國民的繁榮を起さんことは疑ひなかるべし、今後の青年たるものは、宜しく名譽を國内に求むる如き狹隘の考を捨てゝ、世界公衆の前に、博大なる名譽を樹てんとする向上心を抱くべきなり、是れ予が青年に對する冀望の一つ也。

青年理想の成効法

「早稻田大學報」　村上専精氏

第二　時間の最も貴重なるを忘るべからざること、之は時間は金錢であるとか、時間は智識であるとか、古人が言はれた通り、一寸光陰不ㇾ可ㇾ輕と云ふことがあつて、時間は大切なものであることは、今更辯を俟ぬ。諸君が小學時代から能くお聞なすつたとて、私が言ふ迄もないことでありませうが、承知し乍ら其時間が兎角空く爲つていかぬ。どう云ふ人間が立派な人間になるかと云ふと、貴重なる時間を惜む人でなければ、立派な人間にならない。彼の人は一日二十四時間であるけれど吾れは一日三十時間と云ふ譯にはいかぬ。一年は三百六十五日と極つて居る。人間が百年迄生て見た所が、老衰しなければならぬ。どうしても時間の利用法を講じなければならぬ。一日は二十四時間と極つて居るけれども、何處に違いがあるかと云ふと、時間を下手に使つて行く人と、上手に使つて行く人とは、大變違つてしまう。人間の等級は何處で分るかと云ふと、時間を利用すると時間を妄用することにある。諸君が一日に一時間宛時間を妄用して下手に時間を使つて行き、酒を飲む爲に、時間を費やし、碁をする爲めに時間を費やし、人の噂さをする爲に、時間を費やすときは無論下手に時間を費やすのだ。所が其時間をば縱へ本を讀まずとも、郊外散歩をやつて氣力を養成したとかいふ自分の爲になる方面に使つたなれば、何れ位の利益があるでありましやうか。若し利益のあることに一日一時間づゝ時間を使つたならば、どうなりませうか。一日に一時間づゝ利用すると妄用するとば、二時間違う。一年三百六十五時間を二時間がいにして合せると、七百三十時間となる、此時間と云ふものは、飯を食はせぬても着物を着せぬても宜い。一年の間に大變違ひ

が出來るからして、十年の間には非常な光陰である。三年前には己れと一緒に下宿屋に居たけれども、今日は馬鹿らしくつて彼處へ行けぬと云ふことが、隨分ないでもない。之は餘程注意しなければならぬことである。或る人が斯う云ふ計算を立た、日本の四千萬の人間が一日に一時間づゝ餘計働き出すとして算出して見ると、一日に四千萬と云ふ時間が浮て出る。其時間の勞働がどれ程の利益があるか、假りに十錢づゝの利益があると計算すると、日本の一日の富が四百萬圓となり、一年三百六十五日を締て見ると、十四億六千萬圓になる、ナカ〱露西亞と戰爭しても、軍艦の用意は十分出來る、斯う云ふ計算である。火程の仕事は出來ぬにしても、兎に角塵積れば山となるであるから、十年の間に一日に縦し十分間でも下手に使うて行く者と上手に使うて行く者とは、將來大變な違ひである。だから何でも私の交際して居る人を見ると、事業を爲す人は、どの方面でも、所謂地平線以上に秀た人は朝早う起るとか、夜遅く寐るとか、無駄に詰らぬ時間を費やすことには注意して居るやうに思ふ。之は昔しも今も變らぬことである。

偉人の説

「日本の人」

黒岩周六氏

人は己れよりも偉大なる人を崇拜す、之を崇拜するは、やがて自ら現在の己れよりも偉大ならんとする心なるべし。

偉人は社會の生命なり、政治も宗教も音樂も美術も、總て太古人類が偉人を崇拜せしより興りしなりとぞ、偉なる哉偉人の德や。

唯怪む、偉人なる者の如何にして此世に生じ來るやを。神の攝理を信ずる者は曰く、偉人は天之を降なすりと、歴史を尋ねて偉人の現れたる節を察すれば、此言に理あるにも似たり、英國の王政最も人心と背きて、之を打破する如き偉人を要する場合には、奇妙に其場合に適當する資質を具へたる格朧英出て、米國が獨立を要する場合には、妙に獨立軍を率ふるに似合しき和聖東出づ、日本にても幕府の政治が最早や時勢に適せざるに至れば之を改革するが爲に作られしかと疑はるゝ勤王偉人の輩出し、旅順を閉塞す可き場合には適任なる廣瀬中佐の如き人現はる。

總て偉人は社會が之を需用せる場合に、天が特別に供給の勞る取るかと思ふ如くに出て來るなり。

然れども偉人を天の特別製造なりとせば、誠に不幸の次第なり、社會の大に要求する場合に、若し天が偉人供給せざることあらば、斯社會は偉人欠乏の苦を忍ばざるを得ず、甚しきは偉人の無きが爲に、坐して亡びざるとも、得ざらん。

近ごろ社會學者の說を聞くに、偉人は社會を作る者に非ず、社會能く偉人を作るなりと云ふ、然らば偉人は天成に非ず、社會の之を必要とする場合に社會自ら作ることを得るなり。

『人は生れながらに大なるもあり、大なるを企つるもあり、大なるを推被せらるゝ(thrust upon' em)もあり』との沙翁の言葉も思ひ出さるゝなり、生れながらの偉人ならずとも大事を企てゝ奇妙に成功し偉人に列するも有る可し、然し大事を企つるならば、其の企つる決心の起るだけ、天性に何處か偉大なる所ありと云ふを得べし、又自分は大事を企てざるも、四圍の事情が偉大なる仕事を推被せ來りて、止むを得ず偉大の事を爲し偉人と視らるゝに至るもある可し。

さすれば、人は何人も偉人と爲り得る素質を有する者と云ふ可し、必ずしも偉人として生るゝに及ばず、生ながら小弱の人とても、推被せられ

て偉人と爲るを得るるほどならば、推稱せられざるも、自ら企てゝ偉人と爲ることも出來ざるにあらじ。

手近く廣瀨中佐の例にて見るも、中佐を作りたるも確に社會なり、中佐が楠公を私淑せしは人々の喧する所なるが、其の七生報國と云ふ如きは最も相似たり、此點より云へば、天に作らしのみにあらで幾分か楠公にも作られたるなり中佐の武人氣質は二千年以來我國に備はれる武士の精神とか大和魂とか云へる者に作られたるに非ざるか、啻に其れのみならず今日の吾々一般人士とても幾分か中佐を作りたるに與りて力あるに非ざるか、今日の我國の一般の思想や氣風などが只だ懦弱にして少しも忠死者を稱美せず、却て之を犬死の如笑くひ做し、大なる節義に對して何の反應も無き如くならば、流石の中佐も張合の無きとなる可し、戰場に在る多くの軍人が、『何の手柄をも立てずに、オメオメと歸國しては面目なし』とか、『社會に合せる顏がなし』と『云ふが如きも、知らずに今日の社會の氣風が、遠く戰場の人と的呼應せるを見る可し。

中佐のみかは、中佐と時を同くする吾人總體は、皆是れ中佐と略ぼ似寄りたる歷史影響せられ、略ぼ似寄りたる四圍の事情に陶冶せらたたるなり、『古人が地を替ゆれば皆爾り』と云ふ者味ふ可し、吾人の中には中佐と同じ地位に立ちたらんには中佐ゝ略ぼ似寄りたる偉人たることを證明し得る人、多かる可し、旅順に臨みたる閉塞隊幾萬の將士を初め、其他の軍人皆中佐に髣髴たる人には非さるか、內に在りて萬殊の境遇に立てる一切の男女、亦戰場に在る軍人一船と髣髴たる人には非ざるか、試みに歸休せる兵士を見よ、大抵は吾等俗人と髣髴たる所多きを證せり。

斯く考ふれば、人は皆偉人なり、又皆偉人を作りつゝをあるなり、此點に是ては一身の甚だ珍重す可きを思はざる可からず。

唯だ境遇の差が、幸か不幸か其の偉なる所以を發揮せしむるに至らざるのみ、故に天が偉人を作ると云ふことは、天が總ての物を作ると云ふ意味に於てのみ眞理なり。

人は偉人を崇拜する如く、總ての物を崇拜し總ての物に感動せらる、若し會社の形勢が一種の偉人を必要とするに至り、互に心に其必要を感ひ、日夜偉人を呼ふこと有らば、總體の意氣か相互に總體を感奮せしめ、其中より特に感奮することの强き人をして起たしむ、起たしめられたる此人か偉人たるなり、時代を代表すると云ふも此事なり。

孔子釋迦基督の出現とても此理にて充分に說明するを得るや勿論なり學術の上にも藝能の上にも、腕力智力等の上にも、突然にソヌケなる偉人を現する者に非ず、若し生じたらば時代が(即ち社會が)之を作りたる者にして、同時代の人は皆髣髴たる素質有するを知る可し。

世に謂ふ修養と云へるとも此理由に於て初て意味あるなり、汝の傍に偉人あらば、汝修養して齊からんを欲せよ。故に余は云ふ社會若し偉人の缺乏を喚すとせば其れは社會が偉人を作らざるの罪なり、人若し偉人なきを歎まば、偉人無きこそ幸ひなれ、其虛に乘じて自ら偉人と成り出つ可し、若し偉人たる秘訣は即ち、余別に述べんことを期すとは雖も、聊か天秘を洩さば、先づ無事の日に於て、有事の日に偉人たる可きの資格をば作るに在り、偉人が偉なる境遇にて必死に奮鬪する如く、偉ならざる境遇に於て必死に鬪奮す可し、偉人が偉人なる事業に盡瘁する心を以て眼前の小なる事務に盡瘁す可し、斯くして偉人と同一の癖を作りたる者は偉人なり、此癖を作らざる者は、四圍の事情に偉大を推稱せらるゝ幸運に際會しても、其の重量に堪へ得ずして挫折す可し、苟くも重量に堪ふるに至らば實際に重荷を載せざるも偉人に非ずや。

大なる石は手に扛け初めて重きに非ず、地に委しても重きなり。

亂に治を忘るゝ勿れ

福澤一太郎氏

古來治に亂を忘れずの諺のみが流行たのは立國の主義が武斷的であつて實業的ではかつた爲めであらうと思ふブルックス　アダムス氏の「アメリカス　イーコノミック　スープレマシー」と題する小册子の中に「文學に於ける自然淘汰」の一章がある即ち英國が武斷流儀から實業流儀に遷た事の次第を論述したものであつて其旨にスチユアート王族の放逐からウオータールーの決戰に至るまでの百二十七年間ほど勇將名士樣々の武的天才を輩出した例しは蓋し英國に於て未曾有のことであつたが實業的革命は凡そ千七百六十年に始まり千八百四十年に向かつて終を告げたものと云ひ得られる武的精神の代表者はザー　ウオルター　スコットで實業的精神の代表者はチャールス　ヂッケンスであつたと云て御座いますがスコットの小說は侍根性を說きヂッケンスの小說は町人の氣風を說たものにして彼れ此れ共に夫れ〳〵其時代の氣風嗜好を寫してると申すことです左れば我國に於ても武斷的の昔に於ては萬般の仕事總べて皆武斷的考案を主義とするの結果、遂に治に亂を忘れずの格言のみが流行して亂に治を忘れずと云ふ方は爲めに光を失ひ遂に語を成すに至らざりしものと思はれる國の文明未だ進まず人の思想の簡單であつた時代に於ては是非もない訳である又日清戰爭若しくは今回の戰爭の如き國の運命を賭しても我正當の申條を貫かでは措かじと決心せる場合に於て動もすれば武斷一方にのみ偏する議論が流行して實業上の進取の說など此場合に左る氣樂なるが如き傾を生ずるは尤も至極の義であるが唯如何せん昔の日清戰爭も今の日露戰爭も兩者共に文野の戰にして殊に今回の戰は世界の商賣上に於て排外專横主義に對する門戶開放自由競爭主義の爭であるから我國に於て實業的進取の觀念を去りたる武斷論など行はれんと欲するもの行はる可らずと左る觀念は無用のことであらうと思ふ左りながら萬が一にも斯る掛念をして强ち無理ならしめざるが如き極端の勤儉論などを唱へて實業の發達を挫折せしめんとするが如き人あらんには我輩は斯る流儀の人に向かつて亂に治を忘るゝ勿れ勝て胄の緒を締むるが如く戰て實業立國の緒を締めよ然らざれば治に亂を忘れずの金言を服膺して空前の大勝利を收むる所の忠勇義烈の將校士卒に對して申譯あるまじと言葉靜に言教さうと思ふので御座います蓋し立國の要素は兵備のみを以て盡せるに非ず實業のみを以て盡せるに非ず治に亂を忘れざるが如く亂に治を忘れぬことも肝要の義であらうと考へる私は治世の平生に亂世の慮あることを忘れず亂世の異常に治世の常あることを忘れないやうに諸君と共に心掛けやうと思ふので御座います

國威の發揮

「成功」

島田三郎氏

我國最近の歷史を按して之を觀察して見れば、實に我國民は武事の方面に於ては大に成功してゐて燦爛として國威を發揮してゐるのであるが、此の如き武事以外の點に至つては唯失敗無能を示してゐるばかりである、此の如き有様を以てすれば西洋の各國が我國を以て戰を好むものと斷定するは之を辯解するに少しく其辭に窮する譯ではないか、戰を好むと思はるることは決して我國に於て利益ではない大に不利益である、蓋し何れの國に於ても其國の平和を脅かさるるは皆大に好まざる所であるから、隨つて大に世界の平和を希望する譯である、それで唯武邊一片に長じてゐる國家に對しては實に疑慮猜忌の眼光を以て觀察するものは當然のことである、現に日露戰爭の果結に關して、既にホルランドは其微力を歎じて

ジャツの領地に侵入し、佛國は提柴邊の守備底到大に力を致さざるべからざるを論じ、濠洲にありては移民禁制に關して、我日本に關しては今日大に好意的の態度を以て日本を以て移民禁制以外に置かう、然らざれば武力を以て壓せられて解かざるに至る可らざるを論じ獨逸亦た膠州灣の保有に關して苦悶してゐるのである、戰勝勢力の影響する所實に此の如く重大なるものがある、是の故に唯好戰の國民といふ前提に置て常に我が行動を觀察せらるゝが如き、實に我國に取つては大なる不利益である。隨つて是非とも武事以外に於て我國民が大に國力を發揮するに能力を示して諸外國を安心せしむるにあらざれば、折角軍人が苦心して國力を發揮したものも亦た終に我國の爲め、大局の利益を致す能はざるに至るであらう、然らば國民たるものは軍人に對して眞の感謝の意を致す點よりするも、吾人自身が國民の義務たる點よりするも是非とも武事以外に於て國力を發揮せねばならぬ譯である、而かも從來の歷史によれば唯腐敗の跡を殘してゐるのみである、我國民果して其能力に缺乏してゐるのであらうか、今度の戰爭に至つては第一海軍に於ては下瀨君が發明創造した所の大藥を以の大に威力を逞くし、陸戰に於ては有阪君が發明した所の大砲を以て九連城の戰勝を得たのである、此等は皆吾國人が發明創造した所のものであり決して唯彼外國品を模造若くは利用したものではない、既に才に創造の才ありて現に平和方面に於ける伎倆も實に此の如く今度の戰爭の間に發揮せられてゐるのである、されば此平和的能力が我國民には缺乏してゐるといふ譯ではないのである、然るにそれが唯戰爭に關してのみ發揮せられて、獨り平和的のみなる方面に於て唯失敗のみを殘してゐるのは、要するに戰爭に關しては我國古來完美なる歷史的模範が存してゐて、我國の歷史は殆んど之を以て滿たさしてゐるのである、だから戰場に於ける作法心得の如きは今日の國民は此歷史によつて大に教育せられてゐるのであるか、平和的方面に於ては未だ何等の標準模範となすべき人物歷史がないのである、それ故此方面に於ては吾人は大に教養を缺いてゐるのである、隨つて今日迄の所を以てすれば、唯失敗をのみ殘してゐるのである、然れども既に其能力のあることは確實なる事實であつて、而して是迄失敗の經驗教訓を受けて以て今日に至つたのであるから、吾人此際能く既往に鑑み愼重以て今後に處せば決して平和的成功の期せられないことは無い筈である、故に此際吾人は之に覺悟する所あつて目下戰爭を以て國威を發揮せるものに關して大に感謝の意を致し併せて吾人國民の本務を盡すがために大に奮勵して以て平和的秩序的の方面に於ても是非其大に國威を發揮することに勉めなければならぬ、大に平和的方面に於て國威を發揮する能力を有することを示して以て降後のために完美なる歷史的模範の端緒を開かればならぬのである。

連戰連勝偶然にあらず

「時事新報」

我報の所見を以てすれば我軍の連勝連勝は何れの點より見るも當然必至の結果にして毫も怪しむに足るものなし即ち我作戰計畫の周到緻密なる我軍の運動の敏捷活潑なる我將士の忠勇武烈なる之を近代進步の戰術に照らし又これを實地の運用に徴するも敢て間然する所なきに反して敵軍の有樣を見れば其兵器は精良ならざるに非ず其兵士は勇敢ならざるに非ずと雖も唯戰略戰術の點に於ては近代の進步に遲るゝこと頗る遠し是れ即ち兩軍勝敗の分るゝ所にして其勝敗は文明世界の人事に於て自ら然らざるを得ざるの理由ありて存するのみ決して天運の幸不幸に非らざるなり。

評論



軍人遺族の救助法に就きて

成川生

交戰の日月長きに亙ると共に、軍人の遺族に對する同情は、愈よ深厚なり。日頃より國家のために武官として死を決する士官の遺族は、豫め覺悟する所あるべしと雖も、其の根底に於ける悲は、兵士の遺族と、何等の異なる所あらざるなり。親子夫婦の間に於ける靈妙なる感情は、位階の等差に由りて、高下あるものに非ざるは明白なり。

たとひ人生最も嫌惡すべき死を目的とせざるにもせよ、少くとも死の淵に臨む人を、海外に送りたる家族の憂悲は、蒼海よりも深く、たとひ表面は靜かなるにもせよ、根底には無量無限の悲哀あり。

今や吾が國內には、此の深刻なる悲痛に泣く數萬の家族あり。平和の事業に從事する者は、奮つて彼れ等遺族を、慰籍し、救助する所なかるべからず。されば開戰以來各地に於いて、諸種の團體組織せられ、皆な滿腔の同情を以つて、出征軍人の家族に對する慰籍と救助との方法を研究す。

あらゆる會は、其の性質に於いて、皆な善良なり。然れども其の救助慰籍を實施する方法に於いては、皆な不完全の點あるを免れざるなり。されば其の善良なる目的も、手段の不完全なるが爲に、充分に到達せられざる場合、甚だ多しとす、

諸種の慈善會が、如何なる標準によりて、救助すべき家族を選定するかを究め看よ。詳言すれば、一の會が、自らの救助すべき範圍を定むるには、何等の標準を立したるかを究めよ。それ如何なる會と雖も、全國に亙つて相應の救助を施さむと欲すべけれども、財政及び事務の複雜は、決して之れを許さゞるべし。されば其の目的の實行の爲には、救助すべき全國の家族中より自己の範圍を劃定するの必要あり。然らば如何な



詞藻

黒（夏季）

漱石選

實櫻の黒める枝や日の表て　初聲
眼を病みて夏籠る人や黒眼鏡　同
蠅多き宿場の店や黒砂糖　同
競べ馬黒鹿毛群を壓しけり　同
古寺や眼すゞしき黒佛　青龍
行水の脊中に黒し灸の跡　五遷
筍や黒く朽りし厩ごやし　鳴子
黒雲や夕立迫る冲の島　如翠
黒塀や裏門入れば桐の花　黄村
此頃の新聞
黒枠の廣告多し五月雨　浦亭
脊の黒き鯇魚や木下闇　同
御黒戸に涼しき灯あがりけり　英子
黒雲や蚊遣火見ゆる峠茶屋　同
監獄の黒板塀や五月雨　圓外
黒雲の虫干終へし日なりけり　同
黒星に射あてゝ新樹風渡る　翠蒻
牡丹活けて黒檀の床光りあり　同
黒き雲涼しき町となりにけり　苦風
若竹や黒みし空の風となる　同
黒がねの關所の門や夏木立　七三
花御堂黒き佛の尊とけれ　同
五月雨て黒板くらき試驗かな　柳波
夏痩てまばらの髭や薄黒く　同
雨に暗き黒木の御所や時鳥　同
黒山の人や祭の列通る　五習
豚兒大學の業を終ふ
黒百合や奥の院へは遠からず　同
拜領の黒絽の羽織讓りけり　同

選者吟

鵜の篝次第に空は黒みけり
黒雲や晝寢さめたる三時過ぎ
田植歌黒き男の子も交りけり

八月分課題　短夜　七月十八日限
九月分課題　蘭　八月十八日限

無題集

尾上柴舟選

○　正富汪洋

世の子らに見せなば購はむ禍と十年の集をいだきてわ

らふ

桑の葉の軒をうづめる家の子のお信といふがうたのやさしさ

初めよりわれの大いさ誰知るとゲーテかしこう云ひ得たるかな

○　若山繁

ほの〲とさくらにあくる島浮けてうすむらさきの春のあさ潮

身を耻ぢて春をうたふに音ぞ低き京にうられし小鼓うぐひす

たゝかひの神のみ楯に血をそめて男子ほゝゑむ「ほまれ」てふ文字

○　高林柳子

とりてこし詩集の文字もみえずなりて百合の香せまる夕ぐれの森

火の神のいかりの炎土におちて岩がね躑躅はなもえそめぬ

うとみしよむかしは花の小一條いけの蛙のふしなれぬうた

○　神田文子

なげきにはみなし子むしろ安かりきあゝうれしさは誰にかいはむ

襟に落ちし栗の花房怖ぢし子の憂きに笑むとのおのごろの文

○　曾我岫雲

弱きは云ふ何處戰に榮を見るときこゝろよいかな世に傷負ひし身

されば君劍とは戀のまたの名よ男の子の右手に暇あらすな

○　東薫

花毎におもらふ靈よ靈よ失せず御床に春のうた誦しまつれ

いくそたび人の涙をうたがひて迷ひて得たりいまのわが歌

○　華畝

燭消えて小琴に松のかげあはゝおよひかぎりの下嵯峨のやど

車とめて乳母が家問ふ眞晝時小みちしきりに栗の花ちる

○　錦城

あやまりて戀をゑがくにつとめたり劍と鐵火はよき詩なるもの

おほいなる總滿洲の指揮官やますらをかくて死するを得べし

劍によりて東亞生きたり詩によりてひかりはなたむ時はそも何時

濃霧々々われこの文字を見るを惜むいたましいかな一千餘人

る標準によりて、是れを定むるか。今日の事實によれば、本籍を標準とせるもの、及び現住所を標準となすもの丶二種あり。これ果して適當の方法ありや。これ果して大目的に愜へるものなりや。

全局より觀れば、此の二標準が、救助慰籍の實行上、幾多の不公平なる結果を生ずるは、一考して知り得べし。例へば甲の會は本籍を標準とし、乙の會は現住所を標準とする場合に當り、甲會所在地の者(ア)は乙會所在地に在りて、乙會所在地の者(イ)は甲會所在地に在りとせむか。(ア)は甲乙兩會より懇切なる救助を受くべしと雖も、(イ)は孰れよりも何等の惠を受くるを能はざるなり。更に如何なる團體も、兩標準を用ふとすれば如何。これ徒に繁多なる用務を作つて、而も本籍地にある者と、寄留者との間に不公平なる分配を爲すに畢るのみなり。これ豈會旨に背反するものにあらずして何ぞや。

斯くの如き缺點を補はむが爲に、中央慈善會なるもの組織せられて、救護諸團隊の統一を計らむとす。これ時期に適應したるものと謂ふべきなり。斯く一の中央機關ありて、全國の團體と氣脈を通じなば、吾人が前記せる如き狀態は、全く杞憂に屬すべし。

斯く中央機關の完備すると共に、救護の方法は、漸次に改良せらるべしと雖も、一歩を進めて考察すれば、救護の性質如何によりては、却つて弊害を生ずるとあらむ。

それ救護には二種あり、一は純然たる養育これなり、他は生存自立の方法を授くると是れなり。假りに前者を名づけて養育的救助と稱し、後者を指導的救護と言はむ。金錢、衣服、食料等を附與するは、前者に屬し、自營の職業を授くるは後者に屬する救護なり。此の二方法たる、兩立しては、却つて救護の大目的に反するが故に、須臾らく適宜に兩者を融和せざるべからざるなり。

老衰せるもの、病褥にあるもの、幼稚なるものに向つて、如何に收入多き自營自活の方法を授くるとも、何等の効果なきは明かなり。されば彼れ等に對しては、第一の方法、即ち養育的救護を施さゞるべからず。然れども健全なるものに向つて、金錢衣食を給與せば、これ彼れ等をして、一種の遊民たらしむるに異らず。いかに軍人の遺族なればとて、他より養育せらるゝは、心地好き事にはあらざるべし、啻に感情上のみならず、理に於いて、不當の救助を受けたりとの念は必ず其の

胸中に蟠まらむ。何となれば、人として直接間接に、國家の爲に盡瘁せざるは無ければなり。文藝、商業、工業、農業、政治等に從事する者、何れか又國家の爲めならざる。而も其れ等の人々にして死すと雖も、社會は其の遺族に一顧をも與へざるなり。されば軍人の遺族のみが、救護を受くるは、むしろ不公平なりと謂はざるべからず。

去れど彼れ等は救護せらるべきなり。死を以つて國恩に報ずといふ一點は、社會に救助の義務を負はしむ。故に今日の諸會合は起れり。然れども之れを受くる身となりては、胸中窃に恥づる所あるべし。即ち此れ等の人々に向つては、正當の報酬を取るべき方法を與へざるべからず。

健全にてありながら、喜んで救助を受くる者の如きは、遂に獨立自營の精神を失ひて、惰民の階級に墮落すべし。これ果して救助保護の目的なりや。

夫れ高尙なる快樂は、獨立自營に本づく。いかに優遇せらると雖も、食客となりては、朝暮に不快の念を懷かざるべからず。救助保護とは、一面に於いて慰籍を含む。今幾多の憫むべき家族あるに當りて、これを社會の食客となすが如きは、其れ等家族其の物のために、吾人の首肯し難き所なり。

今日の救護法の多くは、養育的なるが如し。されば目的のみ美にして、結果は寧ろ醜に近からむか。幸にして慈善事業の統一的機關は造られたり。吾人は、該會の當局者が、一時の感情に走ることなく、遠く將來を慮りて、適當なる救護法を設けむことを切望す。

學習院大學の廢止に就きて

學習院大學部は、六月十八日限りを以つて廢止せられ學生は、京都帝國大學に移さるべきこととなりぬ。それ大學部たるや、故近衞公の經營に成れるもの、而して公薨じて、未だ半歲の日月を閱せざるに、旣に廢止せられたり。これ洵に近衞公を以つて起り、公の死と共に滅びたりと謂ふべきなり。

感情上より言へば、歷史ある一部分が、無用のものとして、閉鎖せられたるは、大に悲むべきなり。然れども教育全體の上より論ずれば、其の廢止は、むしろ時勢に適したりと言ふべきなり。

それ學術は世界的なり。從つて學術を研鑽するもの

には、學力の優劣以外に、何等の差別をも劃すべからざるは明々地たり、貴族のために專門の學校を設立し、以つて庶民の學校と區別を明かにするが如きは、紕繆の大なるものと謂はざるべからず。

貴族の爲に特殊の學校を設立するの必要ありとすれば、其の學校は、高くとも高等學校を以つて制限として可なり。何となれば特殊學校の必要は、倫理教育の一點に歸し、斷じて學術の教授に存せざればなり。學術、否概括的に言へば、智育のためなれば、社會到る處に中學校の設備あるが故に、殊更に華族の子弟の爲に、巍然たる一校門を建つるの必要なし。そのこれを建つる所以は、彼れ等に對しては、特殊の德育を施すべき必要あればなり。人倫の道亦人の高下によりて、差別なしと雖も、實際の社會に於いては、華族の道德あり、中流の道德あり、賤民の道德あり。此の故に、華族としての品性德念を、圓滿ならしめむが爲に、特殊の學校を設立するは、吾人の贊同する所なりとす。

大學に至りては然らず。華族社會に、特に附屬せる學術あるにあらざる以上は、其の爲に、特別に一校を建設するの必要何處にかある。それ人の品性は、小中學校時代の訓練に由りて作らる。其の時代以上の學生に對しては、學校の倫理教育の如きは、實際上、何等の効力なしと言ふも可なり。況や大學校は高等學術の教授を以つて大目的となすに於いてをや。

それ大學校に進みて、學術の蘊奥を究むるには、華族の子弟こそ尤も適當なれ、されば彼れ等に向つて、一大學校を設立するの必要あるが如しと雖も、そは學術界に、人爲的階級を設けむとする謬妄なり、我が教育界には、完全なる大學校ありて、最高の學術を教ふ。これを學習院大學部に比すれば、遙かに優等なるは、世人の等しく認むる所たり。されば識見ある華族は、其の子弟を、帝國大學に入學せしむ。時勢は斯くの如し。今日、大學部を廢止したればとて、何の憂ふる所か、これあらむ。現在の學生に對して、氣の毒なりと謂ふが如きは、小の蟲を殺して、大の蟲を生かすの得策たるを知らざる者の言のみ。

我が華族社會には、依然としてお殿樣的氣風の强勢なるを見る。其の氣風とは何ぞや。獨立の精神なく、競爭角逐の勇氣なく、たゞのらりくらりと遊ぶを欲すると是れなり。頃者、彼れ等社會は、大に奮起して、冒險的精神の修養を勉むと雖も、そは只皮相の摸倣にして、未だ精神の大冒險あるを知らざ

るなり。去れば學術に對する氣風の如きも、只學ぶと言ふ外には、何等自働的活動あるを看ず。見よ、大學部開設せられてより、既に幾星霜を經たりと雖も、その社會に貢献せしもの、果して幾許なるやを數ふれば、寂々寥々、語るに足らざるに非ずや。

華族のために、特殊の大學を設置するは、華族社會の發達のために、害こそあれ、何等の効力もなきものなり。外國には、貴族にして、學術界の明星たる人多し。これ一般の學生と角逐すると共に、互に補佐する所ありしが故に外ならず。而して其の位地境遇は、彼れをして、安樂に學術の研究に耽らしむ。これ其の大名をなせし所以にして、又學術界は斯くの如き人々を歡迎す。

我が學術界も亦、生計の餘裕ある學者を望むと久し。收入薄き學者は、いかに研究心は盛なりと雖も　糊口の道を求むるに急にして、空しく日月を浪費す。華族社會は然らず。げに學問すべき適當の資格を備ふる者は、華族なりとす。其の華族にして、華族大學に在らむか。遂に何等の貢献する所もなくして終らむ。これ啻に華族社會の不利なるのみならず、延いては我が學界の不幸なりとす。

貴族と平民とか。人種上の差別を有する如き場合には、特に貴族のために、大學校を設立するの必要もあらむされど我が國の如く、上層より下層に來るまで、皆な仝一人種にして、仝一言語を用ふる場合には、華族大學の如きは、全く無用の長物たり。況や東京及び京都に帝國大學あり、而して近き將來に二三の大學校設立せられむとする今日に於いてをや。此の故に吾人は、學習院大學の廢止を指して、むしろ時勢に適したる處分なりと言ふに憚らざるなり。

我が國民の天職

今や吾が四千餘萬の同胞は、日本人の天職を自覺すべき時期に達せるなり。天職とは何ぞや。東西文明の融合を計ると是れなり。

世界各國の位置を觀ずるに、東西文明の湊合する國土は、我が日本帝國の外に、露西亞帝國あり。彼の國や、古より東洋と接觸し、今日に至りては、東洋に多くの領土を有す。而して西比利亞の内地たる。大鐵道の縱貫するあり、水利の多大なるあり。又かの烏拉爾の山は峻高ならず。これ東西兩洋の文明か、玆に合す

るには、尤も適當の地たるにあらずや。我が帝國の位置亦、彼れに等しきは、予輩の言を俟たずして明瞭なり。

いかなる國民か亦、文明の發達を望まざる。文明の發達を目的とする國家は隆興し、然らざるものは滅亡す。雅典の盛衰は、玆に基く、羅馬の興亡亦然り。而して、今や東西兩洋の文明は、相接觸して、將に一大河流たらむとするの形勢を示す。その融和せる文明、即ち統一的文明こそ、將來の人類に、幾多の福利を與ふるものたるは、數言を要せずして、讀者の首肯する所なるべし、去れば文明國として、將來大に勉むべきは、統一的文明を作らむとするに在るも亦瞭然たり。

國土の地質、其の宜しきを得たる露國は、如何なる行動をなしつゝありや。彼れ等の目的は、全世界を化して、スラヴ的たらしめむとするに在り。其のパンスラヴイズムたるや、東洋の文明を撲滅し、一方には西洋文明を壓迫して、自國一箇の文明を以つて、全世界を支配せむとするものなり。而して其の目的のためには、中央亞細亞を侵略し、今や滿洲の野に、其の爪牙を逞うす。これ世界の平安を害するもの、我が國の、奮起して大打撃を加へたるは、實に不滅の美擧なり。

五月二十四日、東京朝日に掲載せられたる維也納通信によれば、某新聞は、日露兩國に對して、讀者の同情如何を、投書にて試驗したりと言ふ。而して其の結果、文明上の關係を理由として、日本に同情せるものは、百分の六十七を占め、露國に同情したるものは、僅に百分の六なりき。露が如何に世界の同情を失ひたるかは、此の一事を以つて推すも明白なり。

侵略主義を國是とする國家に對しては、兩洋文明の統一は望むべからざるなり。之れに反して我が國は、文明の進步に盡瘁せると、既に久しきに亘りぬ。社會の各方面を見よ。政治、教育、學術、文學、美術、實業等、いづれか亦和洋の折衷を目的とせざる。これ將來に於いて、大に世界的文明を形造りて、人類の完全なる進化を迅速ならしむる端緒にあらずして何ぞや。

由來西洋にはアリアン以外に文明なしとする偏見を懷くもの多し。これ蓋し從來の歷史上、自家の文明を以つて、他を支配したると多かりしと、東洋文明の眞相を知らざりとの二原因に歸着すべし。かく彼れ等には、剿絕しがたき自負心あるが故に、東洋の長所を採りて、自己の短を補はむとするの志向、甚しく缺し。之れに反して、我が日本は、東洋の缺所を自覺して、

西洋の長所を學び、或る時代には、兩洋崇拜の弊を生じたりと雖も、日清戰役、北清戰役の後は、東洋の長所をも明かに認識して、西洋の文明を融和せむとす。これ洵に我が國民の天職たり。

各種文明は混和して後、愈よ燦然たるべし。印度及び支那の兩文明が我が國に於いて、巧に融和せられて、特有の光彩を放ちたる、或は希臘、羅馬の文明と、サラセン文化との混和して、西洋文明を造りたる、皆なこれを證明して餘ありとす。今や我が帝國には、西洋の大文明と、東洋の大文明とが、相合して空前の新光明を放たむとす。此の時代に遇ひし我れ等の幸福、豈多大ならずや。其の幸福の絶大なると共に、吾れ等は此の天職を自覺して、人類の嚮導者たらむことを期せざるべからず。

東洋婦人會に望む

新に鍋島公爵夫人を會長に推戴せる東洋婦人會の事業として、新聞の傳ふる所によれば概要左の如し。

一、東洋諸國に廣く會員を募集すること
一、會館を設置して各國會員の音信、交詢來遊等に有ゆる便宜を具備すること
一、會館には客室及び圖書室を附し、四方來遊の會員に便し又其の共同知識に裨益すること
一、會報並に會の主旨に相應せる諸種の文書を出版すること
一、東洋婦人の福利となるべき諸種の研究をなすこと
一、東洋婦人の文化に裨補すべき學園及び講話會を創開すること
一、留學生のために諸種の便宜助力を與ふること
一、會員以外と雖も凡そ東洋婦人の遠來する者の爲に諸種の便宜を供すること
一、東洋婦人を代表して、西洋婦人との交誼を謀り世界女德の圓滿大成を企圖すること
一、以上九種の事業に類し、其主旨の目的に相應せるものは適宜着手すべきこと

箇條は、總て抽象的なるが故に、今遽かに之れが當否を判定し難し。去れど其の大目的が、社交に在るは、前後照應して明白なりと謂はざるべからず。

社交を目的とする、これ大に可なり。されど東洋婦人會としての事業は、斯くの如き淺薄なる目的の遂行を以つて、滿足すべきにあらざるなり、何となれば、

○○○○○○今日の急務は、東洋婦人の特色を發揮するに在ればなり。

東洋、殊に日本の婦德は、世界に其の比儔を見ざる所なりと雖も、そは未だ世界に紹介せられざるのみならず、今日旺盛を極めつゝある女子教育は、却つて此の美德を削減せむとするの傾向あるにあらずや。男子の教育上、西洋崇拜主義の強大なる勢力を擅りたる時代が、如何に淺ましき結果を生じ、餘毒今に及んで、所謂高襟黨なる者を生じつゝあるは、世人の熟知する所たり。而して今日、女子教育界には、往年の西洋崇拜主義の到る處を風靡するを看る。其の結果、婦女子の眞正なる獨立心消耗して、外來の方法によりて獨立せむとする者のみ、其の數を增加したるにあらずや。かの女學生なるものが、一家の主婦として、何の役にも立たざるを見ても、今の教育が、精神なき西洋摸倣主義たるを窺ひ得べし。

精神なき國民が、優等なる國民に接觸する場合には、多く屈從す。これを個人に就きて看るも亦等し。精神薄弱なるものにして、優者に接すれば、たゞ其の皮相を摸倣し、且つ自ら彼れに屈從す。好例は、邦人にして、外國人に使傭せられたるものとす。

吾が婦人と、西洋婦人との間に於ける關係は、外來の人と通辯人との關係の如きものなきにしもあらず。西洋的教育を受けし者は日本人の間にてこそ、氣取り得るだけ氣取ながら、西洋人の前に出でゝは、全く意屈地なきは、吾人の屢ば實見せる所なり。これ今の教育が、日本特有の婦德を涵養せざるが故なり。此の美德たるや、東洋文明の一特色にして、千載に消えざる光明を放つ。

東洋文明の產出せし婦德の炬火を揭ぐるものは、實に日本の婦人なりき。然るに其の火光や、西洋模倣主義の爲に、漸次に光明を失はむとす。これ西洋の光に負けたるにあらずして、婦女子等自身が隱蔽しつゝあるなり。斯くの如くして進まむか。さなきだに他人種を劣等視する洋人、殊に自負心の強き西洋婦人は、吾が女子を視ること、甚しく無禮なることあるに至らむ。此の屈辱を被らざらむと欲すれば、今日に於いて、根本的改良を企てざるべからず。而して東洋婦人會の如きは、奮つて其の業に當らざるべからざるなり。徒に社交を目的とし、漫然文化に貢献せむなど言ふは、吾人の取らざる所なり。

二部教授論に就きて

文相が二部教授を行ふべしとの方針を示したるより、世間これに贊する者あり、又之れに反對するものあり。去れど吾人をして言はしむれば、之れを完全なる教育法なりと論ずるものも誤れり、又之れを不完全なりと攻擊する者も亦謬れり。

第一に吾人の注意すべきは、文相の意が、之れを以つて、全國の小學教育を完うせむとするにあるや否やの點なりとす。念ふに文相が、常識を失はざる以上は、斯くの如き愚策に出でざるは、誰か又疑ふものぞ。而して或る場合に於いては、此の方法を採れば、却つて効果の大なるとあり。

例へば農民又は中流以下の商人の子弟等は幼稚ながらも其の家の爲に働く場合甚だ多しとす。されば彼れ等が一日の大部分を學校にて暮すとは、其の家に取つて、甚しく不利益なり。故に彼れ等のために、半日學校を開きて、午前及び午後に教育を施すは、一擧兩得なりと言ふべきなり。ひとり此の種子弟のみならず、所謂子守教育に於いても亦、二部教授の功力大なるは、數言を用ひずして明白なるに非ずや。此の故に吾人は各地に半日學校を、適宜に開設するは、むしろ民情に恊ひたるものと信ず。

半日學校の制に關連して、誰人も唱ふる所は、教師の勞働問題とす。曰はく一日八時間の勤務は、其の身躰精神を疲勞せしむると大なるが故に、教育の進歩は、甚しく遲々たるべしと。これ一面の眞理を有する議論なりと雖も、なほ全局を眺めざるものたるを免れず。八時間の勞働時間は、決して長きに過ぐるものに非ず。今日諸官省をはじめ、諸會社に於ける勤務時間は、概ね八時間なりとす。而して役員社員皆な其の業務に堪ゆ、教員とても何ぞ八時間に堪えざるの理あらむや。

教員には所謂下檢べの時間を要するが故に、八時間の勤務は、實際に於いて、尙ほ多數の時間を意味するものなりと論ずる者あり。然り、教員の勤務時間には此の時間を加へざるべからず、然れども、何れの勤務にか亦、附屬の時間なき。而して從來の結果、其の爲に、事業の進歩を妨げられたる例あるを見ざるなり。

由來小學校教員にして、八時間の勤務に堪え難き者の如きは、躰質に於いて、其の資格なき者と謂つべし。吾人は斯くの如き脆弱なる教員が、生徒を導くを願はざる者なり。八時間の勤務に堪えざる者には、六時間

の勞働又多しとす。蓋し教師の躰質、八九時間の勞働に堪えざる所以は、給料少くして充分に躰力を養ふと能はざるが故なり。若しも彼れ等に與ふるに、多くの俸給を以てすれば、平然として八九時間の勤務に服すべし。充分の給料をも與へずして、其の不活動、虚弱なるを咎むるは、亦トンチンカンならずや。而して此の弊を矯正する點に於いて、二部教授の利亦多しとす。

無題録

◎歐人言を爲すあり、遼東半嶋に於ける日本軍の行動は、頗る部文明的なりと。蓋し我が軍の猛進を非難せし言ならむ。而して吾が一部の人士亦斯くの如く論ぜむとす。

◎去れど言ふを止めよ。戰爭とは本來非文明のものなり。非文明の裡に非文明ありと攻撃するは、糞桶中の物を指して臭しと非難す異にらず。さほどに文明が尊くば、初より戰爭を否定せところ可らざるに非ずや。

◎野蠻的の中にも、多少は文明の風を起さゞるべからずと論ずるが如きは、畢竟これ學者の譫語のみ。猛進して、多數の兵士を失ふの不可なるは、文明的標準を待たずして明かなりと雖も、鐵砲放つて勝負が定むる以は、時に此の決斷を行はざる可らざるなり。

*　　*　　*

◎激戰中、日本の國旗を樹てゝ、苦境を遁れたる露軍は、言語に絕れたる蠻人なり。一寸のがれの窮策を講じて、我れに多くの權利を與ふる露人は、思ひしよりも馬鹿なり。

◎浦鹽艦隊、再び吾が田海に南下して、暴行を極む。社會は上村中將の責任を問ふ。されど吾人は、咎むる者が咎めむと欲す。茫漠たる海上を衞るは、旅順口を攻擊するよりも、寧ろ困難なればなり。

◎開戰以來、恤兵の二字を冠きし種々の會合催さる。日はく恤兵音樂會、日はく恤兵展覽會、日はく恤兵演劇。吾人は其の濫用せられむことを懼る。

◎岡山の裸體問題は、頗る曖昧の裡に葬られたると全時に、甲府市に於いて、新裸體問題起れり。今年は裸體問題の當り年なるかな。

◎工科大學燒失せり。世人日はく、猛火は博士と學士とを燒けりと。

◎東京市內に、電車開通するに從つて、職業を失へる車夫、甚だ多きを歎くものあり。吾れ等とにも、彼れ等を憫む。然れども是れか爲に、文明の機關を嘲笑するに至つては、愚も亦甚しからずや、

◎文明の機關が進步すると共に、舊時代の勞働者が、一たび困憊の狀る陷るは、避け難き現象なり。今日か車夫とこも、往昔には、駕籠屋の株を奪ひたるものなり。

◎職を失ふもの多しとて、物質的文明を罵詈する者の主張に依れば、終には今日の社會をして、太古の狀態に歸らしめてるべからず。之れ見たきならずや。

◎淺薄なる社會主義の徒は、漫然失職者に介情するのみなり。渠等何が故に、彼れ等に自活の方法を授けざる。

◎時局學術講話會なるもの組織せられたるは、悦ぶべし。元來我か國には、感情論のみ隆にして、學術的研究になれるもの尠きは、吾人の最も遺憾とする所なり。

◎改に露國に關してすら、感情の議論のみ行はれ、冷靜なる研究なし。時局學術講話會は、此の缺點を補ふに足るものならむか。

繪畫小論

白鳥生

瀟洒たる花鳥山水の掛物、淡彩の寫生畫の小額、例へ名家の筆にならずとも、以て室内に趣味を增し、坐臥知らず〳〵住者の精神を慰籍するならん。日本人は元來玩美心に富める國民なれば、山間漁村にも茅屋の中一二の煤けたる書畫の小幅を見ざること稀なり。

かくて繪畫は室内の裝飾品として甚だ價値ある者なるがこれを上野の五號館などに陳列せるを觀るに甚だ興味の少きを感ぜざるを得ず。藝術品は人間を慰籍し精神を上品にすべき性質を有すれど、事實に於て展覽會場を通覽して、さしたる慰籍をも感動をも得る能はざる也。畫家の技倆拙なるが爲かといふに、博物館にて催す古名畫展覽會にても、慰籍と感動を受くる點は新畫の展覽會と多大の相違はあらず。吾人は音樂を聽き、演劇を觀、小說詩歌を讀み、現在の悲慘人情の曲折に或は泣き或は笑ひ、時に心裡の琴線に觸れて全く我を忘るゝに至ることあれど、繪畫に對しては其の色彩の美に感じ着想の非凡に驚くとも、これによりて、吾人の苦悶を慰め、又は醉ゑるが如くなる能はず。繪畫は其の特色として。瞬間に痛切なる感動を與へずして、建築彫刻等と同じく、日常徐ろに人間の審美性を養ふ者なるが。空間的の藝術は單に形式美を顯はすに止まるか。

繪畫の趣味は甚だ淡ければ、骨董家なども同じき一種のディレッタントが、情熱に乏しき冷靜の人々ならでは、陳列品に對して十分間二十分間これを味ふの忍耐力あらざるべし。從つて僅か五錢の入場料なるに、展覽會縱覽者の數は誠に僅少なり。しかも其の僅少の縱覽者の半ばは花見か散歩の序次に立寄る也。心細きこと哉。而して日本畫展覽會は洋畫のに比して遙かに入場者少し。殊に靑年學生は日本畫に對して殆んど何等の興味をも有せずと見ゆ。さながら彼等が俳句や和歌を味ひ得ざるが如し、これ一は趣味の幼稚なるに由るならんも、又洋畫の日本畫に比して、看覽者の眼を刺激する度合の遙か強きに基く也。床の間に掛けて絕えずこれを覽んには、濃厚よりも淡泊を宜しとすれど、會場にて少時間に快感を得んとせば勢更に多く濃厚なるべく、刺激の度强かるべき也。裸体畫を以て繪畫の最上とする、この要求の結果ならざるか。

瞬間のみ寫つし能ふ繪畫にて、人を動かんとするは

非常の難事にて、思想複雜の今人に向つては一層困難なり。歷史畫といひ當世人物畫といふもこれによりて肉跳るの感を引起すは容易にあらず。美人の裸躰畫にして始めて看覽者の恍惚忘我の域にも達するを得る也。曲線の美とか何とか彼とも理屈を付くれど、其の實肉感を刺激することが主要の目的たる也。裸躰を寫つし、風俗壞亂の域を去る僅かに一歩、やうやく人心を魅するを得る繪畫は決して藝術として多く儆るの權利なき也。





昨今の提灯屋

杉山天風

戰爭の打擊——之も天祐か——豫後備軍——五軒の問屋——三軒の仲買——内職の内幕——ヒゴ削——張方——福德の三年目——新たなる内職團隊——囚人と提灯——提灯の輸出——外人の好み

●戰爭の打擊　開戰以來、諸般の商工業が被つた打擊は、實に非常なもので、何れも青息溜息の有樣であるが中にも提灯屋の如きは、たゞさへ電氣や瓦斯の光に被壓されて、果敢なき運命を嘆てる折柄、命と賴むお

祭や園遊會、或は賣出し開業式も時節柄とて、何れも質素〳〵とばかり、酸漿提灯の賑かしもなくなつたので、あはれ提灯屋の運命は、蠟燭の火と共に消えなんとする、哀れな有様であつた。

●之も天祐か　然るに、何が幸になるか分らぬもので、之も所謂天祐か、皇軍の連戰連捷の結果は、玆に提灯行列と云ふハイカラ式のお祭騒が始まり、今まで藏のうちにへしつぶされて居た提灯は、急に武裝して世に出るや、忽ち人を殺す程の猛勢を現はしたので、提灯屋は嬉しいやら恐いやら、此末はどうなる事かと、心配と忙いとに寢る事も忘れて、一月ブッ通しの徹夜とは、ちと大仰だが、兎に角く未曾有の大繁昌、相場も此時までは拾貫の、九寸の手丸で百個二圓半から三圓見當であつたものが、見る〳〵品拂底を來して、一足飛びの四圓五十錢から五圓、甚だしきは六圓でも七圓でもとの注文も、哀いかな品切で御座りますと、弓張を間に合はせに向けると云ふ有様。

●豫後備軍　されば此上旅順陥り、奉天遼陽乘ッ取つて、哈爾賓占領の曉には、馬上、高張、盆提灯の豫後備を召集してからが、到底引足らす譯のものでは無いが、かゝる場合に提灯屋たるもの『最早品切で御座い、此上は皆さん御所持の、國民提灯でもお使ひなさい』とまさかに濟しても居られまい、さうなつた時の覺悟はどうぢやと或る提灯問屋を詰つて見ると、『なんの貴方様、如何に提灯屋だからと申して、此際商賣物のぶらりぼんやりとばかしもして居られません、ちやんとそれに應ずるだけの準備は銘々怠らず致して居ります』と其言ふ所を聞いて見るに、

●五軒の問屋　まづ市中に、提灯の問屋は十數軒あるが、其中の重なるものは橫山町の和泉屋、靑物町の相模屋、大傳馬町の京屋、人形町の伊勢屋、鍛冶町の伊勢古の五軒で、何れも江戸時代の老舗廣手、に商賣をして居る、而して此五軒は、各自下職と云ふものを二三軒づゝ抑へて居て、念入りの注文物や、輸出品の如き上物は、一切之に命じて拵へさせ、普通の仕入物や、臨時物の如きは仲買の手から買入れて居るが、目下のやうに一日に二三万からの多きを仕上げても、尙ほ不足を告くるやうな急場に處しては、とても下職內職の區別をして居る暇が無いので、何れも打揃ふて張込んで居ると云ふ。

●三軒の仲買　提灯の仲買は　市内に三軒あつて、其うち牛込若松町の足立屋と云ふのが、一番手廣にやつ

て居る、十餘軒の問屋に、僅か三軒の仲買では、少し權衡が取れぬやうであるが、前にも述べた通り、重なる問屋には下職と云ふがあるから、仲買店の多くは、臨時物を主として、傍ら下職を有せぬ、問屋の注文を聽いて居るのである、さて、此仲買は如何なる所から提灯を仕入れるかと云ふに、それは各內職人の手から買入れるのである。

●內職の內幕　提灯の內職は、昔は榊原の藩士が一手に引受て居たものであるが、維新後はそれ等の株も無くなつて、一般の手に移つたとは云ふもの丶、矢張夫等の遺族が手慣れて居るところから、內職人は相かはらず榊原藩の者に多い。而して其遺族が、池の端の藩邸を引拂つて、移つた先が牛込の原町、若松町、大久保邊であるから、今でも此內職は、都て牛込の一隅に限られて居る有樣である。此處で一寸其內職の內幕を覗いて見るに、內職にはヒゴ削と、張方の二つがある。

●ヒゴ削　とは、言ふまでもなく提灯のヒゴを削る仕事で、始終刄物を使ふところから、之は主に男子の仕事となつて居る。別段六ヶ敷い事でもないので、素人が直ぐ手を出してやれない事は無いが、併し一寸刄物を利かせるだけの手腕が無けねばならぬ。竹は箱根の二年竹で丈六尺のもの百本を把として、それが十錢、之をヒゴに削れば二把のヒゴとなる。ヒゴ一把は八百本であるから都合千六百本を得られる勘定である、其處で一把のヒゴは仲買へ幾許で納めるかと云ふに、普通九寸の手丸のヒゴで十七八錢乃至二十錢であるから、男の仕事としては、日に三把はどうしても仕上げねばならぬが、三把のヒゴを削るには、隨分骨が折れるさうだ。

●張方は　提灯の型へヒゴを卷き、糸でかゞつて、其上へ紙を張ると云ふ、始終坐つて出來る仕事であるから、之は無論女の獨占事業で、二三週間も見習をやれば、直ぐ一人前に成れて、そして外の內職よりは三割方も割が善いと云ふ甘い內職である。が、之をやるにはヒゴ削よりは少々資本がかゝる。まづ、提灯の二三通、一組一圓二三十錢として、三組で四圓、それから型を組立てる道具、それが二圓、それから原料のヒゴ、紙、口輪、麻糸など、一寸新規開業には、五六圓の金が要る、紙は提灯の種類に由つて色々あるが、普通弓張、高張、手丸の類を張るには、五把西と言つて、一帖十七八錢の西の內の薄手を用ひる、口輪は、口輪屋から卸して來るので、數五十が十一錢、ヒゴは仲買か

ら買つたり懇意なヒゴ屋から二錢安位ゐて買ふ、其處で一帖の紙、一把のヒゴで幾許の提灯が張れるかと云ふにまづ普通九寸の手丸で二十としたものである、されば十八錢の紙十八錢のヒゴ二十個四錢の口輪合計四十錢、それに糊、麻糸の代を五錢と見て、都合四十五錢の資本を掛ければ、手丸四十個を得られるのであるが、それで純益がどれほどあるかと云ふに、出來上りの好惡にも、又時の相場にも由るが、大抵手丸一ツが四錢であるから「二四が八十錢、其うちから四十五錢の資本を引くとすれば三十五錢の收益がある、それで日に普通の腕で幾個張れるかと云ふに、まづ二十五六から三十、餘程の敏腕でなければ四十は辛いと云ふ事だ。

●福德の三年目　提灯の內職狀態は、ザッと右の通りであるが、さて昨今の景氣はどうかと云ふに、申すまでもなく大極上々の景氣で、普通の手間より三割强の騰貴、即ち四錢の手丸は五錢五厘位になるから、是ぞ誠に福德の三年目、今年こそは嚊のおかちんをうんと搗いて、經師屋連を喜ばさうと、ほく／＼喜んで居る後家さんもあれば、行列の提灯で三枚襲を拵へて、盆提灯で吾妻コートを拵へやうなぞと、夢中に騷いでる娘もあるやうな譯で、何れの長屋も嘻々たる歡聲で滿たされて居る、されば出征軍人の家族や、安官員の內君なども、遊んで居るよりはと手を出せば、今まで袋煙草や、福神漬の澤庵切りに、臭くなつて居た嬶連も、皆此方へ足を向けると云ふ有樣。

●新たなる內職團隊　されば問屋も、かゝる熱心な、しかも有力なる下職を扣へて居れば、まづ安心枕を高ふして可いかと云ふに、決してさうでない、提灯の需用は、獨り東京ばかりでなく、提灯行列は全國到る處に行はれるので、何れの地方の問屋も品切れの悲鳴を擧げて、救助を東京の問屋に求むる有樣であるから、とても數の知れた下職や內職人などを宛にして居ては追ッ付かぬので、新たに有力なる內職の團隊を得る必要が生じた。

●四人と提灯　そこで東京の各問屋は、專心苦慮、我こそ名案を出して組合の者に鼻明かせんものと、考へぬいた揚句〆たりと手を拍つて喜んだは靑物町の某で、一番此仕事を監獄に請負はせたらどうだらうと鼻うごめかして相談すると、是は妙だと贊成するものもあれば、又苟も祝勝の提灯を、四人に張らせるとは世の聞えも如何なり、第一又江戶ッ子のする事ッちやア

あるめえ、己らア一番下職を殖やして、縦んば損をしやうとまゝ、囚人なんかの力はからねえと、力むものもあつて、結局監獄沙汰は銘々御勝手と云ふ事になつた、其處で監獄を喜ぶ連中は、總代を派して市ヶ谷、巣鴨の典獄に計つたところが、提灯も十四五年前には鳥渡試驗的にやらせては見たが、どうも割に合はぬから止めた、が、地方の監獄ではやつて居るやうであるからそれへ交渉して見たらばどうかとの事に、さらばとて總代は、尻に帆かけて近くの宇都の宮、茨城へ飛んで行き、渡りをつけて見ると、直接他縣の者には卸さぬ、土地にはそれ／＼請負人があるから、それへ相談せよとの事に、委細畏つて請負人に相談すると、成程手間賃は安いが、矢張頭を叨られた上に運賃の何のかのと結局高いものにつくが、此際高い安いは言つて居られず、品さへ間に合へば結構至極と遂に相談は纏まり、該二縣からは日に一万位づゝの着荷はあると云ふ、されば此分で行けば、地方よりの注文を充す事は十分であり、且つ一時中正の姿であつた輸出品も、斷るには及ばぬと云ふ大喜び。

●提灯輸出　は明治十七八年ごろからぼツ／＼出し始めて、爾來五六年の間は、ホンの見本位のものであつたが、二十四五年の頃から、少し景氣づき、日清戰役の後は、著しく輸出高が增加した、と云ふものは戰捷の結果、始めて東洋に日本と云ふ强國のある事が、一般に知れ渡つたのと、一つは戰捷國の物產と云ので、都ての輸出品の高が殖えたと同じく、提灯も等しく歡迎せられ、其うちにも英米の二國へは、一番多く輸出さるゝやうに成つた、而して、市中の問屋のうちで、直輸出をやつて居るのは、橫山町の玉井七郎右エ門のみであるが、此店で年々輸出する額は、倫敦ばかりで二十万個以上であると云ふ。

●外人の好み　輸出の提灯は、如何なる形のもが外人に好かれるかと云ふに、まづ普通九寸以上の手丸、弓張の二ッで中には高張の如大物、又は瓢簞、福助、梟の如き奇形のものも行くが、多くは手丸と弓張の二種であつて。球燈などは却て向かぬさうな、而して、其模樣は何れも濃厚な色彩を施した、花鳥人物なぞで無地のものは一向にうけないと云ふ。

（完）

常陸沈んで新中納言浮み出し

雜評



浮世の相

小梅閑人

▲常陸丸に乘込める千人の武士をして、千秋の恨を呑んで海底の魚腹に葬らしめたる、可惜しとも可惜し。之れが長たるものは從容として、軍隊の重寶たる聯隊旗を燒いて自盡し、其の他靜かに艙頭に立ち陛下の萬歲を祝して海に投ずるもの、軍歌を高唱しながら自殺するもの相次いて、玄海の灘時ならぬ大和心の花を散しぬ。如何に彼等が最後の潔きよ。今や日本人の武士的精神は正に市井村閭に微したる平民の子弟に於て十分に發揮せらるゝを見たり。吾人は常陸丸が遭難の詳報を讀んで、そゞろ彼等が無殘の最後に同情の涙を催すと同時に、殊勝なる彼等が廉恥心の高きを思ひ、誠忠の情厚きを思ひ、何とはなしに只忝けなき涙のこぼるゝ心地せり。

▲借問す。何うだらう。內外の紳士を乘せたる戰爭見物船滿州丸が一つグロンボイあたりの黑船にニユツと出會したら。驚くことか、驚くまいことか、假りに想像すると頗る面白い。外人は知らぬが、此の船には畏くも黑田侯爵初め貴衆兩議院議員の連中、其の他各方面の名士が居られる。東京經濟雜誌の田口卯吉君、日本人の三宅雄次郎君、時代思潮の横井時雄君、志賀矧川君、其の他文筆言論の上では相當に口もまわり、筆もたつお方ばかり選りも選つたり。武士道とか志士とか、潔士とか、偉人とか基督教紳士とか他人に向つては、然り國民に向ひ、人民に向ては隨分と注文の多い人々が、グロンボイとロシヤとに挾まれて、瞬く暇に數十百の巨彈を浴せられたなら、あの文章言論が思つた通り、言つた通り行はれるであらうか、青菜に鹽のイヤモ多愛もない次第とならぬであらうか。氣使な事ではある。滿洲丸は万々其樣な危險に瀕する氣使ひはなからうけれども、吾人は國民の武士的精神が如何なる程度にまで是等謂所社會の聰明なる人々に依て具さに發顯せらるゝかを試み見んが爲めに、天が常陸丸に代ふるに一つ此の滿州丸を以てせざりしことを悲む。吾人は夙に開戰の當初より不言無文の英雄を多く見たり。唯未だ文學ある英雄を見るに及ばず、英雄になれと教ゆる人が自から英雄となりたる場合を實見せず。吾人は國民的精神の干滿を測量せんが爲めに滿州丸が露艦の前に暴露するも辭せず。何うせ一艘沈めらるゝなら常陸丸であらうが滿州丸であらうが差支へないとして、不幸の結果は測量器に利用せられたかも知れぬ。

▲文學博士蟹江義丸氏逝去す。兵馬倥偬の際只厚情なる同人間に哀惜せらるゝのみ。哲人の死や由來斯の如しと雖も、亦た顧みて人世寂寞の感なくんばあらず。

▲德富蘇峯君に依て文筆頭健。頃者「東亞の日本と世界の日本」と題し、論去論來、意氣軒昂、文字剴切を極む。其の初めに我が日本は遂に極東偏在の餓鬼大將に甘んずるものにあらざることを痛論し、最後に於て我が國の目的は歐西の人士に向つて彼等が偏狹なる鎖國主義の解脫を促さんことを勉むるものなりといふに到りて、正に文氣堂々世界を厭せんとす。

▲日本人に掲げたる黑岩涙香が「偉人の說」は近來の名文なり。時代が要

する偉人は時代の精神が自から之れを醗生する所以を說いて適切。更に一朝有事の日に於て吾人自から偉人となるべき平生の用意を說く所頗る面白し。

▲此の頃第二號を出した「新潮」はなか／＼よく出來た面白い雜誌だ。單に新潮社諸氏の成功を祈る者也。

▲幸田露伴の「心のあと」を非常に賞讚する人が多いけれど、吾等の見た所では、あの位の所は詞藻豐富なる氏の咳唾に過ぎぬ。

▲此の頃歌舞伎座に梅幸の累を見ぬ。變態科白活躍として能く心理の機微を標現せり。然れども彼れが天性陰欝なる容貌を以てして尙ほ、始めて鏡を窺く場合の表情（エキスプレッション）足らず。梅幸の如き纖細なる技藝を有するものは須らく自重して一段の修養を積むべき也。

鬼面魔語

醉美生

▲全く成効の見込なきもの及び、極めて成効の容易なるものには人は決して熱することなし。成効の見込ありて而かも成効せざるとき、滿身の精力火となつて燃ゆ。

▲容易ならざる或る一事をなさんと欲するとき、始めは先づ熱し、中には必ず倦み、當さに成らんとする終りに至つて再び熱するものぞ。

▲多情多感にして些細の事にも心を動かす程の人にあらずば人生の妙味を悟ること難し。

▲日比野派の劍舞たゞ無闇に身體を動かし、矢鱈に劍光を發するも美術的技藝を缺くが爲めに看客を感動せしむること甚だ尠し、こゝ暫らく踊又は俳優の所作等に學ぶ所あるべきなり。

▲日比野が劍舞大會を開くや大いに自巳の人物技藝を吹聽し、盛んに高

貴顯官の人を擒いて大言壯語す、之れが爲めに其男を下ぐること數十等。

▲今の人、異性のものと交際すれば直ちに肉交を想像し、醜聞四方に傳はる。陋なるかな。情を以て交はると、肉を以て交はると其相去ること數千里なるを知らずや。

▲生命ほど尊きものはなしと思へる人程あはれなるはなし。そがためには生命など塵芥に見ゆる程執着する或る一物を有せずんば、此世の中の如何ばかり味氣なからん。

▲人物を知らんと欲せば其趣味嗜好を察せよ。

▲一つの虛言をいへば二十の虛言を吐かさるべからずと至言なるかな。

▲朝湯には男多く、夜の湯には女多し。其性情の異なる、其住する世界の同じからざる、以て見るべし。

▲裝飾にまれ、技藝にまれ、趣味にまれ、總て「しぶい」と名のつくに至らざれば駄目なり。

▲如何なる秘密と雖も己が胸一つにのみ納め置くことは殆んど人間の堪へ難きことなり。誰人にか洩さゞれば其心落附かざるものぞ。

▲人間を硏究せんとするものは必ず巢鴨の精神病院を觀察せざるべからず。

▲世に「人間學」程有益にして趣味深きはなし。

新柳樽

翫弄屋の前で地團太ふんでゐる　馬鈴子

雪隱の落書悉く記臆をし　同

借て來た傘を途中へ忘れて來　秀耳
家て呑む酒は廉だと樽で買ひ　月星庵
近視眼命のつきが眼鏡なり　同
初鰹倶利迦羅紋々江戸氣質　幻怪
貸本屋人のひまをば付ねらひ　柳舟
日記帳去年の今日を繰つて讀み　金太
不意の客來暑中ては度々あはて　同
居候返事のよいは飯の時　春雨
局長の靴音スワと筆を持ち　病猩々
貞奴出たかと外づす伊達眼鏡　同
藝者の寫眞雜誌の出女相つとめ　同
花菖蒲堀切のみで無い樣子　梧新坊
若旦那號外賣と成下り　大灣堂
移替ア、早まッたと震えてゐ　不倒坊
百合の花見て靑詩人首かたげ　宮坊
新智識抑々アチラではを能くシヤベリ　同
亜米利加の國旗然たる兀頭　金比古
女の湯タッタ二錢は酷い事　同
萬歳の發聲大家相つとめ　同
良妻がコゲ付き斗焚いてゐる　春雨
風車見てゐる顏を母のぞき　京子

間違へた下駄を風呂屋へ替に行き　秀耳
一寸と耳をと云ッてふりかへり　同
下調べつかぬに試驗の掲示が出　アセン
シテ密談とはいかなる件と顯を出し　竿捧
武裝した飴屋凱歌を奏す也　顛臺師
裸體美は九尺二間が元祖也　門外坊
大將がウジャ〱出來る難有さ　水日亭
川柳杯と手ぬるい〱と出征し　呑吐坊
定九郎式に露艦は出來上り　久良岐

（魔風戀風）

ちどり

▲一たび讀賣の氏上に表はれて、滿都の靑年を惱殺せりと唱せられし、天外の「魔風戀風」は、上下三卷の美本として春陽堂より出版されたり。

▲吾人は近時の新聞小說として、此の作の僅かに成功の作たりしことを疑はず、また作者天外が寫實筆愈精練の域に進んで、今や此の不振の文壇に一個の異彩を放ちつゝあることをも認むるに躊躇せずされど新聞小說としての成功は、直ちに其の一面に於て作者が或種の不便を忍びつゝありしことを豫想せしむ、一部の評家によつて指摘せられたる此の作の缺點は、作者の如何なる强辯ありしにもせよ、決して拒むべきものにあらぬと共に、吾人は新聞小說の特質として、寧ろ恕すべきものあるべしと信ず。他なし、是の描寫の散漫てふことなり、從つて之れを一個の

完躰として、性格の上に、筋の上に、多少統一を缺ける點あることなり

▲篇中に於て作者の最も力を盡したる人物は、主人公萩原初野なり、從つて此の人物の性格は比較的活躍して、其の心中の煩悶も其の堕落の徑路も略ぼ讀者を首肯せしむるに足るものありと雖も、若し之れを作者が前年の作「はやり唄」女主人公に比すれば、其の性格描寫の上に於て、大なる逕庭なきこと能はず、其の他の人物に至つては「やはり唄」中の人物のそれ〴〵に活躍の致を備へたるに比して、及ばざること遠し。たゞ作者が細密なる寫實の筆と、氣の利きたる對話の技に至つては、聊かに前年の作に比して、一段の進境あり。

▲各篇の首に載せたる、序言に就いては、其の作に對して、何等の重きを加へざると共に、また必ずしも排するを須ゐず、此の作者が健闘の意氣を示す點に於て、寧ろ多とすべきものなきにしもあらず。以て其の趣味の傾く處を視、以て其の主張の趨る所を視るに於て多少の趣味なしとせず。

▲此の作を以て或ひは「燒芋」と同一視し、或ひは「露骨」と罵れる評家の言の如きは「一句、一線、悉く作家の理想化になれる」此の作に對しては、蓋し以ての外のことなり。されども他山の石また以て我が光を加ふべきものありとせば、評家の言必ずしも一顧の價なきにあらじ。

新柳樽

不機嫌

「三十六計」露兵支那より强奪し
賣殘り音樂會し市に出て
柳樽そろ〳〵洋酒つめはじめ
泣男花外京都に烟艸屋し
淸盛も今に贈位よと云つて居り
田五作は軍債を獻金と早がてん
京都女學校主人と姿教師なり
京式部海老ではないと威張て居
走後れの號外屋だまつて入れて行き
風流醫雨にもかちで客まわり
小新聞の號外屋新聞名を稱はず
あみ張つた露兵蜘蛛の子の樣に逃げ
鷩視聽狂歌狂句を恐れて居
高等學校受驗生そろ〳〵やけを始めかけ

* * * * *

俳蚊士

式部とは源氏名てすかと老爺きゝ
「散歩よ」が遂に病の初めなり
柳樽秋はないかと式部とひ
柳樽もとは式部にフラレ者



讀者之文壇

戰時雜感

健忘性の國民

高山血來

○彌子瑕衞の君に愛せらるゝ時、曾て其母の病めりと聞き、君の車に駕して之に赴く、衞君以って孝となすまた曾てその食ひかけし桃を甘しとして之を君にすゝむ、衞君以つて忠となす、後寵衰ふるに及びては、先づ此二事を以つて罪を得たりと

吾人は東西の史傳を讀み、此種の事例に接する毎にいまだ曾て巻を掩うて轉た人情の賴み難きを思はずんばあらず、特に武人の傳に於て、此事例の甚だ多くして此感の最も深きものあるを覺ゆ、試に史記列傳を繙け、到るところとしてかくの如き悲慘不幸の英雄を見ざるなき也

日露事件の破裂前まで、我國民は、いまだ一昔ならざるに已に日清戰役に於ける軍人の偉功を忘れ居たりき、原田重吉、白神源次郎早く既に人の話柄に上らず松崎大尉、山地將軍僅かに日清戰史中に其影を止むるに過ぎず、其他樺山、山縣、野津等の諸豪、及びこの役に與りし軍人の勳功まで國民の記憶に殘れるところ甚だ薄弱なるを覺えずんばあらず、而して之が記憶を喚起すべき同樣の戰爭に遭遇しながら、其當時を忍び出て泣くものは軍人自身にあらざれば則ち其遺族のみ

凡そあらゆる義務のうちにありて、何者か夫れ生命を賭して從ふ程至難至大のものあらんや、而も其貴き生命を抛つてこの至難至大の義務を盡したる軍人は、血痕いまだ乾かず、創痍なほ癒えざるに、早くすでに國民の忘るるところとなり、平々凡々の一武人となり了らんとす、若し予は予の義務を竭くしたるを以つて滿足せんといふが如き崇高なる意味よりいへば、素より國民の喋々たる賛辭感謝も軍人にとりては遂に一顧の

價なきものならんも、吾人は之れを以つて滿足せよとは軍人に强ふること能はざる也

世は多く武器によらず平和の手段によりて戰ふに至り、所謂武門なるものも漸次に其勢力を減じ來るや、其武功赫々たるものも等しく無能の武人と同一視さるゝの傾きあり、往古武門の盛んなる時代にありては、武人の一擧一動悉く史上に其跡を刻み、世人をして後世まで絕えずこれが功勞を謠はしめ、其人格を慕ひ、其英風を崇拜せしめき、幾千年の古き物語も今尙ほ人をして傾聽せしめつゝあるを知らば思ひ半に過ぐるものあらん、而も之を今代の武士が有せる勳功と比較するに、決して日淸、日露の役の上にあるものを見ざる也、時代の風潮、人事の盛衰、洵に已むを得ざるとはいへ、思ひこゝに至つては、當世武人の爲めに一滴の淚なきを得ざる也

今や日露の戰ひ酣にして、我軍人の勇壯なる武功は國民が滿腔の熱情を以つて感謝しつゝある處也、然れども今は國を擧げて其熱度の最高點にあるの時なり、干戈收まり、熱度冷却せるの時の事、いまだ知るべからざる也

往昔ペルシャの大軍に敵し得で、將に國を以つて敵の奴隸たらざる可からざるの危機に際し、正に一世智囊を絞つて再びアゼンスをして自由の民たらしめたる希臘の英雄セミストクリースは、遂にアゼンスを放逐されて悲慘の最後を遂げたるにあらずや、其他烹狗の故事、東西其例に乏しからず、吾人は今日此の如き極端なることの行はれべくとは推し得ざるも、國民が健忘性なるは深く戒めざる可らざる也、特に日淸日露の戰爭に於ける武人の功勳は之を子々孫々に傳へて永く忘るべからざるの大事なり、之を忘るゝは、少くとも軍人を以つて烹狗となすに齊しき也

吾人は我國源平氏より下つて戰國時代を經、德川氏の時に於ける如く、又彼の拿破崙帝の下にありし佛國の如く、徒らに某々武將の豪勇と、そが赫々たる偉勳とに眩暈して、只その奴僕となり、奴隸となり、自由を欲するの情をさへ失ふが如き極端なる英雄崇拜を喜ぶものにあらずと雖も、而も國家の爲めに大功ある者に對しては、これに相當するの敬意と感謝とを拂ふため、永く之を記憶に存ずべきは、吾人血の稅を拂はざる國民の義務なりと信ず、あゝ何ぞ忘るべけんや。

神の意乎

金州丸事件の痛哭に加ふるに吾人はまた一の新らしき痛に接せり、即ち常陸丸佐渡丸以下の遭難事件これ也

陸にまれ、海にまれ、全力をあげて敵と闘ひ、彈丸つき劍折れ、勢きはまつて之に死す、死すといへども恨みなき也、初瀬吉野の事、吾れ之をいふに忍びず、彼の敵將マカロフが、いまだ其實力を示すに暇あらず只一回の目覺ましき働きもなくして、ヘトロパウロスクと共に無殘の最後を遂げたるに對して、吾人は敵ながらも彼の爲めに泣かざるを得ざりき、たとへ戰鬪中にありしとはいへ、其死の餘りに呆氣なく、彼が齎せる使命の万一をもつくす能はず、世界の戰術家として待ち設けられしだけの手腕を見せずして死したるを惜む、野蠻的か文明的か吾れ知らず、而も吾人は古への勇士が陣頭に立つて名乘りを揚げ、腕のつゞく限り切つて〳〵討死したる花々しさを忘る能はず、よし戰ひには敗るゝとも、よしまた屍は戰場に曝さるゝとも其快味實に忘る可らざるものあるべし

これとかれと素より同時に論す可らざれども、身は戰鬪力なき運送船中にありて、一矢を酬ゐん術だに無く、其有り餘れる力も終に振ふの餘地だに無く、見す〳〵敵前に死する身の、其無念さ殘念さ、到底吾人の想像し得ざる處也、スパルタ人戰場に出づるや、先づ神に祈り、神の啓示なき間は、たとへ敵の爲めに戮殺され終るとも敵矢雨下の下に無念を耐え地に伏して神のオーメンを待つを例とせりと、然れどもスパルタ人は神の意として尙ほ瞑ずるを得たりき、只々我遭難者は瞑目する能はざる也

然れどもまた一方より云へば、此度の事何等か大なる天意の存在するに非ずやを疑はしむるものあり、思へ若し我兵の力盡きて一歩にても退却せざるを得ざる場合あらんか、其損害は尙ほ大なるべく、軍氣の沮喪實に甚しきものあらんことを、幸にして我軍は未だ退却せしことなく、また以後も決して背進せざるべし、一戰爭の中、一びも敵に後を見せずして連戰連捷するといふが如きは歷史上最も稀れに見る處、我軍の精鋭といへどもこれを保す可らざりし也、然れども天は我軍に與みす、これに代ふるに彼れを以つてし、其のより大なる損害と、恐るべき軍氣の沮喪とを免れしめたり、而して彼等はこの犧牲として國家に殉したるもの也、吾人は此意味に於てこれを天の意に解せんと欲す

軍國の婦人

露國の一婦人、馬に跨り、手に劍をとり、進んで軍に投ぜし事、一度び世に傳へらるゝや、世人以つて壯となし快となし、口に筆に其意氣の豪なるを嘆ぜざるはなかりき

然れどもこれ決して驚くべきことにあらず、今假りに我國に於ても女子の從軍するを許し、玆に紅裙義勇隊なるものを編成せんとするが如きことあらば、幾万の婦人、幾箇師團の紅裙隊は時を待たずして馳せ集らんこと、決して吾人の想像し能はざるところにあらず彼等の或者は實に其男子たらざりしを悲めり、こゝろ神功皇后の昔を忍び、巴御前の勇壯を思ひ、さては又彼の軍に從へる露國婦人を羨望するの念に堪へざるものある也

世は封建の時代を去る未だ幾ばくならず、曾て深窓に琴を弄び、三十一文字に餘念なきを以つて美人の本職をなし、子を設けて乳母となるより外、曾て此世に用なきものとして認められし我婦人が、一躍して社會有爲の員に數へられ、進んで男子の領域にまでも其餘力を延ばさんとするに至りしは、吾人をしてそが進步の急劇なるに驚歎せしむるものにして、又吾人の最も心強く感ずるところ也

余が知れる一美人は常に余を捉へて論じて曰く、君は我國史を讀んで而して婦人の勢力の如何に偉大なるものなるかを思はざるかと、彼女は高天原に君臨して遂に我邦の太祖を以つて仰がれ給ふ處の大日孁尊を說けり、三韓を征して國威を海外に輝かしめ給ひし神功皇后をいへり、例を泰西にとりてはヴイクトリア女王を擧げ、支那に於ては西太后といひ、以つて婦人の能力の侮るべからざるものあるを明かにし、更に進んでは即ち女子も尚ほ陣頭に立つて國の爲めに竭すこと能はざるかと絕叫せりき、吾人は寧ろ其勇壯活潑にして忠の氣健なるに感服せずんばあらず

然り國家の進取的膨脹的時代にありては、たとへ女子なりといへども苟も此心なかるべからざる也、五十年以前彼等がありし如く、決して幽居偷安を許さゞる也、單に子を產むの機械たり、男子の玩弄物たるを以つて甘んずるを許さゞる也

是を以つて一方女權論の盛んに唱道せらるゝと共に女子が社會に盡すべき職分は揭げられたり、彼等は少くとも自己を意識し來れり、慈善事業の如き、たしか

に其一部は必ず彼等の力を俟たざるを得ざるに至れり特に戰時に於て最も其活動を見る、上は王侯貴人の夫人令孃より下庶民の女子に至るまで、西に奔り東に走り、軍國の爲め其全力を注ぎ、今や社會の表面に立つて働かざるものは國に忠なる婦人にあらずとなすに至れり、これ最も喜ぶべき現象なるが如し

然れども吾人はまた更に此裏面に立入りて觀察するを要す、吾人は徒らに村夫子を眞似るものにあらずと雖も、現代婦人の道義の念に乏しきは爭はれざる事實なるを信ず、故に婦人が社會の表面に於て彼の如き事業に熱中しつゝあるは、果して其衷心より出でし眞の心なりや否や、頗る疑はしきところ也、婦人はヴニチーの塊なりとは西哲の金言也、婦人の一擧一動は悉く此ヴニチーに適はざれば容易に動くものにあらず、婦人の或者が花々しく鎧ひて陣頭に現はれんとするの情は、其ヴニチーの極度を最もよく示したるものにあらずや、實にや優しく麗はしきが、瘴煙蠻雨もの凄き戰場に馳驅するが如き、敵味方をして衆目を一身に集めしむもの也、其虛榮心を滿足せしむる恐らくは之に過ぎたるものなかるべし、而もこのヴニチーの塊にして乃ち神祖を語り、神功皇后を說く、不敬褒讃もとより言語に絕したるものある也

即ち彼等が社會の表面に立つて氣健に振舞ひつゝある眞情なるもの知るべきにあらずや、而してこれが齎すところの社會の利益は、そが流せる害毒を引去りて幾干のものを殘し得べきや

吾人は今彼等にすゝめて社會的事業に奔走せよといはず、手內職をして軍國に竭せとはいはず、要求するものは他にあり、

彼等か社會に出づるまでには今少しく道念を高めざるべからず、今少しく精神の修養を積まざるべからず今少しく利己の觀念を去らざるべからず、而して「世間艶福に富める男子の第一の資格は鐵面皮なるの一事なり」といへるルソーの言をして非眞理ならしむるまでに强きものとならざる可らず、願はくば今しばらく家にありて家道を修め、其餘力あるに至つて之を外に用ゐんことを、軍國の婦人の義務は其家を修め、情操を高く持するを以つて足れり、戰爭を利用して自己のヴニチーを滿足せしめんとするが如きは、國家に對して大不敬大不忠なるものにあらずや。

（六月十八日稿）

短文

●看護婦

▲夫が召集になりました其同じ日から妾も志願して看護婦になり追々戰地にも參りまする積ですが、何事でもして見ると特別の興味とあるもので御坐いますね。

（一看護婦投）

▲今の看護婦中眞に看護婦の責任を知り、之を以て己が天職なりと信し、中心滿足して其業務に服しつゝあるもの幾何ありや。多くは職業なきに困じ、薄命なるに嘆じ、止むを得ずして看護婦となれるもの多きにあらざるなきか。慨すべきかな。

（其督教信者）

▲白い服を着て、白い帽子をかぶつてゆくのを見るとほんとうに奇麗だわねー、わたいも大きくなると看護婦になりたいねー。

（女子小學校生）

▲看護婦さんには男の病人ばかりを看護させて、女の病人には男の看護婦……アラ、アノ看護夫をつけたらどういふものでせう。どうしても看護婦さんは男の方には親切だけれど、妾等には意地がわるい樣ですよ

（女　患　者）

▲頭髮は漆黑にして衣は白鷺を欺き繃帶は小瀧に倣せるが如く手にせるは之れぞ徽章の色に背かざる平等的愛情を代表せる日本婦人なり。

（外　觀　生）

▲頭には純白の冠を戴き體にも雪を倣く白妙の衣服又顏に白粉もあり手は白魚の如く全身純白を以て飾れる神々しき其の風情、實に純白美の化身なるかな、又病者を看護する使命を帶び居るエンゼルなるよ。

▲白は總ての色を反射して生ずる色なりとか、然して此白をもて總身を飾れる看護婦諸嬢を其純白に對しても必ず純潔ならざるべからざるに、濁に染み易すきは亦白色の欠點で、兎に角「患者と看護婦」世の噂に上り易き、外觀と內容との矛盾又甚しいかな。

（以上二作盲蛇）

▲看護婦は姦語婦なり何でも姦しく語る者なり集れば好んで醫者や患者の品定めやら世間話やら遂には患者の御惚氣まで語り出すに於ては實に此の命名は虛てはないのである。

（皷　　晩）

▲一般に看護婦諸嬢の御容體を見るに孰も〳〵生理的美人の好モデルてある此は採用の際特に此ういふ體格の人達の撰ばるゝのか又は就職後攝生の結果斯く御肥遊ばさるのかは知られども、兎に角も、當に張り裂け千切れ落る許の頰肉、又肩幅は無人等が高座で上下を著けたかの樣、胸から御腹は相角取や布袋樣の親類筋又手足は大根をくつけたるが如くて其の重き體を其の太き足もてドシン〳〵と運び步かる處先づ大黑樣がの土表入と違はあるまい從つて得て斯かる御方々は患者や何かを踏み付けにするものだ。

（八　尺　捧）

▲あはれ五尺の體肥を捧げ國に盡す武士が奮鬪の末身には玉傷刀傷矢竹に逸る精神も此傷の爲め消え去らんざる時雪の如き淸き姿したる看護婦の其の白き袖も紅の血汐に染めつゝ雪の如き繃帶し懇なる看護に逢へば一旦挫けたる勇氣も亦湧き起るに非ずや

▲血は上づて沸へかへり鼎の沸くといはんか、志想は亂れて麻の如しといはんか餘りの頭腦混雜に身の世も忘れ狂せる患者も彼の雪の如く淸き

看護婦が介抱に、熱したる血も沈まり志想も落付くは、實に看護婦が功と謂ふべし。

（以上二項讀美田人）

▲妾は看護婦ですが元は女學校の教育まで受けました身が今此樣になつて居るとて御友達は御笑ひになりますけど皆樣は職業は神聖で甲乙の差別の無いのを御存じないでしようか、友達の或る方は銀行家の奥樣になつて済して御出でだけれど只だ朝から晩まで御化粧り許り爲し居と又晩には何に晩餐會だとか何とか御騒ぎになつて居りますが只だ何も働かず亭主の御金で御飯ばかり食べて居らるゝ事は何といふ不心得な方でしよう人間として此世にあるからは、自らの天職を全ふせん爲め何か始終職業は執つて居なけりやならぬ譯でしよう、其を朝から晩まで寢て許居て大切な御飯を喰ひ潰するとは實に沙汰の限てしようこんな人が社會に何御爲が出來るもんですが、只た〳〵穀潰に過ぎないのでしよう、其から見ると妾は敢て自慢ではありませんけど、折角成しかけたる研究も忘れ病魔の爲めに防けられ、千斛の恨も呑で病者を慣る人や又、矢彈の間に奮闘し殘念にも敵彈に傷き天幕に無念の涙を呑ひ縛る軍人も皆妾等が手に介抱し之を愈すではありませんか實に妾等は人命救助の礎で社會のクインと言つてもよいのですよと或る女學校出の看護婦の氣燄であつた、一應は道理のある事ながら此は看護婦は過言婦の言である、又或る看護婦の小言に曰く、ほんに妾等ぎ朝から晩まで見るも嫌らしは患者の給仕ととなり又彼の青二才の唐変木は氣障なドクトル殿の小使となしおりを持つて來いとこれを運んで行け向ふをあゝしろ、此處をしろほんに氣械となつて動かねばならずおまけに汚穢屋然たる仕事まで爲なけやならぬとは、もう〳〵堪つたものではない此は人格を無視して居るではありませんか、妾等だつて、醫者や患者と同等の人格といふ物は持つて居ますのにと。

（閉口道人）

▲クドトルと看護婦とは一般に中々面白いコントラストを爲して居るだ、ピツコクしたハイカラ姿成る程一點だけに就いては姿は奇麗い分けてコスメチツクで堅め、眼には金縁の眼鏡鼻の下には八字の鬚を蓄へられ、器は獨逸式か何系の細ツリしたる疑無論地作は二等、此の樣に各點は非常に立派だけれど全躰は頃に調和は爲で居らぬ折角の御作も只だ驚に見ゆる許のドクトル殿、又一各點頃ては別段洒落な處も見えぬが全躰が調和して所謂前に述べた紙白美然し其躰格は白の如き御方、此御出夕方が手を取つて庭まで散歩なさる時は、まるで地藏樣で二王樣が一所に散歩する樣な有樣、面白い對照てはないか。

（ひゐき生）

課題

▲納涼（七月十八日）

▲蚊（八月十八日）

新刊批評

死の問題

曉烏敏氏著

文明堂發行

「死の問題」は雑誌「精神界」の曉將曉烏敏氏が「過去二年間に於ける我が信仰の餘瀝なり、羅惑の集成也」と稱するものにして「全篇悉く死の問題を論ずるにあらず。偶死の問題を記する多かりしため、羅惑集に名く

るに「死の問題」を以てせしのみ。故に本書に適當なる名を求むれば靜觀錄、沈思錄、靈感集など然りしならんかと思はる』と斷はられしを見れば其內容の大體を推するに難からざるべし。詩人的情感と宗教家的思想と相待ちて織り成せる名篇、讀んで興深く、思うて味盡きず。實に此種の述作に於て多く見るを得ざる好著なり。吾人は信仰の點に於て著者と其見解を同じうするものにあらずと雖も、少しも不快の感を起すことなく、讀過清風の兩腋を吹くが如き思あるは全く著者の眞摯にして熱誠なるによらずんばあらず。時は炎熱、世は戰亂、人皆濁界の清泉に掬まんと欲するの際斯の如き好著の出でしは誠に其機を得たりといふべし予等は滿幅の誠意を以て此著を江湖に推薦するものなり。今一例として「逆境と佛」なる短文を引用せん

汽車に乘りし時、傍に四才ばかりの子をともないし一婦人あり。子婦人の制するを聞かで、母を離れて車窓にのみ倚る。時に汽車隧道を通りぬ、この時この子驚いて母の膝にのぼり、母の胸にその顏を沒しぬ。

我之を見て思ひぬ。我等平生事なき時は常に佛に離れて危きに近きつつあり。されど一度逆境の隧道に入る時、直ちに佛の慈悲にすがるは正にこのところの味なりと。

これ篇中の名文なるが爲めに引用せるにあらず。一篇々々皆特殊の味ありて容易に甲乙を附すべからず、ただ著者が些細の事にもよく詩情と宗教心とを有せるを示せるのみ。表紙の意匠一寸面白き所あれども裏面の健腦法の廣告甚だ感服せず、又書中「たゞすらに」といふ言葉の多きは頗る目障りなり。些細なる事なれども書肆及び著者の一考を煩はす

（正價金二十錢）

▲王陽明詳傳

文學士高瀨武次郎著
文明堂藏版

「陽明先生の詳細なる事蹟性行を青年讀者に知らしめんが爲めに」書かれたるものにして平易明白を主とし、引用せる遺文は意を以て大體の主旨を摘譯したるもの多きも、原文を知らんと欲する人の爲めに、括弧內に其書名をしるし、且つ附錄として、諸家の學說を載せ、丁寧懇切なる著作なり。世皆戰爭物に熱して通俗文學の著作すら賣行惡しき今日此頃、かゝる儒界の偉人を紹介せる著者の苦心と書肆の勇氣とは誠に多とすべきなり

（定價七十五錢）

▲野蠻なる露國

足立北鷗口述
育成會發行

足立北鷗氏が露國滯在中見聞せる事項及び諸書を參酌して誤りなき事實を口述せるものにして、露國の風俗人情等を推察するに益する所少からず。其題目の二三を擧ぐれば「海水浴の裸體男女と湯屋の男女混浴」「首府の大通に於ける賣春婦」「トルストイの惡い樂」等にして讀者の好奇心惹く事項乏しかれば時節柄社會の歡迎を受くべしと思はる

（定價三十五錢）

▲聖德太子傳

境野哲著
文明堂藏版

世界偉人叢書の一篇にして我國史中の一偉人にして隱れて一疑問たる聖德太子の一生を敍し、且つ其時代及び其周圍の事情にも說き及ぼしたるも

のなり、總て平易にして明瞭ならんことを期せられたるものと覺ぼしく文體も言文一致を用ひられたり。第一章「太子傳を研究する必要」の如き大いに太子の爲めに寃罪を洗ぎ、又大いに著者の氣を吐けるものといふべし。卷頭に挾める繪畫數葉本文と併せ見て益する所多し。

（定價四十五錢）

▲リカーガスとニューマ

森晋太郎譯
尚友館發行

プリユーターク英雄傳の第二卷なり。篇中の人物は第一篇の如く神話的の分子を含まず、正史の上に於て偉大なる事業をなせし人なれば歴史的興味は第一篇よりも遙かに深し。かの勇武比なきスパルタ人を造り出せしリカーガスとロームの政をとりしニューマと各一異彩を放ちて面白く。殊に二人の對比論の如き尤も興深き論文なりといふべし。

（定價三十五錢）

▲佛教通觀上下二卷

井上圓了著
文明堂發行

「抑も佛教は多岐多端に分るるも其要は身を生死の外に立たしめ心を不動の地に泥かしむるに外ならず其理を講ずるもの是れ佛教哲學なり今や戰國となつて海陸戰を交ゆ是れ勅語の所謂一旦緩急義勇奉公の秋にあらずや、義勇とは義は忠節の意勇は武勇の意に解して不可なかるべし而して武勇の要は身を生死の外に立たしむるにあり忠節の要は心を不動の地に置くにあり然れば今日は正しく佛教哲學を實現するの時なり但其說く所由來高尙に過ぎて通俗をして解し難く知り難からしめたるを遺憾とす故に其解釋を通俗化して一般に普及の道を開くは實に目下の急務といふべし是れ本書の發行ある所以なり」てふ理由を以て著はせる本書なれども、斯道の造り深き博士の事なれば必ずしも戰爭のために佛教を捻ぎ廻れる譯にはあらず。深奧なる教義を通俗に解譯し一般の社會に佛教の何たるかを知らしめ、生死の外に超然たらしめんとの意に外ならざるべし

（定價各廿五錢づつ）

▲ふた子姉子 世界お伽噺第五十八篇

小波篇
博文館發行

ルーマニヤのお伽噺「金の星を持つた二子」を飜案したる「二子姉子」及びシシリヤのお伽噺「娘の智」の二篇を集めたるものにして相聯らず輕妙にして躓なく、至極面白き物語なり

（定價八錢）

▲滿韓大觀

博文館發行

太陽の臨時增刊にして創業第十七週年の紀念として出版せるものなり。歴史、地理、軍備等の事項よりあらゆる細目に渉りて縱横に記述せる册子、時節柄殊も必要なるものなり。時勢に志あるもの座右に缺くべからず

（定價三十錢）

▲少年日露戰史第一卷 開戰の卷

岩谷小波論
博文館發行

少年の讀物として出せる日露戰史の第一篇開戰の卷、平易にしてよく大體洩さず、誠に少年子弟絕好の讀物なり。附屬の戰國讀本亦なか〳〵に勇ましし。

（定價十二錢）

▲火の柱

木下尙江著
平民社發行

次號の細評

（定價三十五錢）

戰事彙報

第五

戰事彙報

●賽馬集の占領

黑木大將報告六月九日午前大本營着電

一、我一部隊は本月七日寮馬集附近に在りし敵を四方站方面に擊退して午後六時賽馬集を占領せり同地に在りし敵は步兵一大隊と砲二門なり我損害は戰死卒三負傷下士以下二十四名敵の損害は戰場に遺棄せし死傷二十三捕虜將校二卒五其他土人の言に依れば敵の將校二下士卒七十負傷せりと

二、通遠堡方面に派遣したる我一部隊は本月六日午前林家臺附近にて敵の步兵五六十に遭遇し之を擊退せり又七日午後五時過より約二時間戰鬪の後張家石附近に在りし敵の步兵約六中隊騎兵三百を通遠堡方向に擊退せり敵の死傷七八十我戰死下士以下四負傷十六

●岫巖の占領

六月十日午前着電黑木大將報告

我一部隊は昨八日午後大虎山附近に於て敵を擊破し同じく五時二十分大孤山上陸軍の一部隊と共同して岫巖を占領せり敵は兩部隊の前面に在りし者を合せ騎兵約四十砲六門にして析木城及蓋平方向に退却せり我損害は戰死卒一、負傷池端(?)步兵中尉下士以下二十一名にして皆輕傷なり

六月十日午前大本營着電大孤山上陸軍報告

我一部隊は第一軍の一部隊と共に八日午後岫巖附近に在りし敵を退擊して午後五時二十分岫巖を占領せり

岫巖に在りし敵は騎兵約千五六百砲六門にして其砲兵及騎兵の一部は析木城方向に騎兵の大部は蓋平方向に退却せしものゝ如し我損害は戰死卒二負傷三原少尉下士卒七

●得利寺附近の戰鬪公報

得利寺附近に於ける戰鬪に關する遼東半嶋上陸軍司令官の報告左の如し

一、報告

（六月十四日午後十時）
（六月十五日午前大本營著電）

軍の主力は本日（十四日）左右兩縱隊となり鐵道線路に沿ひ南部瓦房店の東にありし敵を驅逐して北進せしが午後五時頃敵兵更に龍王廟より大房身に亘る線に陣地を占め彼我の間に砲戰約二時間の後我軍は瀾家屯より陸河屯に亘る線を占領するに當り日は暮れたり我軍に若干の損傷あり本日軍の一部たる他の一縱隊は敵の右側を脅威し我が側背を掩護する爲め復州東方の地區を前進して鄧家溝より那家嶺に亘る線に進出せり、軍は明十五日一部をして敵の右側を脅威せしめ主力を以て前面の敵を得利寺北方隘路内に壓迫せんとす

二、報告

（十四日夜十二時）
六月十六日午前大本營著電

其後の報告に因れば北部龍王廟より大房身に亘り陣地を占領しある敵兵は漸次に増加し頑固の抵抗を試みんとするもゝ如く軍は明朝戰を決せんとす

三、報告

（十五日正午）
六月十五日午後大本營著電

軍は豫定の如く今拂曉より得利寺附近の敵を攻擊し目下戰鬪闌なり

四、報告

（六月十五日午後十時半）
六月十六日午前大本營著電

得利寺附近の敵の兵力は約二師團にして大房身より城子山に亘る陣地を占領し軍は今十五日拂曉之が攻擊を開始し其主力は鐵道線路に沿ひ一隊は離家屯方面より攻擊前進し午前九時頃軍の左翼にありし一隊は東龍口方面より正午官騎兵隊は買家屯方面より共に此戰鬪に參與して敵を得利寺附近に包圍して激烈なる戰鬪の後之を北方に擊退し軍旗及速射砲數門等の鹵獲あり我死傷は昨日（十四日）と本日とを合し約一千人以内

を算す可く敵の死傷頗る多大なる可きも未だ詳ならず

五、報告

（六月十五日午後十一時）
六月十六日午前大本營著電

本日（十五日）の戰鬪に於て露軍は我が國旗を濫用し現に我が將校斥候は露國兵の我國旗を樹て行進するを目擊し我砲兵は之を認めて射擊を中止せり

六、報告

（六月十六日午前十時）
六月十六日午後大本營着電

軍は昨十五日拂曉より得利寺附近に於て約二師團半の敵を包圍し午後三時頃迄激烈なる戰鬪を繼續して遂に之を北方に潰走せしめたり未だ詳細の報告に接せざるも速射砲十四門を鹵獲し狙擊步兵第四聯隊長以下約三百名を捕へ敵の戰場に遺こせし死傷者は五百名に上るべし

●常陸、佐渡兩船の遭難

常陸丸は十五日午前十時半頃敵艦三隻に追はれ全速力にて前進す敵は初め空砲を放ち引續き實彈にて速續急射擊し死傷するもの多し此際彈藥庫を開く間もなかりしが敵艦は更に接近し側面より急射擊を爲し汽鑵破裂乘組者死するもの多し又第三艙より失火す藤崎二等卒は分隊長沼里伍長の命に依り隊聯旗を保護せんとせしに爲隊長須知中佐は既に軍旗を燒き旗竿を碎き居られ汝等は海上に泳ぎ歸りて此旨を報告せよと命ぜられたるが間もなく砲彈肩に中りて戰死せり將校の大部は割腹又はピストルにて自殺某中隊長は海に投ず此間ボートを卸す間もなく船長事務長海に投ず監督將校戰死せり二等運轉士自殺敵は更に第三回の急射擊を爲し常陸丸は全く沈沒す浪高く敵艦の行動不明なれども前方に有りし佐渡丸は西北に向て進行せり其後一隻の漁船にて三十七名救助せられ六連島に着き土佐丸に救はる

沈沒の隊附は一隻の端艇あり三十名許乘りたる樣なれども行先知れず

救助せられたるは田所軍曹外兵卒三十四名火夫一名船内人夫一名なり内輕傷十二名稍や重傷一名あり土佐丸にて宇品に送る

●常陸丸の最後實況

同船の敵艦に遭遇するや敵は約千メートルの距離より熾に砲彈を發封せしも彈着正確を缺き一も命中せざりしかば敵艦は更に五百メートルの距離に近接しロシヤ號方より發射せる約十發の巨彈は悉く船體に命中し殊に最後の一發は機關部を破碎し熾に白烟を揚ぐると共に航行は俄然停止するに至れり此砲擊に依り乘員中數名の死傷者を出せり斯くて本船の進行停止するや敵艦は一且佐渡丸の方向に去りしも再び最大速力を以て約二百メートルの右舷側に近寄り來り榴散彈を亂射する事雨霰の如く之が爲め約二百餘名の死傷者を出せり是より先き敵艦の顯出するや乘組の兵員は指揮官の命に依り何れも船室内に靜座後命を待ち居たるが是に至り到底免るべからざるを思ひ各々最後決死の覺悟を爲し或は海中に躍り入るあり又は自殺を遂ぐるもあり聯隊長須知中佐は部下に命じ恭しく聯隊旗を取出し重量物を附して之を海中に沈め續いて重要書類等を燒き盡したる後中佐は徐ろに軍刀を抜き割腹して自殺せり之と前後して橋本大尉はピストルを以て長尾中尉は軍刀を以て孰れも自殺を遂げ其他將校以下兵卒等之に傚ふ者甚だ多かりしが中には自殺せんとするも刄物を取り寄するの暇なく身を躍らして海中に投ぜし者約百名許りありしも三島大尉も其中の一人なりしが遂に其行衛を知らず余等三十名は夫々救命具を持ち本船備付のボートに乘移りたるに敵艦より射擊を受け内一發は狙ひ鋭くボートの右舷に命中して之を貫きたる爲め一名の即死者を出し倘ほ外に二發命中せしも幸に痕跡を遺したるのみにて人命には異狀なかりき斯くて漸くにして佐渡丸に漕付け無事なるを得たりボートにて常陸丸を顧

みたるに敵艦ロシヤ號方より水雷を同船の船尾に向け發射すると見る間に船首を高く上げ直立の姿となりて忽ちに海底深かく沈沒せり此時午後三時頃なりしと覺ゆ船長其他高等船員等も木船と共に男ましき最後を遂げたるものゝ如し

●敵艦來襲に對する上村艦隊の行動

上村第二艦隊司令官報告
六月十九日午後大本營着電

十五日午前八時哨艦對馬の無線電信に依り敵の艦隊沖ノ島附近に現はれ南方に航行するを知り直に水雷艇隊を急行せしめ對馬壹岐間の水道を警戒し四方より來る船舶に對し竹敷に避けしむべきを命じ又門司港務部に電報を發し西航の船舶を停止せしむべきを傳へ在竹敷及哨艦服務中の諸艦に無線電信を以て至急來會すべきを命じ本隊は對州南端を經て急航せり當時天候次第に險惡となり暴雨之に伴ひ屢々後續戰隊を見失ふに至りしが神崎附近に至り一艇隊を本隊に合せ敵艦隊を北方より壓せしが爲め針路を沖ノ嶋北方に取れり此間哨艦對馬は絕へず敵艦隊の觸接を保ち敵情に關する報告を努めたり正午哨艦對馬より無線電信を以て敵艦隊は沖ノ嶋南方約十五海里にありて航進すとの報に接し次て濛雨の爲め敵影を見失ひたりとの報に接す午後一時半沖ノ嶋の南約五海里に於て再び敵艦隊を發見せしも濛雨の爲め直に之を見失ひたりとの報に接せり依て針路を右轉し敵艦隊の所在地たる沖の嶋の南方に邁進せしが此時濛雨最も烈しく視界益々狹きが故に敵と會せば直に接戰距離に入るべきを思ひ益々各艦を戒飭しつゝ航進し敵を搜索せしも遂に之を發見するを得ず此時哨艦對馬列に入るの報に接す茲に於て本職は敵艦隊が濛氣濃密なるに乘し既に北方に退却せしものと判斷し之を追尾せしか爲め針路を北方に轉せしも雨愈々烈しく視界益々狹く敵影を發見するの望み殆ど絕ゆ依て翌早朝敵と會戰するの望みを以て速力を増加し敵の退路を扼するの地點に針路を定む此間我艦隊諸艦が高速力を以て濛氣四塞の間に不規の運動を行ひ毫厘の故障なかりしは本職の滿足する所なり此夜艇隊をして索敵運動を執らしめしも其目的を達するを得さりし十六日黎明豫定地點に達す此時天候回復し視界亦廣かりしも遂に敵の隻影を見ず依て更に針路を轉じ索敵運動を繼續せしも其効なく十七日敵艦隊は尚本邦沿岸に在るものゝ如きを以て之を邀擊せんが爲め巡洋艦隊を以て搜索列を張り南下せり此日天候至て平穩にして視界廣く心窃かに搜索の好望なるを期せしも遂に敵艦隊に會せず同日午後對州の北端を距る北東約百海里の地點に來りしに無線電信に依り敵は北海道方面にあるの情報に接したるが故に索敵運動を止め今十九日歸港せり此行動中約四晝夜の搜索運動は遂に何等の功なくして歸航の止むを得ざるに至りしは深く遺憾とする所なり終に臨み本職は玄海灘に於ける遭難諸士に對し深く痛恨哀悼の意を表するものなり

●旅順艦隊の出港敵艦の沈沒其他の損傷

六月二十四日午後十時大本營に達せし東郷聯合艦司令官報告の要領左の如し

二十三日午前十一時旅順口外にある哨艦より無線電信を以て敵艦ペレスウエート外七艘驅逐艦九隻港口附近に出づとの報に接し特別任務に從事するものゝ外艦艇を舉げ發進す敵は戰鬪艦六隻巡洋艦五隻驅逐艦十四隻にして南下を試みんとするものゝ如くなりしも日沒後に至り港口外に假泊せり

昨夜我驅逐艦水雷艇の大部分は旅順口港外に於て敵艦隊を攻擊し少なくもペレスウエート型戰鬪艦一隻は轟沈したるものゝ如くセバストポリ型戰鬪艦一隻チアナ型一等巡洋艦一隻は今朝曳かれて港内に入るを見たりとの報に接したれば多分大損害を受けたる者ならん我艦艇には大なる損害なく驅逐艦白雲は敵彈の爲めに士官室な

破られ戰死下士卒三名負傷海軍少軍醫宮川正猶外二名を出だし千鳥は後部汽罐室に一彈を受けたるも死傷なし又第六十四號水雷艇第六十六號水雷艇には少許の損害あり其他皆無事なり

●分水嶺の占領

太孤山上陸軍報告

六月二十七日午後五時二十分大本營着

上陸軍は廿七日午前五時より十一時に亘る激戰の後ち分水嶺（岫巖西北方約九里）を占領す敵は潰亂して析木城方向に退却せり敵の兵數は步兵五大隊騎兵二聯隊砲十六門なりき

大庭少佐戰死し其他死傷百名內外なるべし

●露艦元山來襲公報

其　一

露艦水雷艇四隻六月三十日五時三十分入港せり

其　二

露國水雷艇は都合五隻にして尙ほ沖合に三隻の軍艦らしきもの見え居れり

其　三

露國水雷艇は只今（午前六時二十分）居留地を攻擊しつゝあり

其　四

露國水雷艇六隻は午前六時四十五分砲擊を止め碇泊中の小蒸汽船帆船各一隻を擊沈し七時二十分港外に去れり

其　五

露艦は軍艦三隻水雷艇九隻驅逐艇らしきもの一隻にして九時半安邊沖を東南に向て去りつゝあり

其　六

露艦砲擊の爲め居留地の受けし損害は極めて瑣少なり小蒸汽船は仁川堀久所有のコウン丸帆船は昨夜北海道より入港せし清沙丸にして居留地の受けし敵彈は二百發內外ならん

其　七

擊沈されし清沙丸（百十五噸）乘組員の言に據れば廿四日鏡城津沖合にて探海燈に遭へりと居留民は目下避難中なるも皆無事

●滿州軍總司令部

征露軍總司令部組織せられ司令官參謀長左の如く補せられたり

元帥陸軍大將正二位
大勳位功二級侯爵　大山巖

補滿州出征軍總司令官

陸軍大將正三位勳
一等功三級男爵　兒玉源太郎

補滿州出征軍總參謀長

●參謀總次長後任

大山元帥兒玉大將の出征に付き參謀總長次長の後任左の如し

元帥陸軍大將正二位
大勳位功二級侯爵　山縣有朋

補參謀總長

陸軍少將正五位
勳四等功四級　長岡外史

補參謀本部次長

上條辰藏君詳解

ヒックウヰックペーパース

總クロース金字入美裝◎用紙好良印刷鮮明◎挿畫數多
◎紙數約四百頁◎正價金七拾錢◎郵送料金八錢

チャールス、ヂッケンスが一代の傑作たる本書が**英文壇の寶典**として普く世人に推重せらるゝ事は何人も知る處なるが、趣向の奇絶なる滑稽の妙を極め殆ど我國の**膝栗毛を凌ぎ**一讀人をして捧腹絶倒せしむ**精細を極めたる註解**は原文の三倍以上に及び**故事、熟語、俗語、文法**等に渉りて遺漏なきのみならず、其必要なるものに至りては是れが**應用の方法**をも解明せられたりし故に本書は**ヂッケンス研究の關鍵**たると共に一面は慥に好個の**英作文、文法研究の資料**なれば一般英學者の一讀せられん事を望む

いざさらば

小島烏水君序　河井酔茗君題詩　千葉江東君新著　一條成美君畫

用紙好良
印刷鮮明
正價金拾錢
郵稅金四錢

故郷、故郷、爾はげに好絶**詩題**なるかな、古來幾多の詩客を促して、杼情の筆を執らしめし爾は、今更に濃情多感の作者を刺激して這の一篇**無韻**の**哀詩**を作らしむ。事は秋雨そぼふる客窓の夕遊子故郷の荒癈を、故郷の舊友に聽くに起り、ふる里の山川よ**いざさらば**一蓋の管笠を傾けて長く故郷の空を離るゝに終る。一篇具さに作者の熱情を傾注し盡して**感愴縱橫、凄哀無限、**秋風盡きせざるの恨を吹いて白く人をして五聲の悲しきに堪へざらしむ

發賣所　東京市神田區裏神保町　上田屋書店

投稿規定

毎月十八日を以て編輯總締切日と致し候に就き何卒それまでに着する樣願上候猶投稿諸君は**住所記入**を御忘れ無き樣被成下度候宛名は

東京市本郷區駒込西片町拾番地反省社

書籍の取次

愛讀者諸君の便宜を計りて今後本社にて書籍の取次を致し候東京市内にて發行の書籍は總て正確迅速に取次可仕候に就き申込の諸君は書名著者發行所等を認め代金及び遞送料を前金にて御送り被下度候

中央公論定價表

		郵稅共
一冊	金拾貳錢	金拾參錢
六冊	金六拾五錢	金七拾壹錢
十二冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓卅貳錢

中央公論廣告料

一行(五號文字二十四字詰)	一回	金貳拾錢
四分の一頁	一回	金貳圓五拾錢
半頁	一回	金四圓
一頁	一回	金八圓
表紙の二三四一頁	一回	金拾五圓

廣告一手取扱　博報堂

送金注意

一郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名并に社名を拂渡局所を**東京駒込**局と指定せられたし弊社印鑑は駒込支局へ差出有之候に付決して途中にて盜取せらるゝ憂なし

一郵劵代用の場合は必ず壹割増のこと

一誌代、廣告料とも總て前金にあらされは御需めに應せす

一前金切の節は帶封に朱書いたすべくに付早速拂込まれたし然らされは其號限にて發送を止むべし

一雜誌の發送を以て領收の證といたすべくに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添えられたし

一御拂込み金額の端金の場合には左表に準し御勘定可致に付御注意相成たし

一金七拾壹錢以下　一部金拾參錢の割

一金壹圓參拾貳錢以下　一部金拾貳錢の割

都下大賣捌所

神田表神保町　東京堂

神田裏神保町　上田屋

本郷四丁目　文明堂

明治三十七年六月三十一日印刷
明治三十七年七月一日發行

發行兼編輯人　武田臨松
印刷人　清水金右衛門

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地（電話下谷九一九）反省社

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

中央公論　每月一回 明治三十七年七月一日發行

明治三十年一月廿九日 第三種郵便物認可

帝國文學

◉每月十日一回◉發行◉定價 一冊十二錢 六冊七十二錢 十二冊一圓三十二錢◉郵稅一冊一錢宛

第拾卷第六號(六月十日)發行目次

發行所 東京市京橋區銀座壹丁目 大日本圖書株式會社

發行所 (電話下谷九一九) 東京市本郷區西片町十番地 反省社

No. 184.